

「持続する志」

—くまもとアートポリス36年—

Exhibition of Architecture KUMAMOTO ARTPOLIS 2024

総合記録

くまもとアートポリス建築展2024 — 総合記録 — くまもとアートポリス建築展2024 実行委員会

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

くまもとアートポリス建築展 2024 実行委員会

Exhibition of Architecture
KUMAMOTO ARTPOLIS 2024



● 開催挨拶 木村敬 熊本県知事 2

● メッセージ 伊東豊雄 くまもとアートポリスコミッショナー 3

● くまもとアートポリス36年のあゆみ 4

くまもとアートポリス建築展2024

● 事業概要 8

● シンポジウム

 メインシンポジウム 15

 交流会 56

● 展覧会

 巡回展 59

 トークイベント 70

● アートポリスバスツアー 95

● 建築ウィーク 103

● モク活シンポジウム 111

● 創造的復興プロジェクト 117

● くまもとアートポリス推進賞 121

● 協賛事業 125

● 総括

 メッセージ 桂英昭 くまもとアートポリスアドバイザー 130

 末廣香織 くまもとアートポリスアドバイザー

 曾我部昌史 くまもとアートポリスアドバイザー

 総括 小路永守 熊本県土木部建築住宅局長 133

参考資料

● 広報／広告 135

● 実行委員会

 くまもとアートポリス建築展2024実行委員会会則 142

 委員構成、協力・後援団体 143

発刊にあたって

木村 敬

くまもとアートポリス建築展2024実行委員会会長
熊本県知事



「くまもとアートポリス」は、熊本市下の自然や歴史、風土を生かしながら、後世に残り得る優れた建造物を造り、地域の活性化に資する熊本独自の豊かな生活空間を創造する取組みとして1988年(昭和63年)に創設し、36年を迎えました。

この取組みの骨格をなすプロジェクト事業は、県内の公共施設を中心にコミッショナーが設計者を推薦し、文化的に優れた建築物を生むことを目指すもので、社会の変化に適応しながらこれまで121のプロジェクトを実施してきました。

近年では熊本地震や令和2年7月豪雨からの創造的復興に資するプロジェクトとして、被災された方の憩いの場となる「みんなの家」をはじめ、「熊本地震震災ミュージアムKIOKU」、「南阿蘇鉄道高森駅・交流施設」、「芦北町地域優良賃貸住宅友田団地」、「高橋酒造田野蒸溜所・交流施設」、更には、新たなプロジェクト「相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設」など、県内被災地の復興に向けた取組みや地方創生を後押ししています。

今回、こうした「くまもとアートポリス」の取組みについて広く国内外に発表するとともに、熊本の建築文化の更なる発展を願い、「持続する志ーくまもとアートポリス36年ー」をテーマに「くまもとアートポリス建築展2024」を開催いたしました。

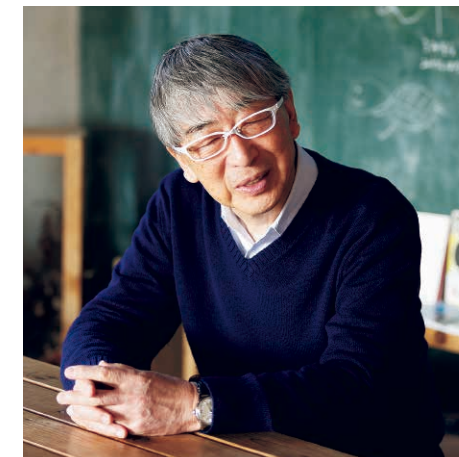
このテーマに基づき、これまでのアートポリスの取組みを振り返る展覧会やアートポリス関連施設と連携した見学会「建築ウィーク」、近年のプロジェクトを巡るアートポリスツアーや創造的復興に資するプロジェクトの完成見学会、そしてこれからの公共建築や木造建築について考えるシンポジウムなど、様々な取組みを県内各地で実施しました。これらの取組みには、国内はもとより韓国や台湾などから多くの方々に御参加いただき実り多い成果をあげることができました。これもひとえに、関係者の皆様の御尽力と御支援のおかげであり、心から感謝申し上げます。

「くまもとアートポリス」が豊かな生活空間を創造し、熊本の建築文化の評価を高めるとともに、将来にわたって継続していくためにも、皆様の格別の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

くまもとアートポリス 建築展2024を終えて

伊東 豊雄

くまもとアートポリスコミッショナー



©藤塚光政

1988年に始まった「くまもとアートポリス」事業が36年目を迎えた。県の公共事業としては奇跡的に持続していると言えよう。そこで4年に1度開催される今年のイベントでは、これまでの活動を振り返って「くまもとアートポリス36年とこれから」をテーマとして展示やインタビューが行われた。

展示では36年を4つの時期に大別した。第1期は公営住宅、第2期は木造建築、第3期は学校建築、第4期は災害対応と位置づけ、各時期を代表する建築物を展示して4人の建築家へのインタビューも同時に試みた。

思い返せばさまざまな時期があり、存亡を危ぶまれる局面もあったが、今日まで5代の知事によって事業は継承されている。2016年の熊本地震に際しては木造仮設住宅や集会所等の建設に関してアートポリスが積極的に関与したこともあって現在は県民の間にもかなり浸透しつつある。

第4期の災害対応の時期には、仮設住宅内の集会室、談話室や被災した公民館を「みんなの家」と命名し、木造の小さな公共施設として100棟余りが建てられた。その多くは仮設住宅解体後もコミュニティ活動のために住民の利活用に供している。

メインシンポジウムのテーマ「新しい公共性とは何か」もこの「みんなの家」の先を見つめてのことである。出演者の家成俊勝(ドットアーキテク

ツ)、金野千恵(teco)、佐々木翔(インターメディア)、森田秀之(マナビノタネ)とアートポリスアドバイザーの3氏及びコミッショナーの私、計8名によるシンポジウムはゲスト4氏の活動報告に基づいて議論が交わされた。自然災害の頻発する我が国では、平常時から小さなコミュニティの場を用意しておくことの重要性が指摘された。これからの公共建築は「みんなの家」のように、特定の機能に固執せず、あらゆる年代層の人々に開かれた施設でなくてはならない。そして毎日でも訪れたいためには、各自が単に利用するだけでなく、日常的にコミュニティの活動に参加して協働することが重要であることも確認された。

今回のイベントには台湾及び韓国からそれぞれ数十名の参加があり、久々に国際色豊かな大会となった。無事成功裡に終ることが出来たことに対し、主催した県の方々、特にアートポリス班の方々に厚く御礼を申し上げる次第である。

くまもとアートポリス36年のあゆみ

※アートポリスプロジェクトは、完成時期

1988	5	くまもとアートポリス発足（磯崎新コミッショナー就任）
	11	くまもとまちづくりシンポジウム（熊本市）
1989	5	熊本市上江津湖畔トイレ
	10	加久藤トンネル換気所
	10	熊本市花畑パークトイレ
	10	くまもとアートポリスシンポジウム（熊本市）
1990	2	三角港フェリーターミナル（海のピラミッド）
	6	くまもとアートポリスシンポジウム（八代市）
	11	熊本北警察署（現 熊本中央警察署）
1991	2	石打ダム管理所
	3	八代市立博物館・未来の森ミュージアム
	3	湯の香橋
	3	球磨工業高校伝統建築コース加工組立室棟
	5	熊本市営新地団地A
	7	再春館レディースレジデンス
	8	県営保田窪第一団地
	11	くまもとアートポリスシンポジウム（山鹿市）
1992	3	熊本市営新地団地B
	3	県営帯山A団地
	3	清和文楽館
	3	上天草市合津終末処理場管理棟
	3	TOTO AQUAPIT ASO（阿蘇山上公共トイレ）
	4	県立装飾古墳館
	5	つなぎ物産ギャラリー
	9	玉名天望館
	9	草地畜産研究所畜舎
	10	県立美術館分館
	11	湯前まんが美術館・公民館
	11	白川橋景観整備
	11	くまもと国際建築展「くまもとアートポリス’92」
1993	3	県営新渡鹿団地
	3	教会の見えるチャペルの鐘展望公園
	3	石打ダム資料館
	10	熊本市営新地団地C
	11	花の温泉館
1994	2	県営竜蛇平団地
	2	くまもとアートポリスシンポジウム（牛深市）
	4	熊本市営託麻団地

1994	7	天草ビジターセンター・天草展望休憩所
	11	くまもとアートポリスシンポジウム（蘇陽町）
1995	3	熊本北警察署坪井交番
	4	くまもとアートポリス推進賞創設
	6	熊本市営新地団地D
	6	熊本市営新地団地E
	6	馬見原橋
1996	8	くまもとアートポリスシンポジウム（八代市）
	3	杖立橋+Pホール
	3	有明フェリー長洲港ターミナル
	3	荒尾警察署長洲交番
1997	11	熊本国際建築展「くまもとアートポリス’96」
	3	うしぶか海彩館
	3	ふれあいセンターいずみ
1998	8	牛深ハイヤ大橋
	2	漁業取締事務所
	3	天草工業高校実習棟・体育館
	3	阿蘇・散墨園
	4	草千里公衆トイレ
	5	高橋髭一コミッショナー、伊東豊雄バイスコミッショナー就任
	6	県立あしきた青少年の家
	8	宇土マリーナハウス
1999	4	不知火文化プラザ
	4	富岡園地公衆トイレ
	6	鮎の瀬大橋
	9	水前寺江津湖公園管理棟
		私たちのまちづくり事業始動
2000	3	熊本県立農業大学校学生寮
	3	阿蘇警察署内牧交番
	11	くまもとアートポリス建築展2000
2001	3	鹿北町アート・プロジェクト
	3	八代市立高田あけぼの保育園
	3	清和文楽邑道の駅公衆トイレ
	5	氷川ダム管理所
2002	3	美里町文化交流センター「ひびき」
	3	苓北町民ホール
	5	合志市保健福祉センター「ふれあい館」
2003	3	小国町立北里小学校屋内運動場
	11	国際交流基金「くまもとアートポリス巡回展」開催　2015年まで
2004	2	新八代駅前モニュメント「きらり」
	3	一の宮直売所「四季彩いちのみや」・加工所「工房阿蘇ものがたり」

2004	3	清和郷土料理館
	7	美里町林業総合センター
	11	くまもとアートポリス建築展2004
2005	3	南小国町営杉田団地・矢津田団地
	4	伊東豊雄コミッショナー就任 / 桂英昭・末廣香織・曽我部昌史アドバイザー就任
2006	11	次世代モクバンを語るシンポジウム(熊本市)
2007	2	地域再編と新しい顔づくりシンポジウム(熊本市)
2008	7	球泉洞休暇村バンガロー
	11	くまもとアートポリス建築展2008
2009	1	芦北町地域資源活用総合交流促進施設(交流センター)
	5	球泉洞休暇村バンガロー(R2)
	7	モクバンに見る新しい木造建築の可能性シンポジウム(球磨村)
2010	2	まち活性・足湯シンポジウム(菊池市)
	7	熊本駅周辺デザインシンポジウム(熊本市)
	11	くまもとアートポリス構造シンポジウム(熊本市)
2011	3	東日本大震災(東北支援・宮城野区のための家)
	3	熊本駅白川口(東口)駅前広場
	3	宇土市立網津小学校
	3	熊本駅新幹線口(西口)駅前広場
	3	白川橋左岸緑地トイレ
	3	熊本南警察署熊本駅交番
	7	宇土市立宇土小学校
	10	公共建築の日熊本駅周辺デザインシンポジウム(熊本市)
2012	3	菊池市街地ポケットパーク
	7	熊本広域大水害(阿蘇みんなの家)
	11	くまもとアートポリス建築展2012
2013	3	宇城市立豊野小中学校
	3	天草アーバ(リップルランド公園東屋及び周辺整備)
	6	くまもとアートポリス二十五周年「自然開き、人と和す」シンポジウム(熊本市)
	7	熊本県立球磨工業高校管理棟
	12	和水町立三加和地区小中併設型校舎
2014	11	アジア国際シンポジウム・国際学生設計コンペティション(熊本市)
2015	2	くまもとアートポリス推進賞二十回記念シンポジウム(熊本市)
2016	2	ホスピタリティと建築シンポジウム(熊本市)
	4	熊本地震(規格型みんなの家76棟)
	10	甲佐町白旗のみんなの家(集会所)
	11	阿蘇内牧温泉みんなの家
	12	西原村小森第2のみんなの家(集会所)
	12	西原村小森第3のみんなの家(集会所)
	12	西原村小森第4のみんなの家(集会所)
	12	益城町木山のみんなの家(集会所A)

2016	12	益城町小池島田のみんなの家(集会所)
	12	益城町テクノのみんなの家(集会所B2)
	12	南阿蘇村陽ノ丘のみんなの家(集会所)
2017	3	仮設を超えて～災害公営住宅とみんなの家シンポジウム(熊本市)
	7	大腸肛門病センター高野病院
	9	美里町くすのき平のみんなの家、御船町玉虫のみんなの家、御船町甘木のみんなの家
	9	宇城市御領のみんなの家、宇城市曲野長谷川のみんなの家
	9	熊本市城南町さんさん2丁目のみんなの家、阿蘇市内牧のみんなの家
	10	熊本県総合防災航空センター
	11	くまもとアートポリス建築展2017
2018	2	宇土市境目第2のみんなの家、宇土市境目第3のみんなの家
	4	宇土市新松原のみんなの家、室第二のみんなの家
	5	くまもとアートポリス三十周年記念シンポジウム(熊本市)
	9	宇土市営境目団地災害公営住宅
2019	1	甲佐町営災害公営住宅(乙女地区・白旗地区)
	2	宇城市豊野町響原災害公営住宅
2020	1	甲佐町住まいの復興拠点施設
	7	令和2年7月豪雨(規格型みんなの家20棟)
2021	3	大津町新小屋、同町高尾野、嘉島町上六嘉、同町北甘木、西原村大切畑のみんなの家
	4	南阿蘇村立野駅、甲佐町麻生原、大津町上揚、西原村風当、同村下小森のみんなの家
	11	くまもとアートポリス建築展2021
	12	立田山憩の森・お祭り広場公衆トイレ
2022	10	第1回モク活シンポジウム(熊本市)
2023	6	熊本地震震災ミュージアム 体験・展示施設
	7	熊本地震震災ミュージアム 体験・展示施設完成記念シンポジウム(熊本市)
	7	人吉市温泉町、同市大工町・二日町、同市宝来町、同市下新町・上新町のみんなの家
	9	八代市藤本・大門、同市中津道のみんなの家
	10	エバーフィールド木材加工場
	10	第2回モク活シンポジウム(熊本市)
2024	7	南阿蘇鉄道高森駅・交流施設
	10	第3回モク活シンポジウム(熊本市)
	11	くまもとアートポリス建築展2024
	11	芦北町地域優良賃貸住宅友田団地
	12	高橋酒造田野蒸溜所・交流施設
		球磨村渡、同村神瀬、同村中園のみんなの家(整備中、渡のみんなの家は完成)
		相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設(設計中)

事業概要

シンポジウム

メインシンポジウム

「新しい公共性とは何か」～若い建築家達の取り組む小さなコミュニティ～

開催日 2024年11月23日(土) 13:00～17:15
会場 ホテル熊本テルサ(テルサホール)
主催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会
共催 一般社団法人公共建築協会
参加者 308名

第1部 基調講演 「これからの公共建築は『みんなの家』である」
伊東豊雄(くまもとアートポリスコミッショナー)

第2部 事例報告 「小さなコミュニティづくりに関わる若手建築家等による事例」
民から立ち上がるcommons／金野千恵(teco)
大阪・北加賀屋 C.S.A.コーポ北加賀屋 千鳥文化／家成俊勝(ドットアーキテツ)
長崎の状況／佐々木翔(インターメディア)
『自分たち事』の場づくり／森田秀之(マナビノタネ)

第3部 ディスカッション 「新しい公共性とは何か」

コーディネーター	曽我部昌史(くまもとアートポリスアドバイザー)
コメンテーター	伊東豊雄(くまもとアートポリスコミッショナー) 桂英昭(くまもとアートポリスアドバイザー) 末廣香織(くまもとアートポリスアドバイザー)
プレゼンター	金野千恵(teco) 家成俊勝(ドットアーキテツ) 佐々木翔(インターメディア) 森田秀之(マナビノタネ)

交流会 時間／17:45～ 会場／ホテル熊本テルサたい樹 (有料)

モク活シンポジウム

「モク活 × 〇〇」

開催日 2024年10月19日(土) 13:30～16:45
会場 ホテル熊本テルサ(テルサホール)
主催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会
共催 一般社団法人熊本県建築士事務所協会
参加者 104名

第1部 事例発表

『モク活 × モクラボ』／真道吉広(ジメント)
『モク活 × サスティナブルオフィスの実現』／一山愉(ソフトシンク)
『モク活 × 続活』／林田直樹(林田直樹建築デザイン事務所)
『モク活 × 街の木質化』／白橋祐二(建築食堂)
『モク活 × プロセスの探求』／三舛正順(南小国町集落支援員)
『モク活 × 地域と交わる』／入交律歌(小国町森林組合)

第2部 ディスカッション

コーディネーター	原田展幸(ライフジャム)
コメンテーター	桂英昭(くまもとアートポリスアドバイザー) 上野瑞樹(セルアーキテクト) 大塚智子(甲斐構造設計事務所) 堀川恵巳子(堀川建築・造形計画) 池田元吉(熊本県木造設計アドバイザー) 水間信介(熊本県木材協会連合会)
プレゼンター	真道吉広(ジメント) 一山愉(ソフトシンク) 林田直樹(林田直樹建築デザイン事務所) 白橋祐二(建築食堂) 三舛正順(南小国町集落支援員) 入交律歌(小国町森林組合)

交流会 時間／17:15～ 会場／ホテル熊本テルサレストラン (有料)

展覧会

巡回展「くまもとアートポリス36年とこれから」

上通会場

2024年11月16日(土)／上通アーケード、熊本市現代美術館(アートラボマーケット)

メインシンポジウム会場

2024年11月23日(土)／ホテル熊本テルサ(テルサホールホワイエ)

観光施設会場

2024年12月4日(水)～15日(日)／熊本地震震災ミュージアムKIOKU(交流ラウンジ)

2025年2月15日(土)～28日(金)／南阿蘇鉄道高森駅・交流施設(ラウンジ棟)

大学機関会場

2024年12月18日(水)～24日(火)／崇城大学(J号館)

2025年1月8日(水)～27日(月)／熊本大学(五高記念館)

2025年1月31日(金)～2月7日(金)／熊本高等専門学校八代キャンパス(コワーキングホール)

2025年2月12日(水)～14日(金)／熊本県立大学(学生会館)

主催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会

協力 上通商栄会、熊本市現代美術館(公益財団法人熊本市美術文化振興財団)、
一般社団法人みなみあそ観光局、高森町、学校法人君が淵学園崇城大学、
国立大学法人熊本大学、独立行政法人国立高等専門学校機構熊本高等専門学校、
公立大学法人熊本県立大学

入場者数 約5,600人

展覧会企画トーフイイベント「小さな風景と建築」

開催日 2024年11月16日(土) 13:30～16:15

会場 熊本市現代美術館(ホームギャラリー)

主催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会

共催 熊本市現代美術館(公益財団法人熊本市美術文化振興財団)

出演者 乾久美子(乾久美子建築設計事務所)

桂英昭(くまもとアートポリスアドバイザー)

参加者 120名

見学ツアー等

アートポリスバスツアー

開催日 2024年11月24日(日)

主催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会

場所 新阿蘇大橋展望所 ヨ・ミュール
熊本地震震災ミュージアムKIOKU
南阿蘇鉄道高森駅・交流施設
エバーフィールド木材加工場

協力 小川次郎(アトリエ・シムサー級建築士事務所)、株式会社エバーフィールド

参加者 111名

建築ウィーク

1 アートポリス関係施設の一斉見学

開催期間 2024年11月11日(月)～24日(日)

主催 各施設(以下のとおり)

施設名	主催	実施期間	参加者数
くまもとアートポリスプロジェクト			
県営保田窪第一団地	熊本県(住宅課)	11月22日(金)、23日(土)、29日(金)	155名
県立あしきた青少年の家	NPO法人ひとづくりJAPAN ネットワーク・三勢体	11月11日(月)～24日(日)	9名
氷川ダム管理所	熊本県(氷川ダム管理事務所)	—	—
阿蘇警察署内牧交番	熊本阿蘇警察署	11月11日(月)～24日(日)	1名
大腸肛門病センター高野病院	社会医療法人社団高野会	11月13日(水)、14日(木)	2名
エバーフィールド木材加工場	株式会社エバーフィールド	11月11日(月)～16日(土)、18日(月)～23日(土)	79名
くまもとアートポリス推進賞受賞施設			
八代広域行政事務組合消防本部庁舎	八代広域行政事務組合	11月11日(月)～24日(日)	10名
株式会社野田市兵衛商店流通団地営業所	株式会社野田市兵衛商店	—	—
出田眼科病院	医療法人出田会出田眼科病院	11月11日(月)～24日(日)	1名
熊本市医師会館・看護専門学校	社団法人熊本市医師会、 株式会社セルアーキテクト	—	—
熊本県民テレビ新社屋	株式会社熊本県民テレビ、 株式会社三菱地所設計九州支店	11月22日(金)	2名
くまもとアートポリス'92年選定既存建造物			
熊本大学資料館 (国指定重要文化財 五高記念館)	国立大学法人熊本大学	11月11日(月)～24日(日)	333名
熊本大学資料館別館 (国指定重要文化財 化学実験場)	国立大学法人熊本大学	11月11日(月)～24日(日)	296名
熊本大学工学部研究資料館 (国指定重要文化財 工学部研究資料館)	国立大学法人熊本大学	11月14日(木)	72名
水前寺成趣園	出水神社	—	—
古今伝授の間	公益財団法人永青文庫	—	—
木魂館	一般財団法人学びやの里	11月11日(月)～24日(日)	20名
計			980名

建築ウィーク

2 日頃見ることが出来ないアートポリスプロジェクトの特別見学会

開催日 2024年11月13日(水) 熊本北警察署(現熊本中央警察署)
・場所 2024年11月16日(土) 宇土市立宇土小学校
2024年11月18日(月) 熊本県総合防災航空センター
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会
協 力 熊本県警察本部、宇土市、熊本県防災消防航空センター
参加者 100名

創造的復興プロジェクト関連イベント

1 南阿蘇鉄道高森駅・交流施設完成見学会

開催日 2024年7月14日(日)
場 所 南阿蘇鉄道高森駅・交流施設
主 催 熊本県・くまもとアートポリス事務局
協 力 太田浩史(設計者)、高森町、南阿蘇鉄道株式会社
参加者 50名

2 芦北町地域優良賃貸住宅友田団地完成見学会

開催日 2024年12月14日(土)
場 所 芦北町地域優良賃貸住宅友田団地
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会
共 催 芦北町
協 力 片山和俊+龍口元哉+太宏設計事務所(設計者)
参加者 44名

3 相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設設計公募型プロポーザル2次審査(公開審査)

開催日 2024年9月29日(日)
場 所 相良村総合体育館
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会、相良村
発表者 yHa architects
永瀬・加藤・山内・丹部 設計共同体
生物建築舎・figraph 設計共同体
ヨシモトアソシエーツ
本岡伊藤・赤熊・CAMPUS 設計共同体
審査員 審査員長 伊東豊雄(建築家、くまもとアートポリスコミッショナー)
審 査 員 吉松啓一(相良村長)
田中尚人(相良村魅力創造会議委員長、熊本大学大学院准教授)
桂英昭(建築家、くまもとアートポリスアドバイザー)
末廣香織(建築家、くまもとアートポリスアドバイザー、九州大学教授)
曽我部昌史(建築家、くまもとアートポリスアドバイザー、神奈川大学教授)
参加者 84名

第28回くまもとアートポリス推進賞

募 集 2024年5月1日(水)～7月1日(月) 応募29件
選考委員 青木淳(AS共同主宰)
伊東龍一(熊本大学名誉教授)
乾久美子(乾久美子建築設計事務所主宰、横浜国立大学大学院Y-GSA教授)
坂口美由紀(Comodo arts project代表)
富田一哉(熊本日日新聞社編集局文化部長)
中川エリカ(中川エリカ建築設計事務所主宰)
表 彰 式 2025年1月23日(木)ノホテル熊本テルサ
主 催 熊本県・くまもとアートポリス事務局

協賛事業

※申し込み順

事業名称	主催者	開催日	場所	参加者数
第5回くまもとたてものづくり フォトコンテスト	一般社団法人熊本県建築協会	2024年9月3日(火)～ 2025年2月1日(土)	熊本市	応募数 226作品 現場見学会 53名
山本理顕氏 プリツカー賞受賞記念講演会 「保田達第一団地の意味」	公益社団法人熊本県建築士会(青年 部会)、一般財団法人熊本県建築住 宅センター、公益社団法人日本建築 家協会九州支部熊本地域会	2024年10月11日(金)	熊本市	204名
令和6年賃貸住宅の住環境向上セミナー	公益財団法人日本賃貸住宅管理協会 熊本県支部	2024年10月5日(土)	熊本市	274名
令和6年度マンション管理基礎セミナー	公益財団法人マンション管理センター、 一般財団法人熊本県建築住宅センター、 一般社団法人熊本県マンション管理士会	2024年10月30日(水)	熊本市	42名
令和6年度(2024年度) 熊本県耐震対策 講演会 ～やってみよう、安心・安全な住 まいのための耐震化～	熊本県(建築課)	2024年12月7日(土)	天草市	39名
第34回熊本の建築家作品展 「建築家のしごと展」	公益社団法人日本建築家協会 九州支部熊本地域会	2024年10月8日(火)～ 10月14日(月)	熊本市	508名
土木の日フォトコンテスト2024	熊本県(監理課)	2024年7月20日(土)～9月30日(月) 結果発表:2024年11月18日(月)	－	応募数 346作品
熊本県立大学公開講演会 「三木順子氏講演会」	公立大学法人熊本県立大学	2024年10月5日(土)	熊本市	103名
2024ゆのまえ漫画フェスタ、漫画月間	湯前町、 ゆのまえ漫画フェスタ実行委員会	漫画フェスタ:2024年11月24日(日) 同前夜祭:2024年11月23日(土) 漫画月間:2024年11月1日(金)～ 11月30日(土)	湯前町	約 10,000名
熊本県建設技術協会研修会	熊本県建設技術協会	2024年11月5日(火)～6日(水)	県内一円	25名
熊本大学建築展	国立大学法人熊本大学工学部 土木建築学科	2024年11月2日(土)～4日(月)	熊本市	1,465名
真紅の森の工芸展	道の駅秘境の郷いずみ	2024年11月1日(金)～4日(月)	八代市	1,098名
令和6年度中大規模木造建築物推進事業 / 株式会社豊工務店新社屋 現場見学会	熊本県(林業振興課)、一般社団 法人熊本県建築士事務所協会	2024年11月21日(木)	熊本市	51名
令和6年度中大規模木造建築物推進事業 / 講演会「木造新時代」～くまもとの木で 実現する木造3階建て(モクサン)ビル～	熊本県(林業振興課)、一般社団 法人熊本県建築士事務所協会	2025年2月5日(水)	熊本市	91名
令和6年度中大規模木造建築物推進事業 / 講演会「中大規模木造建築物の耐久設 計と維持保全」	熊本県(林業振興課)、一般社団 法人熊本県建築士事務所協会	2025年2月25日(火)	熊本市	56名
計				14,581名

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

シンポジウム

「新しい公共性とは何か」

～若い建築家達の取り組む小さなコミュニティ～

2024年11月23日(土) 〔第1部〕13:05～14:05 〔第2部〕14:15～15:35 〔第3部〕15:45～17:15

■会場 / ホテル熊本テルサ テルサホール

第1部 基調講演 「これからの公共建築は『みんなの家』である」

伊東豊雄 (くまもとアートポリスコミッショナー)

第2部 事例報告 「小さなコミュニティづくりに関わる若手建築家等による事例」

民から立ち上がるコモンズ / 金野千恵 (teco)

大阪・北加賀屋 C.S.A.コーポ北加賀屋 千鳥文化 / 家成俊勝 (ドットアーキテクト)

長崎の状況 / 佐々木翔 (インターメディア)

『自分たち事』の場づくり / 森田秀之 (マナビノタネ)

第3部 ディスカッション 「新しい公共性とは何か」

コーディネーター 曽我部昌史 (くまもとアートポリスアドバイザー)

コメンテーター 伊東豊雄 (くまもとアートポリスコミッショナー)

桂英昭 (くまもとアートポリスアドバイザー)

末廣香織 (くまもとアートポリスアドバイザー)

プレゼンター 金野千恵 (teco)

家成俊勝 (ドットアーキテクト)

佐々木翔 (インターメディア)

森田秀之 (マナビノタネ)



主催者挨拶

木村敬 熊本県知事

こんにちは。熊本県知事の木村敬でございます。本日は、くまもとアートポリスシンポジウムに、これだけ多くの方々にご参加いただきまして、本当にありがとうございました。また、嬉しく思っております。また、伊東豊雄コミッショナーをはじめ、パネリストの皆さん、アドバイザーの皆さんにおかれましては、ご多忙の中、お越し下さいましたこと、心から感謝申し上げます。今回の建築展は国内だけではなくて、台湾、韓国からも多くの方に今日お越しいただいております。学生の皆さん、建築関係の皆さん、台湾、韓国からお越しいただきました。これもひとえに伊東コミッショナーのお力添えがあったと思っており、感謝申し上げます。

毎年、海外からも多くの方が、アートポリス施設の見学にお越しいただいております。熊本県の観光、地域振興などにもつながっていることから、この建築展を契機に、今後さらに海外の方との交流が盛んになることを願っている次第でございます。

1988年にスタートいたしましたアートポリス、今年で36年目を迎えます。県独自の事業であるアートポリスは、これまで熊本県下を舞台に、この豊かな自然や歴史、風土を生かしながら、後世に残る優れた建造物をつくってまいりました。また、ものづくりに関するワークショップや見学会、シンポジウムなどを通じまして、県内の建築関係者、学生をはじめ多くの県民の皆様とともに、建築と地域をつなぐ、そして地域の活性化に資する人材育成を進めているところでございます。



熊本県知事 木村敬

熊本地震、そして4年前の球磨川を中心とした令和2年7月豪雨災害においては、被災された方々の憩いの場となる「みんなの家」をはじめ、昨年完成いたしました「熊本地震震災ミュージアムKIOKU」、さらには121番目の新たなプロジェクトであります「相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設」など、県内被災地の創造的復興、地方創生を力強く後押ししております。

このようなアートポリスの取り組みを広く国内外に発信するために、今回、「持続する志～くまもとアートポリス36年～」をテーマに、建築展2024を開催しているところでございます。

本日のシンポジウムでは、冒頭にコミッショナーを務めていただいております伊東豊雄先生に、「これからの公共建築は『みんなの家』である」と題してご講演をいただくこととしております。熊本県は、先ほど申し上げましたように度重なる災害に見舞われてまいりましたが、被災された方々の心の復興を成し遂げるためにも、この被災地における「みんなの家」の整備に取り組み、地域コミュニティの再生につなげてまいりました。

人口流出や過疎化など全国的な課題がある中で、このような小さなコミュニティづくりが、何より今重要性を増しているところでございます。今回のテーマである「新しい公共性とは何か」、まさにこのテーマについて皆さんと一緒に考える機会になればと思っております。

結びに、本日は盛りだくさんの内容となりますが、ご出席の皆様にとって本日のシンポジウムが有意義なものとなることを願ひまして、主催者を代表してのご挨拶とさせていただきます。今日はよろしくお願いいたします。

第1部 基調講演「これからの公共建築は『みんなの家』である」

伊東豊雄 くもとアートポリスコミッショナー

こんにちは。よろしくお願いします。
只今、知事からは大変温かく、そして、強い励ましのお言葉をいただきましてありがとうございます。知事もおっしゃいましたように、今回、韓国や台湾からもたくさんの方、学生さんや先生方においでくださいましてありがとうございます。前回の建築展(2021年)は、ちょうどコロナ(新型コロナウイルス)の最中だったもので、なかなかこういう大きなイベントができなかったのですが、今回、本当に大勢の方に来ていただき、そして、それをサポートくださるいろんな団体の方にもお礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

では早速ですが、「これからの公共建築は『みんなの家』である」というテーマで、「みんなの家」とこれからの公共建築との関係についてお話をさせていただきたいと思います。「みんなの家」という言葉は、もう熊本県の県民の方にはかなり浸透していると思いますが、改めて今日は「みんなの家」とはどういうものかをお話しさせていただくことから始めたいと思います。

もう13年前になりますが、東日本大震災で東北3県にまたがって、約2万2000戸の仮設住宅ができました。その時はほとんどコンテナ型と言いますか、コンテナを並べたような仮設住宅でした。当時のコンテナ型の仮設住宅のプランを見ますと、このように二間×四間、大きいもので2Kタイプと言われるもので8坪、つまり25平方メートルぐらいです。それに対して、もっと小さい1Kタイプですと、二間×三間という6坪しかない。中を見せていただくと、もうほんとに悲惨な状態でして、ここに被災者の御夫妻

とお年寄りがいる。お年寄りの上をまたがないとトイレにも行けないというようなことをおっしゃっていました。凄まじい狭さと、こんなに狭くても2Kとか1Kというような、寝室がいくつあるか、そしてキッチンあるいはダイニングというような呼び方をしているわけです。これは非常に不思議だと思いました。それで、アートポリスのアドバイザーの方にお手伝いいただいて、熊本県の支援によって、第1号の「みんなの家」を仙台市の被災した場所につくりました。これは、その竣工式の時の様子です。この当時は、「みんなの家」というのは、家を失った人々が集まって語り合い、心の安らぎを得ることができるような共同の小屋だと考えました。先ほどのような悲惨な仮設住宅の中にお住まいの人たちの間で、もう少し話し合いができるような場所をつくりたいと思って、熊本県の支援によって第1号はできたわけです。そして、住む人と建てる人とが一体となってつくりたい、話し合いながらつくりたいということ、それから利用する方々が復興を語り合う拠点となるような場所にしたいというようなことを当初は考えておりました。

この3.11(東日本大震災発災)から3ヶ月後ぐらいに、世界中の方々に呼び掛けて、「みんなの家」というのはどんなもの、どんなイメージなんだろうということを募りました。それで、200以上の方からスケッチをいただいたんですが、その一端を御紹介したいと思います。

これは、安藤忠雄さん。光のため池というような、みんなで足を浸けていて、上から光が落ちてくるというようなイメージですね。それから、古谷誠章さん。



これは、非常に大きなテーブルにみんなが座って、食事をしたり話し合っ、その上に多分テントのような小屋、布がかかっているというようなイメージでしょうか。これは、フランク・オー・ゲーリー(Frank Gehry)ですが、何か全くわからない。それから、ザハ(Zaha Hadid)に至ったら、もっとわからない。何が「みんなの家」なんだというようなことになってしまいましたけれども、とにかくなんか送ってくれました。それから、芸大(東京藝術大学)の今学長をされている日比野克彦さん。この方は、1本の大きな木を家に見立てててというような、ちょっとこれは理解できるような気がしますね。それから、乾久美子さん。つい先だってこちら(熊本県)でレクチャーされたと思います。乾さんだけ非常に変わっていて、三陸の被災した辺りで、倉庫とか納屋とかそういう小屋を集めて、ただそれだけを集めて、「みんなの家」というような写真を送っていただきました。それから、ディスカッションに登場されるアドバイザーの桂英昭先生の「みんなの家」で、これもよくわからないのですが、多分正方形の部分が「みんなの家」で、四方にテラスが伸びているんじゃないかと思います。それから、これは小学生の子供の絵で、「がんばろう東日本」というような文字が書かれてまして、なかなか微笑ましい「みんなの家」です。花火が上がってますね。元気づけようというような気持ちでしょうか。それから、これは亡くなった小嶋一浩さん、これはよくわからないんですけども、みんなでテーブルを囲んでいて、そこに光が差し込んでいるというような、光ということは、安藤さんと同じように考えておられますね。それから、これもアドバイザーを務めてくださっている曾我部昌史さんの研究室、これもよくわからなかったですね。僕も改めて見たんですが、もし知りたかったら直接聞いてください。曾我部さん、

今日ディスカッションで司会をさせていただきます。それから、これは渡瀬正記さんと永吉歩さんという、今日も来てくださってる東京の方です。「みんなの家」を、熊本の地震の後もやってくださいましたし、今も熊本県で3棟の「みんなの家」を設計してくださっています。とにかく3ヶ月後ですから、「みんなの家」って言ったって、みんな何のことやらというような時期に、それぞれ思い描いてくださった「みんなの家」です。

それで、先ほどご紹介した仙台市の「みんなの家」は、まだ60戸の仮設住宅ができたばかり、そこに住み始めた人のところへ出かけていって、どんなものが欲しいのかと聞いたところ、最初おじさんの1人は、「俺んち昨日まで100坪だったんだぜ、こんな狭いところに寝かされて、それでまたこんな狭いもんつくるか」と。我々が提案した「みんなの家」は、仮設住宅の8坪より1.5倍ぐらいの広さしかないもので、最初はかなりふてくされていたんです。けれども、だんだん心を開いてくれて、「もしつくってくれるんだったら、薪のストーブがあるといいな」とか、「縁側があるとそこで話ができるな」とかというようなことを言い始めてくれました。そういうことを聞きながら、先ほどの「みんなの家」はつくられたわけです。これがそのプランで、この上に少し見えているのが集会所です。50戸の仮設住宅がまると、その中に1棟集会所をつくっていいというような(災害救助法上の)ルールがあったので、それ(集会所)とつなげました。ところが、その集会所というのは、本当に集会をするための集会所でしかない。仮設住宅に住んでいても、ここにはなかなか人々が行かない。それで、それ(集会所)と縁側でつなげました。「みんなの家」は、三間×四間の12坪ですから、8坪の2Kタイ



伊東豊雄アートポリスコミッショナー



コンテナ型仮設住宅(東日本大震災)



仙台市宮城野区のみんなの家

プの仮設住宅1戸の1.5倍の広さしかない。しかし、そこには土間があり、そして置き畳があり、小さいながらもキッチンがあり、そしてトイレがあり、薪のストーブもあるというような「みんなの家」を提案したわけです。これが、その上にある集会所で、比べていただくと分かるんですが、この集会所は玄関があり、畳の部屋もある、それから、1番右側の広いスペースが集会室、そして左側にはオフィスがあって、結局、部屋に分かれているんです。玄関なんかあったらなかなか入りにくいですよ。子供なんか特に入れない。そこが「みんなの家」との違いなんですね、大きな違い。こんなに広いのに、なかなか活用されないという集会所があった。

仙台市宮城野区で我々が提案し、出来上がったところの「みんなの家」です。これは熊本県の本材でつくられております。この正面の角のところに薪のストーブが置かれて、薪のストーブがあるということは、1日誰かが来て、火を焚くと決めていないと持たないんですよ。ですから、そこで自ずからコミュニケーションが生まれます。それから、こたつがあって、非常に小さい、4畳半の畳があり、そして学生さんたちがつくってくれた大きなテーブルがあって、12、3人が囲めるような語り合う場所ができました。残念ながらこの写真では写っていないのですが、この上にシンボルのくまモンが飾られておりました。僕らも行くたびに、ここで住民の人たち、仮設住宅に住んでる人たちが歓待をしてくれて、家からお惣菜を持ってきて酒盛りが始まったんですけども、この人たちは本当に喜んでくださってですね。仮設住宅ができて自分の家に戻ってきたと思わなかったけれども、これは共同の家だけれども自分の家に戻ってきたような気がすると。それはなぜかといえば、木の香りがするということ、それから、ちょっ

としたことなんですが、温かみを感じる。そして、これが非常に小さいながらも、今まで住んでいた民家を小さくしたようなものだったからではないかと思っています。

ですから、「みんなの家」は、その仮設団地の自治会が運営する、自治体は土地を提供してくれたり協力はしてくれましたけれども、自治会が運営をしているという、これは非常に特異なことだと思いますね。それがコミュニティをつくっていく1番の元になったんじゃないかと思っています。それから、先ほど集会所と比べた時に話したように、ワンルームでできていること、縁側があったり、土間があったりすることで、もう誰でも入っていける。

僕も小さい頃、田舎に住んでおりまして、小学生の時など友達の家を訪ねていくとき、玄関なんかから行ったことはない。縁側から回り込んで、「〇〇ちゃんいる?」みたいな。縁側は、人と人をつなぐ場所、家の外と中をつなぐ場所であると同時に人と人をつなぐ場所でもあるわけで、ここでお年寄りが朝座っていたら、散歩に来た別の人たちがちょっと声をかけて腰下ろして話していけるというような、そういうちょっとした工夫でコミュニケーションというのは成立していくわけですね。土間とか縁側、それから薪のストーブなどを備えていて、木造の民家の縮小版、極小版、ほんとに小さいですけども、そういう民家の味わいをどこかで伝えている、そういうことがやっぱり大切だったんじゃないかと思っています。ですから、「みんなの家」は、最初はその被災した住民の支援の場所だと、サポートするんだということなことを考えていたんですけども、コミュニティを再生する公共施設へと少しずつ変わっていった。そういう意味合いを若い人たちと共有したいと思いつくりました。

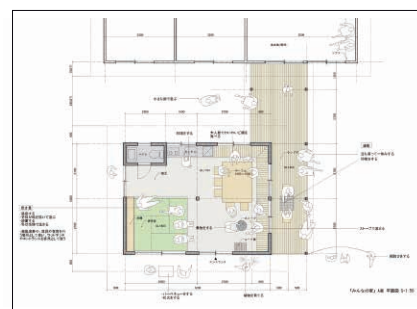
東北での第1号を熊本県が支援してくださったということがありまして、熊本でその後地震があったり、自然災害に度々見舞われた時に、熊本県は率先して「みんなの家」をつくると。これは集会所や談話室と呼ばれている場所を、積極的に木造の「みんなの家」にしようということで、これで本当に公共建築になったんですね。熊本県で初めて公共建築になった。東北では16棟「みんなの家」ができたんですけども、これは我々が若い人たちと一緒にお金を集めてきて、寄付によって出来上がったんです。けれども、熊本では初めて公共建築として「みんなの家」がつけられた。その談話室、集会所というようなものが、熊本では仮設住宅の間に95棟つくられました。そしてその後、公民館と呼ばれている場所も結構被災しており、現在もつづられ続けていますが、日本財団の寄付によって（公民館型「みんなの家」が）10棟つくられる予定です。

これは、熊本の1番大きいタイプの「みんなの家」ですが、益城町というところで、いまは移設され、使われているはず。この中で、ただ人々が話さただけではなくて、子供の映画会をやったり、テキスタイルデザイナーの安東陽子さんの指導によって座布団をつくっているワークショップの写真だと思っています。それから、公民館型の「みんなの家」、これは今年出来上がったんだと思います。乾久美子さんが、人吉、大変遠いところまで行ってくださって、通ってくださってつくられた「みんなの家」です。内部はやはり民家のような、大きな屋根がかかっています。

それでは、公民館って何だったんだろうということをちょっと考えてみたいと思います。公民館は、1949年に始まったと言われているけれども、社会教育法という法の中で、これは博物館とか図書館を規定

している法律ですが、戦後の民主主義の名のもとに各地につくられていった。平成27年度（2015年度）には全国で1万4000ぐらいの公民館がある。でも公民館って最近あんまり若い人たちは行かないですよ。社会教育館とか生涯学習センターとか交流館とか地域交流センターといったような呼び方をされているところもあるようです。こういうところだと、もう少し公共建築というイメージが湧いてきますよね。それで、じゃあ公民館事業っていうのはどういうものだろうかということで見ると、定期講座の開催であるとか討論会、講習会、講演会、展覧会等の開催、それから、図書、記録、模型、資料等の設置とその利用、体育レクリエーション等の開催、各種団体、機関等との連絡、住民の集会その他の公共的用途に供するといったような目的でつくられるべきであるというようなことが社会教育法の中で言われているわけです。

それで、図書館というのは全国でいくつもつくられていて、僕らもいくつかやりましたが、その公民館の中にも図書室をつくるべきだというような話があって。どう違うのかというと、公共の図書館は人と本との関係をつくるのに対して、公民館の図書室というのは、人と本を通じて、人と人との関係をつくるんだと。ですから、私が関わっている図書館というのは、むしろその公民館型の図書館、図書室に近いものだと思います。それで、今日は2つのプロジェクトをこれからご紹介したいと思っています。公民館というものの、あるいは「みんなの家」というものが、どのように公共建築として広がっていったかということをご紹介したいと思います。「みんなの森 ぎふメディアコスモス」は、コンペティションが3.11の震災直前にあったのです。そんなことはもうおよそ考えていないで、コンペティションに



■ 仙台市宮城野区のみんなの家(平面図)



■ 仙台市宮城野区のみんなの家
©仙台市



■ 熊本のみんなの家(益城町)



■ 熊本のみんなの家(益城町)



■ 公民館型みんなの家(人吉市)



臨んだのですけれども、結果的には、「みんなの家」に非常に近いものが出来上がりました。これは、岐阜市の中央部にありまして、人口40万の町ですが、非常に広い敷地だったので2層で出来上がっています。西側に並木道がありまして、左側にせせらぎが流れているのがご覧いただけだと思います。これが非常に重要な役割を果たしてるのです。なぜかと言いますと、ここは長良川に近いので非常に伏流水が豊富なところでして、それをお借りしてきて、輻射冷房、暖房をやって、床から上がってきた空気を自然体流によって流して最高部から排出したり、あるいは冬は閉じてグローブと呼ばれている大きな傘の中で循環させたりという、非常に環境というか、熱エネルギーの問題、省エネのために配慮している。ここでソーラーパネルなども使って、全体としてトータルでは、従来の施設の約2分の1の消費エネルギーで賄っている。そのお借りしてきた伏流水を、さっきのせせらぎに流して地下に返しているわけです。

詳しいことは、今日は省きますけれども、1階のプランですが、ここでも「みんなの家」の土間と同じようにできるだけ入りやすくしたいということで、東西南北方向には通り抜けていくことができます。この施設は住宅地の中にありますので、できるだけそういう

ことに配慮しました。真ん中にあるのが、閉架の図書で、これは環境的に非常に安定してます。1階はオープンなギャラリーとか閉じたギャラリー、あるいは200席ぐらいの小さなオーデトリウム、それから図書室のオフィス、左側にあるそのせせらぎ、また先ほどの並木道に面したところが市民交流施設というような非常にオープンな場所になっています。これがそのオープンな場所で、学校帰りの子供たちが必ずここへ寄って帰るのです。今の子供たちって、学校が終わって、それから家に帰るまでの間に遊ぶ場所がないんですよ。ですから、ここはタダで1日話をしててもいいわけで、夕方までの時間を必ず中学生、高校生が寄ってきて、ここでだべってます。その横におじいさんがいて、コンビニのお弁当を食べてるというように、いろいろな世代の人が混在してるということもこの施設の特徴です。

ここの初代の館長さんが、なかなか面白い方で、子供の司書をつくらうじゃないかと。子供は、10年も経てば大人になって必ずその図書館に通うようになってくれるということで、子供の司書というシステムをつくり出した。これが、オープンしてから2年目ぐらいの時です。1番左におられるのが吉成さんという館長さんです。子供の司書たちと対話をした時

の様子なんですけれども、今では180人の子供の司書が生まれている。その中で、この前列の右から2番目の女の子、この子は非常に面白い子で、吉成館長に手紙を出しました。この手紙は、自分は本が大好きだと、暇な時にはメディコス、学校帰ったらメディコス、優先順位はメディコス、たった5分でもメディコスというぐらい、これは嬉しいですね。それで、結局、自分の家の押し入れの中に、自分の図書館をつくりましたという風なことがここに書かれています。今はもう大学生に、もしかしたらもう大学を卒業したかもしれないのですけれども、海外に留学して戻ってきたらぜひ会いたいと思ってるのです。子供の司書ってというのは、本当に素晴らしいアイデアだと思います。

2階に上がると、先ほどの大きな断面で、大きな傘のようなものが見えたと思うのですが、それを「グローブ」と呼んでおりまして、11個天井からぶら下がっています。その下が本を読むのに1番快適な環境なのです。全体の姿は、こういう波打つ屋根の下を大きな家と呼んでいますが、木造の屋根を架けまして、そこから11個の「グローブ」が吊られているわけです。先ほどご紹介したテキスタイルデザイナーの安東陽子さんが頑張ってるこの「グローブ」をつくってくれました。この施設に毎日のように足を運んでいる大角真子さんというスケッチジャーナリストの方が、何十枚というスケッチを描いているので、その一部をご紹介します。これは、インフォメーションの「グローブ」に人が立ち寄って、何かリクエストを、あるいは質問をしているところですね。これは最も大きな「グローブ」で、非常にリラックスして本を読めるような場所です。いろんなグローブがあるので、あとから、吉成さんから頼まれて、子供は小さいところに籠もりたがるから、小さい親子で入れた

り、子供が2、3人入れるような、そういう小さいものをつくってくれないかと言われて、先ほどお見せした「グローブ」の下に置かれました。籐のような材料を使って、インドネシアでつくられたのですが、「ころん」という名前が付けられまして、そこに子供がいるときのスケッチです。こういう親子で話や遊べるような「グローブ」も用意されました。これは小さい子供が勉強しているところですね。オープンから何年か経った数年前に、我々がここをよく使ってくれる人たちにインタビューを試みたんです。その時に人々あるいは子供が答えてくれたものをいくつかご紹介します。

「グローブっていうのは、大きなリビングルームみたいだ」と言ってくれた人がいて、これはまさに「みんなの家」ですね。それから「グローブの間は散歩道なんだ」と、要するに外部空間みたいなんだと。これもとてもいいコメントだと思いました。それから、「誰かという気にもなれるけど、ひとりにもなれる場所」、この人は、岐阜に移住してきたばかりで家にこもってばかりいて大変孤独を感じていたけれど、メディアコスモスという施設があるということを知って、いってみたら1人でもいられるのだけれども、なんとなくみんなと一緒にいるような気にもなれる、そんな場所なんだということで、非常に救われたということを行っています。それから、これはすごく僕は感激したのですが、「暑かったり寒かったり、中にいても外にいるようで、明るさ、気温が朝昼夜で変わる」と。現代建築って、もうほんとに均質で朝昼晩一緒だし、夏でも冬でも同じように、環境を整えるということがベストなんだという風に言われていますが、夏と冬で温度が変わるのは当たり前のお話なのです。それでないと人間は動物的な感受性をどんどん失ってしまうと僕は思っているの



■みんなの森 ぎふメディアコスモス
©中村絵



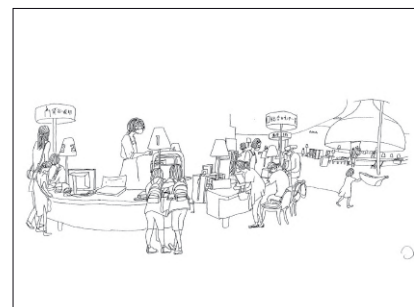
■並木道・せせらぎ
©中村絵



■子供の司書
©岐阜市



■グローブ
©中村絵



■スケッチ (グローブ)
©大角真子



■スケッチ (ころん)
©大角真子

で、こういう建築をつくった時、その中にいても外にいるような気分を味わえるということを大切にしたいと思っています。それから、これは親子で毎日来ているような子供が、「新しい本や子供たちの世界をぐるっと見回って帰るだけでもいい」と。要するに散歩なんですよ、夕方にはほとんど毎日来る。帰るとお母さんが食事をつくって待っていてくれる、お父さんと子供でやってくるというような子供。僕も小さい頃、父親に連れられて夕ご飯前に必ず銭湯に行ったのです。銭湯で地元の人たちとちょっと話をして帰ってくると母親が夕ご飯つくって待っていてくれる、そういう銭湯みたいな場所だということを吉成さんが聞いて大変感激してくれました。それから、「会議をやるのに、予約しなくてもメディコスでよろうよって言えば、みんなが集まってきて、どっか話せる場所がある」、そういうことを言ってくれた人がいて、それも大変嬉しいコメントでしたね。

それが「ぎふメディアコスモス」という施設で、次にもう1つ、「おにグル」という、大阪の近郊にある茨木市という人口30万の町に、子育てと文化施設とかを融合したような施設が、ちょうどオープンして1年になります。昨年11月末にオープンしましたので、その施設をご紹介したいと思います。これは全体像ですが、この真ん中、奥の方にあるのがその施設で、右側には市庁舎があり、手前の南北にグリーンベルトが伸びています。直交方向には阪急とJRの茨木駅を結ぶような商店街が続く道が交差する場所に建っています。芝生の広場が北側にあり、右側に見えるのが市庁舎です。素晴らしい場所です。反対の南側には、どうしても劇場のライタワーが出てきてしまうので、コンクリートの壁が立ち上がっていて、ここをなんとかしなくてはと思って、茨木高校出身の名和晃平さんというアーティスト

トに、月のようなリングをデザインしてもらいました。こちらは芝生広場ですが、これは立体的な公園というコンセプトで、建築に入ってもこの芝生広場がそのまま続いているという考え方でつくりました。ここは市長以下、市の職員たちのアイデアがすごく豊富で、本当にこんなに素晴らしいコラボレーションができたというのは初めての経験でした。これはその一例ですが、オープニングの時に、大体オープニングっていうと市長さんや議長さんがテープカットをやるのが普通ですけども、ここでは100人のテープカットということで、長いテープを引きずって0歳から100歳まで、住民の人たちに開かれたテープカットでした。

ここは、ホールとか子育て支援の施設とか様々なものが複合されているのですが、これをどうやって1つのものにしたらいいのだろうかということで頭を悩ませました。特に、劇場のような施設と子育て支援は関係ないですから、うまくいくのかを気にしていたのです。そこで、直径10メートルの円形の「縦の道」という吹き抜けのスペースをつくりまして、それを互い違いのエスカレーターで結んで、それらの間を結ぼうとしました。これが地上階のプランですが、芝生広場から中に入っていくと、真ん中辺りに200席の多目的ホールがあります。上のライトブルーのところは、子供の遊び場になっています。その2階のテラスが張り出してピロティーのような形になっている、ここが縁側みたいなものですね。1階に入ると雑然としているのですが、これは屋内化された広場のような場所で、展示をすることもあるし、その奥の方に見える200席の多目的ホールも、ほとんど開け放ったまま使われています。1階に入ったところにカフェがあって、これも非常に入りやすくしている要因の1つだと思います。これは右側

の多目的な劇場に入るところですね。ちょうど1周年で、ついこの間イベントがあり、大勢の人でにぎわっている様子です。大体1年間で、30万の人口(の市)なのに200万ぐらいの人が来ました。これが2階で、ここでの施設の1つ(子育て世代包括支援センター)。この融合がうまくいったのは、図書館の機能が一部分、図書館コーナーとして各階に降りてきているのです。これは、図書館長が積極的にこういうことをやろうと言ってくださって、劇場のあるところには文化系、アート系など芸術系の本が置かれて、子供の遊び場のところには子供の本が置かれているというように、各階に本があるということは結構大きかったと思います。これは、子育て支援のところに入る直前の、子供たちが待ってる時間に遊ぶような施設の部分です。それから、2階のテラスには奇妙な形をした家が置かれていて、子供に読み聞かせをするための部屋なんです。この家は、地元の画家で井上直久さんという方がおられて、その方がデザインしました。それから、3階に上がって行って、ここは舞台と同じレベルで、楽屋があったり、スタジオがあったりしますが、ここでも読書コーナーがあり、それからスタジオがあります。これが「縦の道」と呼ばれているところです。4階に上がると、ここは劇場のメインのホワイエがあるところです。劇場だけ半年ぐらいオープンが遅れたのですが、それでホワイエだけで盆踊りをやっているところです。それから5階、6階が図書館の階です。グリーンのところは図書館になっています。これも「縦の道」の一部分です。これは5階、6階の吹き抜けのところから、下の図書室を見下ろしているところです。ここでは、すべての階にわたって、藤森泰司さんという家具のデザイナーがすごく頑張っている家具をたくさんつくっ

てくれたのです。けれども、残念ながら亡くなってしまわれまして、これが遺作となってしまいました。出来上がった時には来たいと言っておられましたが、来られないうちに亡くなられてしまいました。6階も吹き抜けを挟んで図書館が続いていますね。これは館の企画で、今年の夏にテントをいくつも用意して、何家族かに、夜ここで宿泊してもらおうという企画がありました。なかなか館としては大変だったと思うのです。けれどもそうやって、中にいても外にいるような気分を味わってもらいたいという我々の考え方をこういう形で実現してくれたりもしているんですね。それから、最上階はプラネタリウムがあって、そのそばには子供たちがワークショップをやるようなスペースがあり、中庭があって、和室もあるというような、いろんなものが混ざっている階です。最上階の中庭は、当初、子供たちは下だけで遊んで、だんだん年を取るとともに上にあがっていけるというように考えていたのですが、オープン当初から、もうそんなことはとんでもない。中庭は子供たちにとって大人気の場所になっていました。こうやって、その脇では学生さんたちが勉強していたり、お弁当を食べたりするというような風景。もうまさしく混在してますね。

最後のコメントになるんですが、これからの公共建築というのは、公民館が、本来その戦後の民主主義の中で提唱していた精神をもう1回思い起こすべきではないだろうか、「みんなの家」はそのきっかけをつくる小さなモデルとなったと思っています。以上、急ぎましたけれども私のスピーチとさせていただきます。また後ほどディスカッションで皆さんと一緒に話し合えればと思っております。どうもありがとうございました。



■ グローブ
©中村絵



■ 茨木市文化・子育て複合施設 おにグル
©Nacasa & Partners Inc.



■ テープカット
©中村絵



■ 縦の道



■ 図書館



■ 中庭

第2部 事例報告「小さなコミュニティづくりに関わる若手建築家等による事例」

01 民から立ち上がるコモンズ／金野千恵 (teco)

東京の浅草橋で「teco」という設計事務所をやっています、金野と言います。

私は2011年、まさに先ほど伊東さんがお話されていた東日本大震災の年に大学の博士課程を終えまして、そのあとすぐに自分で建築の設計事務所を立ち上げました。設計の仕事をしながら、同時に大学に勤め、14年目ぐらいを迎えたところなんです。いろいろな大学で勤めてきたのですが、今は京都工芸繊維大学というところで自分の研究室の20名ぐらいの学生と研究活動をしています。「teco」という事務所は、こんな雰囲気です、7～8名の体制で仕事をしています。私は東京工業大学というところで学生時代を過ごし、アトリエ・ワンという建築家の塚本由晴さんの研究室に所属して学びました。その研究室は、常に設計することと、例えばまちを見て観察したり調査すること、あるいはそれを表現として定着していくような、研究と建築の実践というのを常に両輪で動かす研究室で、そのことが今の私の設計の方法や、設計をするにあたって考えることに、繋がっていると感じます。今日は少し研究調査の事例をお話して、そのあと、作品を1つご紹介したいと思っています。

私は、修士の学生の時、2006年ぐらいから、こういった屋根のついた半屋外空間の研究をしています。修士論文と博士論文、両方ともこうした屋根付きの、まちに開かれた半屋外空間の研究を行なったのです。例えば、これ私が大好きなまちのベスト3の1つに入るまち、ネパールのバクタプルというまち

の写真です。バクタプルでは、この東屋のような場所を「パティ」と呼びます。このパティは、この地域に住む人たちが素材を提供したり、素材を持たない人が建設に携わったり、あるいはお掃除する人がいたり、毎週蝋燭を灯しに来る人がいたり、そんなふうに自分たちで建設し、自分たちで維持管理をしている、そんな空間です。それが、旧市街地の、おそらく30メートル歩くと1つあるかなというくらい、たくさん存在します。このまちでたまたま撮ったこの写真は、例えば新聞読んでも人がいたり、奥で団らんしてるおじさんたちがいたり、時々、農作業をしている人がいたりもするんですが、真ん中のおじちゃんと子供が、一緒にくつろぐ様子がありました。この子供をずっと見てると、いろんなおじちゃんのところに行きかけに行くので、血縁関係はなさそうなんです。でも、まちの開かれた自由を感じられる居場所があることで、自然と他の世代の違う人たちが交流できていたり、ここで暇でもくつろげる時間がある、自由な時間と空間がある、そんな場所の可能性を感じました。こういうものを、世界の色々なところでこう調査をしながら、今、本をつくっていて、2月ぐらいに出版されるので、是非、本屋さんでパラっと見てほしいなと思います。宣伝です。

この調査を進める中で、もう1つ今日のテーマに関わると感じたまちと建築をご紹介します。これはインドネシアのバリ島の写真です。バリ島に限らず、インドネシアでは「バンジャール」という共同体の単位があります。先ほどのお話でいう自治会みたいな単

位ですね。これは大体400人から800人ぐらいが所属するような、自治会のようなものです。私が、たまたまこう通りかかった時に見たのは、お祭りの準備をしていたんです、この大きな屋根の下で。このバンジャールの人たちは、自分たちの地域ごと、バンジャールごとの拠点を持っていて、それを「バレバンジャール」という風に呼びます。こういう大きな屋根のかかった、完全に屋外に晒されたような空間があるんです。ここで彼らは、例えば歌の練習をしたり、踊りの練習をしたり、地域の会合をしたり、この時はお祭りの準備をしていたりで、すごい面白い仕組みだなと思って調査を始めたら、どんどん奥深さに興味を増して、今、3年目ですが、定期的に通って調査を行なっています。インドネシアはまだ成長の過渡期にあるので、平均年齢も29歳くらい、人口が増え続けている国です。そうしたなかで、政府が制度を組み立てて、施設を建設するという計画が、成長のスピードに間に合っていないのです。彼らがどうするかというと、バンジャールのメンバーで話し合っ、子供が増えてきたから保育園をつくろうとか。高齢化も進んできて密集した市街地だけじゃ土地が足りなさそうだから、バンジャールで郊外に土地を買って、老後の穏やかな暮らしの準備をしようとか。あるいはそういった運営に、基本的には皆さんからお金を集めて、寄付でそういう建設をしているんですが、その支払いが厳しい家庭もある時に、バンジャールとしてコープを建設して商売し、その収益でコミュニティを持続させていこうというような、自分たちで話し合っって自律的に組み立てる。必要であれば建設もするし、時には健康診断や子供のサービスなどソフトの枠組みとして体制を整える。それらを民が自らやっているんです。こういった民のエネルギーを目の当たりにして、私たち日本人が何を吸収して再構築できるのだろう、と考えています。日本はインドネシアに比べれば公共的なサービスやサポートの基盤が整っていますが、今後どこまでこのサービスが持続していくかは未知数の部分も多いと思います。私たちの事務所では、半分ぐらいが福祉に関わる建築のプロジェクトなのですが、この分野に関わって超高齢者化を目の当たりにすると、社会保障も10年先はどうなるのかわからないと感じます。そうした時に、どうやって自分たちで持続的な暮らしをつくるのかを考え始める必要を感じ、最近是这样したバン

ジャールのような共同体と、その人々の活動を支える環境について、思考しています。

2011年、東日本大震災のあった年に独立し、自分たちの暮らしが、例えば電気がどこから来てるか、どういう水が自分たちの口に入ってるのかも知らなかった、という事実気づいたところがスタートでした。自分たちがどうやって生きていくのか、どういう資源に支えられているのか、についても、原点として立ち戻って考えることが多くなっています。

今日は、1つだけプロジェクトをご紹介します。これは、約7年間かけてつくった拠点で、「春日台センターセンター」というプロジェクトです。この拠点は、東京の中心から大体40キロメートルくらい、神奈川県のアクリンという地域にあります。人口が4万ほど、高齢化率は31パーセントを超えており、外国人居住率が9パーセントほど。これは実は日本の中ではとても高く、神奈川県でも1位の数字です。川が2本走っている河岸段丘にあって、わかりやすく段々の地形がありますが、川の近くでは豊かな田園風景が広がり、丘の上に行くと工業地帯があります。昔からの農業と戦後の工業、それをサポートしてきた住宅地というエリアからできたまちです。電車が通っていないので、陸の孤島と言いますか、東京から行くとしても、すごく時間がかかる場所にあります。

このプロジェクトは、その工業団地を支えるためにつくられた住宅団地の中の、商店街の中心地に計画されたものです。1番最初に私がここの土地に行った時には、実は、最終的に建った建物の隣にある長屋の商店街の一角を、シャッターを開いて訪問介護の事業所にしたいということで、福祉事業者さ



金野千恵 (teco)



ネパール、バクタプル



春日台センター

んからの依頼でお話を聞きに行きました。シャッターも半分以上閉まっているんですが、同時に放課後になると子供たちがバーっと集まってきて、この楠がすごく立派で、何かすごくポテンシャルがあると感じたんです。いろんな方のお話を聞いていた中で、この右の波波の屋根の建物が「春日台センター」というスーパーマーケットの店主が、近くに大型のショッピングモールが来たので、経営がなかなか厳しく閉めたいっていう話をしていたんです。確かに飛ぶように物が売れるスーパーには見えなかったのですが、子供たちが駄菓子を買いに行ったり、みんな大好きなコロッケを売っていたり、いわゆる昔ながらのスーパーで、これがなくなったら大変だなと話していたら、4ヶ月後に閉店してしまいました。閉まるとガラスが危ないよねというので板を張って防犯カメラがついて、〇〇禁止という張り紙が増えていった。先ほどの商店街の一角に訪問のステーションをつくったところで、このまちの根本的な問題に触れていないというか、本質に寄与できていない、関われないなという風に感じました。その時に、何度も議論して、福祉の事業をやっているクライアントさんと一緒に、1回この計画を白紙に戻すことにしました。その代わり、地域の人と何が本当にここで必要なかを話し合っていきたいということで、「あいかわ暮らしラボ」、「あいラボ」と私たちが呼び寄り合いを立ち上げました。最初は近い人、知り合いを呼びながら15人、20人ぐらいで始まち、40人、50人と人がみるみるうちに増え、あるとき、先ほどのスーパー復活祭をやりたいという人がいたので、この寄り合いメンバーが発起人となって、フェスをやることになりました。延べ400人ぐらいの方が来て下さり、ものづくりをしたり、スーパーの板

張りのファサードでレクチャーをしたり、地域の雰囲気に触れていきました。私たちは、この時、建築の計画が一度白紙になっていたの、同じこの場を共有するメンバーとしてできることを考え、言葉や活動を記録する新聞をつくり始めました。寄り合いに集まったおじいちゃんや昆虫博士の中学生が来て話してくれたり色々な会話があって、町史にも町の案内にも書いてないけど、皆、面白いことを喋っているのをそれを記録しておいた方がいいなと思い、瓦版のようなものを毎回つくりました。

この活動をしている中で、先ほどのその工業地帯の働き手の第2世代の人たちが、海外の労働者が多く、その子供が学校で言葉の問題を抱えて引きこもりになっていること。そういう子に勉強を教えるおばあちゃんがいることが分かってきたり。ある時は、竹林が荒れてるということで皆で竹林をフィールドに1日活動してみたり。そうやって地域を知ること、3年間続けたんです。その中で、この春日台地区に何もなかった時、1960年代の第1世代から、第2世代までを見守ってきた「春日台センター」という場所をもう1度、まちのセンターにできないかということを考え始め、お施主さんがやはり福祉の事業をコアに拠点をつくりたいという話になりました。案をつくっては土地の持ち主に持っていったり、行政に持っていったり、それを毎年、何案かつくり直して、ブラッシュアップして、ようやく、プロジェクトを始める見込みが立ったのが4年目ぐらいでした。時間がかったのですが、その間、地域づくりをコンスタントに続けながら、色々な方にこのプロジェクトを知ってもらうことができました。

最終的には、こんな風に、高齢者の方々のお住まいやデイサービスがあったり、この放課後等デイサービスというのは障害のある子供の放課後のサービスですね。あとは、この洗濯代行やコロッケスタンドは障害のある方が働く場所です。寺子屋は先ほど言った勉強、子供たちができる場所だったり、あとは自由に使える場所というのをつくるという、この7つの複合の場所として、もう1度、「春日台センター」をセンター化するというので、「春日台センターセンター」と名付けました。これだけ多くの機能が入ると管理が大変なので、建築としては合理的な大きな箱になり易いのですが、地域の方とずっとまちのことを話してきたこともあり、ドカンと大きな施設を建てるのではなくて、まちの公園に続く通りの軸線を引き込んだり、こっちのショッピングセンターのアーケードの屋根が伸びてきたり、なんとなく住宅と保育園のような施設の、中間ぐらいの規模で建物が立ち現れるようなつくり方を考えました。

建物を3つの棟に分けて、それぞれの棟の中の機能も混じっているのですが、さらに建物の間にはまちの道が引き込まれたり、内部にも「土間通り」と呼ぶ、通りが貫通するなど、中に入ったり外に出たりが連続的に感じられるような拠点を目指しました。これがアーケードの方から見た様子です。これが正面から見たファサードで、今は放課後は本当に多くの子どもたちが集まる場所になっています。この木の下に自然と人が集まって、おばあちゃんと話してる子供がいたり、コロッケを買いに来る人と障がいのある人が交わったり、そんな場所になっています。この畳の小上がりも制度上は福祉の床なのですが、子供たちはそういう事情を知らないので全然気に

せず入ってきて、心地よさそうだったらここで遊ぶ、という自然の重なり生まれています。

最後に、この拠点の雰囲気をよく伝える動画を流したいと思います。ここは、日中の活動拠点というだけではなく、高齢者の住まいが含まれているので、朝、とても静かな時間帯があって、そこから子供たちが入ってきたり、夕暮れ時まで、さまざまな人たちが交わる場所になっています。福祉施設ですが、塀や門、監視カメラもないので、みんなが、スルスルと中に入ってきて、過ごしやすい場所を自分たちで見つけて使っているような拠点です。以上で発表終わります。ありがとうございました。



■ 春日台センター
©morinakayasuki



■ 土間通り(春日台センター)
©morinakayasuki



02 大阪北加賀屋、C.S.A.コーポ北加賀屋、千鳥文化／家成俊勝(ドットアーキテツ)

皆さん、こんにちは。今日はこのような場所にお招きいただきましてありがとうございます。私は「ドットアーキテツ」という建築設計事務所を大阪でやっております、私たちの拠点とそれから近所で改修した物件と、その背後にある参考事例みたいなのを中心にお話ししていきたいというふうに思います。

まず、この大阪の北加賀屋という場所なんですけども、1番左が大阪市の1番最初、すごくまちぢゃい時期です。これがだんだん市域拡張していくんですけども、この北加賀屋という場所は、大阪市の南西の端の部分にあります。江戸時代の後半ぐらいまで沼地だったんですが、干拓事業が進んで、田んぼができてきたというような感じですが、明治以降に近代化がどんどん進んでいくと同時に、大阪の中心街で唐物商をやっていた方が、この田んぼ全体の土地を買い取って、そしてその田んぼを、土地を貸して土地経営事業に転じていく中で、工場がポツポツとこう建ってきたというような場所になります。大正時代には東京の人口を凌ぐぐらい、すごく賑わった場所にもなります。戦後、それから高度成長期に向けてどんどん工場が立っていくと。ただ、産業構造がこう転換することによって、ここは元々木津川という川沿いに造船業が盛んでして、3つぐらい造船所があったんです。その造船所が、世界の船の大型化に伴って、このドックでつくれる船に限界があるってことで造船業が府外に移った。そこでその当時働いていた2万人の労働者の方々も同時にいなくなったり、あるいは高齢化していくということ



■家成俊勝(ドットアーキテツ)

で、どんどん空洞化が進んでいったような、そういったまちになります。

先ほど、田んぼだった土地を買い取った会社が、今もこの北加賀屋の半分の土地を所有している不動産会社でして、彼らは土地を貸すんですけども、その貸した人が亡くなったり、転居した後、その土地が返ってきても、借り手がいないので、とりあえずその土地をコインパーキングに手取り早くして運営をしていくってようなことをしていたんです。そうするとまちがコインパーキングだらけになって、全然豊かじゃなくなっていくということで、アーティストとかデザイナーとか、そういった人たちをこのまちに呼び込んでまちづくりをしていこうというような活動を2009年から始めていくということになります。それを「北加賀屋クリエイティブビレッジ構想」という名前がついてやってきたんですけども、我々はこの構想が始まる前にこの北加賀屋に入って、空き工場をベースに活動を始めました。こういう「北加賀屋クリエイティブビレッジ構想」みたいな名前がついて、どんどんアーティストとかデザイナーが入ってきて、こういう風なマップができていて、ギャラリーとかカフェとか、その他色んなショップとか、いろいろこう出来上がってきています。例えば、元鉄工所を活用して巨大彫刻作品を収蔵するギャラリーであるとか、あと美術家の森村泰昌さんの私立美術館であるとか、それからアーティストが滞在しながら制作できるスタジオであるとか、それからホステル、それから空き地を貸し農園にしたり、あるいは空いた工場をクラブのようにしたり、それから造船所跡地もイベントスペースとして活用されているというような状況です。

こうなっていくと、大体こう空洞化したまちにアートとかそういうものが、文化とか芸術が入ってくると、だいたい地価が上がって、家賃が上がっていくっていう傾向で、そしてそこにもともといた人たちは出ていかざるを得なくなっていくってようなことが薄々予想されていた。しかし、我々はこのコーポ北加賀屋っていう廃屋の工場を借りながら活動して

るんですが、地主さんの理解もあって家賃は据え置きのままになっています。

我々は、建築チーム、それからアートNPO、それからアーティスト、映像、デジファブ、木工、設計みたいな形で、いろんな人たちで共同利用しているというような場所です。これが私たちの場所の1階で、入口から入って共有の工場(こうば)になっていて、奥にそれぞれのオフィス空間があるみたいな形になってます。2階も共有部があって、ここが私たちの事務所で、それぞれアーティストのアトリエとかがあるみたいな形で、まるで、ねずみの住处みたいな散らかったところでいつも活動をしています。これが断面図、断面図ってというか、断面写真みたいな感じですけど、僕ら現場出て、色々自分たちでつくったりするので、その出てきた廃材とかをストックして、みんなでシェアして共有していくみたいな仕組みもしています。これが1階の共有の工場でして、自分たちで色々ものづくりをやっていたり、それから、工具置き場があったり、私たちの設計のためのコンピューターが置いてある部屋があったりします。同時に、このスペースを使いながら、トークイベントやったり、それから集会の時のバーをやったりなど、このコーポ北加賀屋という場所を拠点に活動している。この場所は、入居者がさっき言ったみたいに7チームが入居していて、「コーポ会議」と名付けられた会議に全員が出席して、この場所をどういうふうに運営していくかっていうのをみんなで話し合いながら決めていくというような形です。

ここは私が借りてるんですけど、月32万円で借りていて、それを7チームで割ったら、大体1チーム5万〜7万円です。なんですけど、この中の1人が家賃を3年間ほど滞納してまして、私に全然お金が入ってこ



■コーポ北加賀屋
©Yuma Harada

ない。これ3年間滞納してるから、えらい額になってるんですけど、通常の不動産屋さんだと、2日家賃振込み忘れたらすぐ電話かかってきますけど、僕らはなんとか、コロナでなかなか仕事がない状況のメンバーが1人ぐらいいても、みんなで助け合いながらこの場所を運営していこうというような形でやっています。

このコーポ北加賀屋という場所の手本にしたのが、この社会センターっていう場所です。この社会センターというのは、企業とかあるいは行政の補助金とかそういったもの一切もらわずに、空いている建物を自分たちの自前の活動だけで成り立っている、そういった場所になります。

こういうことを実際にやっていくにあたって、自分たちでつくっていく必要があるということで、少しだけ道具について考えたいと思います。イヴァン・イリイチという人が道具を2種類に分けています。1つ目が産業主義的道具で、もう1つが各人の自由の範囲を拡大するような道具ということです。産業主義的道具っていうのは、基本的には、大量生産ベースの、ものすごい高価な、そして専門性の高い機械でつくられるような工場を指していて、例えば、テスラの工場とか半導体工場とか、ああいうのをイメージするとわかりやすいかなと思います。そして一方で、各人の自由な範囲を拡大するような道具っていうのは、ハンドツールとかハンマーとかポケットナイフみたいな形で、我々ホームセンターに行けばもう安価ですぐ買えるし、使い方もすごくシンプルで習得も早い。そういった道具で自分たちの身の回りの場づくりをしていけるという風に私は考えてまして、積極的にこの自由な範囲を拡大するようなシンプルなハンドツールで空間やものをつくっていくということを日々実践としてやっているというのがあります。キューバ危機の時に、キューバの人たちはアメリカからエンジニアが入ってもものづくりしてたんですが、そのキューバ危機になって、アメリカのエンジニアが全部キューバから引き上げた後、キューバの人たちがどういうふうにもものづくりしたかというところ、こういう昼食のアルミのお皿を加工してテレビの受信アンテナつくったり、あるいは洗濯機のモーターを使ってこう果物の皮剥く機械に変えたり、あるいは自転車にペットボトルとエンジン積んでバイクに改

造したりみたいな、こういう手持ちの技術とか道具とか資源みたいなものを組み合わせて自分たちの生活をつくっていきました。そういった生活の知恵みたいなものを、「Our own efforts(自助努力)」ということで、自分たちで自分たちのものづくりをやっていくんだということで、1冊の本になっています。それが配られて、自転車のメンテナンスの方法とか、棚のつくり方とか、色々ありました。

こういったスペースのつくり方とか、自分たちで空間をつくっていくということをベースに、1つだけ今日は物件を紹介します。我々の事務所である「コーポ北加賀屋」から歩いて3分のところに「千鳥文化」という建物があります。これはもともと、2階は造船業で働いていた労働者の方々が生きていた場所で、1階は店舗が入っていました。喫茶店とか、お好み焼き屋さんとか散髪屋さんとか、いわゆる下駄履き住居なんです。昭和30年ぐらいに建てられ、使われた後、空き家になっていて、これを地域の交流拠点にしたいという依頼を受けて、我々の方で設計を進めていきました。全面道路から入ってアトリウムという吹き抜け空間があって、こっちに行けば食堂、こっちに行けば古材バンク、こっちがバーで、奥に行くとギャラリーホールで、ここに店舗が3つ入っていて、裏に市民農園があるというような形になっています。この古材バンクとバーは、もともと私たち「ドットアーキテツ」が運営してたんです。この古材バンクは、周りで解体された資材を引き取ってきて、ここでもう1回販売するっていうのをやってたんですが、1年やって全く売れなかったんでたたみました。バーも、私たちが毎週金曜日と土曜日、バーに立って、地域の人たちがお客さんでやってたんですが、コロナウイルスが感染拡大したので、これを機に一旦閉じてたんですが、今は当時の常連さんがこのバー引き継いでくれて、めちゃくちゃ盛り上がってるバーに変わっています。こういった形で、いろんな目的を持った場所が1個の建物の中に入っているというような形になっています。基本的に1階はそういった形ですけど、2階は当時の住居の間取りをそのまま、めちゃめちゃ不思議な間取りなので、このまま残すようにして、こっちは不動産会社管轄でリーシングしてるというような形にしています。これ、当時の大工さんが近くから廃材とか集めてこの建

物自体が建てられていて、非常に構造的に危ない状況だったので、我々ですべての柱と梁とかそういったものを調査して、構造モデルをつくって構造家の満田衛資さんに相談して補強していったというような形になります。これが道から見たところで、こちら側が農園になります。ここがメインの入り口で、吹き抜けのアトリウムに今なっております。アトリウム入ると、ふらっと入ってきて休める場所になっていて、ここでブックエクスチェンジのコーナーがあったりします。左を振り向くと奥にカフェがあって、こういう風なカフェスペース。それから、今はなくなってしまった古材バンクは、今食堂がすごく調子がいいので、こちらを食堂を拡張して運営しているという状況です。ここが吹き抜け部分で、2階に上がってブリッジを渡って奥に行くと昔の住居スペースに行くという形です。1階のアトリウムから奥に行くとギャラリースペースがあり、そして2階は居住スペースですけども、今アーティストのギャラリーとして使用している部分と、それから当時の面影をそのまま残す部分と置いています。普段ギャラリーでは様々な展覧会をやったり、ライブをやったりしています。バーは私たちもボトルキープしてるので、こんなたくさん来たらなくなるんですけども、もしよろしければ、飲みにきていただけたらという風に思います。こういう風なイベントをしたり、最初に計画したものをそのまんま使うんじゃなくて、どんどん柔軟にその場所に合わせながら、みんなで話し合いながら、形を変えながら地域の方々や来訪してくれる方々に楽しんでもらえるように今運営している最中ということになります。ご清聴ありがとうございます。



■ 千鳥文化
©Yoshiro Masuda

▶▶ 03 長崎の状況／佐々木翔(インターメディア)

「インターメディア」の佐々木翔といいます。よろしくお願いします。まずは、簡単に自己紹介をさせてください。長崎に僕は住んでいますが、長崎県生まれの40歳で、大学は福岡で、前職は東京でSUEP.の末光さんに師事していました。そして30歳の時に、故郷の島原に戻って、今年で10年経ちました。代表をしている「インターメディア」は、父が創業して今年で35年の設計事務所です。父やたくさんの移住スタッフとともに活動してます。ちなみに、九州にいたので、たくさんの大学で非常勤講師をさせていただいてるんですけど、結構、前列の方に僕が知ってる方がたくさん居て、おそらくここにいるみんなは、遅れて入ってきたというよりも、僕を応援するために多分前に座ってくれてるんじゃないかなと思って(笑)、非常に元気をもらっています。

島原に戻って最初の5年間は、用途が決まっている依頼に取り組んでました。当たり前じゃないかって思われるかもしれませんが、順を追ってご説明します。例えば、これらは僕らが取り組んできた建築ですが、オフィスを依頼されてオフィスをつくったり、ゲストハウスを依頼されてそれに応えたりで、それはもちろん2019年以降も続いていて、こども園だったり、木造のオフィスだったり、長崎を中心に、様々な建築に設計事務所の本業として取り組んでいます。そんな中、すごく不思議なことに、用途が決まらない依頼が2019年頃からポツポツ出てきたんです。意味がわからないかもしれませんが、例えばこ



■ 佐々木翔(インターメディア)

のような建築がそれに当たります。左上は改修で、右上は新築、左下は内装だけで、右下は家具だけ、など関わり方は様々です。そのきっかけになったのが、この2019年の「HOGET」あたりからなんですが、こちらは僕が今感じている公共性の1つでもありますので、少し詳しくお話ししたいと思います。

「HOGET」の改修前の風景です。場所は長崎県西海市、西彼杵半島というところにあるんですけど、ここには鉄道や高速道路が全くなく、県内の主要インフラは長崎、諫早、大村、佐世保などを通っているため、取り残されたような場所で、過疎化が急速に進んでいるようなエリアの端っこにあります。そこで依頼されたのが、人が集まる場所をつくりたいという渴望のようなものでした。具体的な用途は決まなくて、決まっているのは、先ほどお見せしたあの空き家になった民家で何かやりたいということだけで、例えばカフェを入れるみたいなことも全く決まっていなかったんですね。何から手を付けていいのかわからなかったんですけど、僕はむしろそれがすごく面白いなと思ってしまった。鉄道も高速道路もない場所で、どうして人が集まる場所が欲しいと思っているのか、そして、そこに建築がそもそもいいのか、原っぱや公園じゃダメなのかみたいなことを思ってしまっ。つまり、そこに建築が必要なのかという根本的な問いかけをされているように感じて、じゃあ必要だとしたら何のためなのかっていうことも含めて、関わってみたいと思うようになって進んでいきました。



■ 改修前のHOGET

それで、このような外観だったんですけど、中ではすでに少しずつ取り組みがされていて、例えば、クライアントさん主催で子どもたちとのイベントを開催されていたりとか。あと、初めて現場に行った時は、結構中が強烈な状況で、地元を拠点に活動されている書道家がアートインレジデンス的に借りていらっやいました。そういった形で、おそらく内部の活動は、ほどほど広い民家でしたし、僕らが大きく手を加えなくてもいろんな活動はされていくんだろなってイメージは十分湧きました。

一方で、それらの活動がこの外には分かりづらくなっていうことも同時に感じまして、例えばこういう外部の状況に対して、少し外をこんな風につくっていけば、もう少し外と中の関係が続いていったりとか、外でもいろんな活動が生まれていくんじゃないかとか。あと、それに対しての中は、物理的な空間の大きさや関係性っていうのは見えてくるので、こんな機能が入ったらこんな風に使われるんじゃないかっていうような、案を決めるというよりも、対話を主眼に置きながら、いろんな議論を1年半ぐらいかけて進めていきました。

それで完成したのが、冒頭にお見せしたような、このような形になります。特徴としては、外が高さ2メートルの石垣でずらっと覆われていたのと、この空き家の民家、周囲に閉じたような構えでしたので、そこにちょっと注力をして、地続きになるような関係をつくって、その流れの中に内部もあって、それがずっとこう繋がっているような関係にすると、中で行われてることも自然とこのまちやこの国道の方に出ていくんじゃないかみたいなことを話しながら決めていきました。中はもともとこういう状況だったんですけど、白いエキスパンドメタルだけを挿入



■ HOGET
©YASHIRO PHOTO OFFICE

して、西海で行われているさまざまな活動がここで可視化されていくような使われ方を想像していました。例えば、これは、西海の作家さんでバッグをつくってる方が、ポップアップされてる時の写真です。エキスパンドメタルにつくった作品を引っかけて、そのまま買えるようにもなってますし、作家を知るきっかけにもなっています。冒頭に御紹介したハシグチリントロウという書道家の作品も、エネルギー溢れる状況そのままに展示をさせていただいています。あと、レコードショップのイベントで、15万枚のレコード所蔵しているとんでもない場所が、西海の山奥に眠ってまして。でもそれアクセスがすごく難しいので、みんななかなか知る機会がないってことで、この「HOGET」で可視化するようなイベントを行っています。坂本龍一さんと高橋幸宏さんが亡くなられた時の追悼を兼ねたようなイベントの時はこういう風景ですね。

そして、少しプロセスの話をしますが、施設名の由来である石鍋がこれです。この石鍋のことを西海では「ホゲット」と言います。1000年前は、日本の石鍋の9割はこの西彼杵半島でつくられていたそうで、今も、畑からゴロっと出てくることがあるそうです。でも、そのことを周りの僕らは知らないし、だんだん地元の子供たちも知らなくなってきたということでした。実は、このような遺跡が残っていて、よく見ると、石鍋を掘ろうとした跡がたくさんあるんです。当時の手彫りの跡が生々しく残っていて、その荒々しい手垢のようなものを、今の子どもたちと、「HOGET」のコンクリートの部分に、今の子どもたちと一緒につくろうというイベントを建設時にやりました。

もう1つ、クライアントはTシャツのプリントなどをさ



■ ホゲット(石鍋)
©little comm.

れている縫製業の会社で、シルクスクリーンプリントのための木枠が40年分ぐらい残っていたので、地元の子供たちと床やカウンターに張り付けていくようなワークショップをやりました。床とかカウンターとか、今でも、「ここは僕が張ったんだよ」みたいなことを言っている、自分ごとになってるような親子と毎年のように会っています。

竣工写真では、外は結構ドライな感じに見えるんですが、例えば夏祭りの時、人口6600人ぐらいしかない町なんですけども、非常にこう溢れ返るような状況が生まれていたり、隣接する芝生広場も、地元出身のサックス奏者さんが演奏してくれたりとかいう風景も生まれています。フルーツサンドの販売がここであると、並んでる人たちが可視化されたり、近くの保育園のマーチングイベントをここでやると国道からも見えるんですね。これらがすべて、この階段、中や外もいろんな場所で行われ始めている。このような形で、人口6600人ぐらいの西海町での出来事であり、竣工以降に生まれている状況っていうのは、すでに決められた用途の依頼を受けてきた僕らにとっては、かなり衝撃的な出来事でした。

それと少し重なる形で依頼が来たのは、人口7000人ぐらいの町の「HOGET」と同じく、人が集まるような場所をつくりたい、でもどうしたらいいかわからないというような依頼で、関わってほしいということでした。こちらは新築でしたけど、敷地の条件や予算内でできる可能性みたいなことを「HOGET」と同じように洗い出していきながら、対話しながらできていったものです。最終的には、縫製場とコインランドリーとカフェが入って、この共用部は、イベントやYouTubeの配信スペースになっていたりします。この建築は、直角二等辺三角形の平面をしてるんですけど、テーブルも同じ直角二等辺三角形でつくっていて、三六板から歩留まりよく設計をして、地元の方々と協力し合いながら、制作をしていきました。上棟の時は、餅撒きをしたり、この施設でも、完成する前からの仕掛けがなされていました。

こちらは、長崎市内の事例で、「DS Branch」というところで、もともと銀行だったマンションの1階を、IT企業さんが休憩スペースとしてつくりたい。でも、周囲に開かれたような場所なので、マンションの

住民や地域の方々に還元できるような場にしたいが、どうしたらいいかわからない、というような依頼でした。結果的には、Wi-Fi、電源は無料で、飲食も持ち込みオッケーで、いつまでいても場所代は取られないということで、公園のような自由な場所になっています。また、IT企業ならではのデジタル技術を活用したイベントだったり、長崎で言うと、おくんちの棧敷席のように活用できるような、山のような場所になってます。

こちらは、島原で実家の古民家をなんとかしたい、でもどうしたらいいかわからないっていうような関東在住の方からの依頼を受けて、こちらと同じく、ポテンシャルをどんどん対話しながら、最終的には農泊をメインとした、子どもたちやインバウンド向けの交流体験施設のような形に至ってます。今日、ちょうどオープニングイベントが行われています。

続いてこちらは諫早市のアーケードの中心にある旧銀行の建物です。こちらは広い300平方メートルぐらいのスペースで、飲食をやることは決まっています、それ以外にも結婚式だとか、様々なイベントをやりたいっていうことで、予算が非常に限られていたので、家具だけを設計しました。ちょっと歪な形をした有機的なテーブルだけでも同じ形で、20個ぐらい設計をしてつくっています。家具だけで様々な活用のきっかけにもなるんじゃないかっていうことで、出来上がっていきました。小さな島をつくったりとか、イベントの時は、半円みたいに繋いで、こちらを見るような形にしたり、全部繋げば、一体的なディスカッションができたり、結婚式では、このように使われたり、音楽イベントではもう少し有機的に使われたりとかですね。こちら3日前にオープンしたばかりの建物です。

事例としては最後ですが、空き店舗となった魚の加工場を、地域交流もできる訪問看護ステーションとして、リノベーションに携わってます。地元医師とのカンファレンスとして活用されるだけではなくて、いわゆる社会的処方と言われるものの1つとして、地域の方々と医療や介護を身近に感じてもらうようなイベントが行われていたりとか、外がもう自由に解放されてるような場所になってます。一気にお話し

しましたが、長崎ではこのような、程よい公共性のようなものが感じられるところが点在してきているように感じます。この赤いところが、僕らが携わっているんですけど、それ以外にも、白いところは多分これ以外にもたくさん出始めていて、長崎でそういう場所が増えてきているなと感じています。

僕なりにまとめてみたんですけど、まず、これらはすべて民営です。民営であることは特徴的だなと思っています。場所の規模はほどほどで、300平方メートルぐらいが最大かなと思います。あと、何らかの機能を持ちながらも、そこに人が関われるような、敷居を下げる意図があるような気がしています。あと、これはわからない隠れた特徴ですけど、ほとんどの事業者さんたちが知り合いで、情報共有しながら、協力し合う関係にあるように思います。僕はその島原に暮らしているの、その状況がとても羨ましいなと感じてきましたし、こういった場所が、長崎に少しずつ点在していけば、長崎全体が、もう少し豊かに暮らしやすい面的なエリアになるんじゃないかなと妄想しました。それを思うと、自分が暮らしている島原でも、そういう場所が欲しいなって、思うようになってきたんです。

そんな中で2023年から始めたのが、「水脈mio」という場所です。湧水が芳醇な島原で、まさしく、水のように人も流れてきて、淀んで溜まって、また流れていくってような、そういう場になってほしいって願いを込めて、水脈と書いて「mio」という場所にしました。万町アーケードという、この真ん中にある、築175年の由緒ある古民家です。島原市が所有している建物で、改修のプロポーザルとして、設計

者として選んでいただいて、そのあと賃貸借の契約で運営まで行っています。アーケードに広く面していて、1階の間口が広いところに入りやすいカフェがあって、別の入り口から入る客室が2部屋あります。2階に登るとコワーキングスペースがあって、僕ら「インターメディア」はここを拠点にしています。設計事務所から見ると、設計事務所を開いているような形でもあります。カフェでは、湧水が室内に流れているってのも大変特徴的で、客室も、湧水がこう流れてきているんですね。建物自体がすでに島原の文化的特徴をしっかりと表していたので、僕らはそれに寄り添うようなプランを意識してつくっていったところです。アーケードに面しているの、近隣店舗と連携して夕食と朝食を提供したりとか、まちに面的にアクセスしていただくような仕掛けを行っています。普段はカフェとして、このように周囲に開かれますが、2階はコワーキングスペースがあって、平日はかなり僕らが散らかしていますが、コワーキング利用者の方もいらっしゃいますし、週末は高校生が勉強したりもしています。カフェスペースは、程よい広さなので、この小上がりのところをステージに見立てると、音楽イベントができたりとか、高校生が主体になったダンスイベントをしたりとか、地元出身のアーティストの活動を知っていただく機会をつくったりとか、私の知り合いの同世代の建築家を中心に、イベントを定期的にしています。九州の建築家だったり、ちょっとまちづくりのようなイベントを行ったり、実に多様な方々が、少しずつ参加してくれるようになってきました。あとは、島原を題材にして卒業設計をした大学生もいましたので、地域の方々に直接意見を聞いていただくようなイベントもやりました。そして、最近取り組んでいるのが、地元の高

校生との探究活動で、40人ぐらいの子たちと一緒に取り組んでいます。僕に、アドバイザーとして関わってほしいと依頼をしていただきましたので、それであれば、高校ではなくて、地域に開きやすい「水脈mio」の方で活動しましょうということで、コミュニティスクールのような発展にも繋がればなと思いながら、色々仕掛けています。先月は、地域の祭りに絡めて市民の方々とアーケードで公開討論、思っていることを発表する場所をつくるまで広がってきました。島原には大学がないので、高校生の身になって、18歳になったらほぼ県外や半島外に出て行ってしまふんです。その状況を考えた時に、18歳まで島原にいるんだってことは非常にかけがえがないことだなと思って、この貴重な時間に一緒に地元のことを考えて、島原を離れたとしても、少しでも島原をまた思うきっかけになったり、場合によっては、離れているけど何か関わってもらえるきっかけになったりとか、そういう将来的にも貢献してもらえようかなということ、種を撒いてるような形です。そうすると、島原が衰退しながらも豊かに暮らせるような場所になるかもしれないと願いながらやっています。こちらは「水脈mio」から繋がってる関係性を簡単に図にしたものですけど、設計事務所だけ見るとこういう繋がりですけど、「水脈mio」があることでいろんな繋がりがまた広がっているなってことを実感しています。

最後に、先ほど公共性を感じるものとして挙げた4つのキーワードに少し考察を加えていきますと、「民営であること」は、僕としては、むしろ公共の方は自由な場所をつくりづらいつ時代なのかなと思ってます。公園でボール遊びすると怒られるような時代なので、むしろ民営で自由な場所をつくってほしいって気概が長崎にあるのかなと思ってます。あと、「場所の規模がほどほど」っていうことも民営だからこそ、大規模スペースは、自治体や行政がホールをこういう場所を有していたりしますの、ほどよいスペースだからこそ、民間でも始めやすいのかなと思ってます。あと少人数でも5人から10人でも、居心地のいい場所への渴望みたいなものもあるんじゃないかなと思ってます。「何らかの機能を持ちながらも人が関わる敷居を下げる意図が感じられる」って話は、機能がないと収益性がなかなか

ない。民営なので、そういうメリットがないと場の維持が難しいから、そのバランスは取ろうとされているのかなっていうのと、あと物理的なコミュニケーションがなかなかない。地方だと車社会なので、物理的な、ふらっと会うみたいなことももうほぼない。なので、物理的なコミュニケーションが欲しいがために、人が集まる場所が欲しいって活動もあったりするのかなと思ってます。あと、この最後の「ほとんどの事業者同士が知り合いであり、情報共有しながら協力し合う関係にある」ってのも面白くて、過疎化や人口流出が長崎では非常に叫ばれているので、その危機意識がみんなの根底にあるんじゃないかなと思ってます。なので、みんな同じ方向を向きながら暮らしているっていうのはちょっと皮肉ですけど、ある意味動きやすいのかなとも思ってます。あと、設計者から見るとハコモノをつくる余裕がない。もうそこで失敗するとそのまちがなくなるかもしれないぐらいの気持ちで僕は関わってるつもりです。これから、僕らは設計事務所を本業として、その建築に携わる人たちが豊かに過ごせるような建築をつくっていきたくて思ってますし、一方で、この程よい公共性のようなものを、僕らが住んでる長崎エリアが豊かに衰退していくためにも、僕ら設計者として関わられる取り組みかなと思っています。そして、それを運営者として実践できる場として、地元島原に貢献できればなと思っています。

最後になんですが、この地図見て皆さん思うことありませんか。実はめちゃくちゃ近いんですよ、ここから。ここなんか船で渡れたらいいなと思ったりしませんか。あるんですよ。30分で行けますので、皆さんまだ今3時半ぐらいですよ。最終便に全然間に合うので、皆さんこれから「水脈mio」に、遊びに来ていただければと思いますし、交流会に参加する方、明日7時半から出ていますので、よろしければ、ぜひ僕らの活動をご覧になっていただければなと思います。そんな中、いち早く、曾我部さんがお越しいただきましたので、なんだかペアルックみたいな写真を撮りました。こういった形で皆さん是非遊びに来ていただければと思います。ご清聴ありがとうございました。



■ 水脈mio
©サカタマサキ



■ 地元高校生との関わり(水脈mio)

04 『自分たち事』の場づくり／森田秀之(マナビノタネ)

あらかじめオーバーしますと言っておきます。先ほど、事前に打ち合わせして、20分経ったら一旦終わるというお約束をしましたので、もしかしたら途中で終わっちゃうかもしれないんですけども、その時には、興味があればディスカッションの時にお話できればと思ってます。私は建築家ではありませんで、これからお話しすけれども、設計をしている身ではありません。今日、ご紹介する場所は、施主の立場でもあります。30年間、図書館とか、博物館のいろいろな計画を立てる側でお手伝いしてきました。様々な場所の計画をお手伝いしてきました。元々は物理を専攻したんですけども、そこから、新しいメディア情報環境を整えるという仕事を始めて、実は、伊東豊雄さんの手掛けられました、「せんだいメディアテーク」の情報環境のお手伝いもさせていただきました。こういった、ほんとに特徴的な、柱もない、壁もないというところを実際に経験したわけですけども、ここで本当にこういった公共の空間が居場所になったというとても貴重な原点的な経験をさせていただきました。2001年オープンですけども、2002年、2003年に「共有のデザインを考える」というスタジオトークセッションが行われました。ここで渡辺保史さんという方が司会進行をやられたのですけれども、このトークセッションで「自分たち事」という言葉が出てきました。どういうふうに出てきたかという話しは、ここでは時間がないので省きますけれども、自分事と他人事、「他人」事と書いて「ひとごと」と読みますけれども、その両方を合わせた場をどうデザインすればいい

のかという議論がありました。以来10年ぐらい渡辺さんはこの「自分たち事」を温めていらっやっただけですけど、今から11年前に、この本が完成する直前で急逝されてしまいました。私も本当にこの「自分たち事」という言葉がとても大事なんじゃないかと思って、ずっと使わせていただいています。

2001年に「せんだいメディアテーク」がオープンした後に、島根県古代出雲歴史博物館の開館事業と並行して、2005年に愛知で開催された「愛・地球博」のサイバー日本館のディレクターをやりました。この万博は地球環境をテーマにするということでしたので、自分自身も地球環境がどうなっているか知りたくて、いろいろな専門家の方々にお話を伺い、それから、ライターさんから上がってくるインタビュー記事を読みました。すると、どの方も、もう地球はぶっ壊れているとおっしゃっていました。例えば、地球は、随分前に地獄の門をくぐっていると。地獄の門ってというのは、後戻りができないという意味ですけども、もう後戻りできません。たとえ今、原始的な昔の生活をしたとしても、温暖化のスピードは徐々に緩やかにはなるけれども上がり続けて、100年間はもう灼熱地獄ですとおっしゃって、未曾有の台風が来るし、砂漠化も進むし、地球規模で食糧難になるでしょうと。政府のやっていた万博ですから、残念ながらそこまでは伝えることができませんでした。私は東京の会社に通勤し続けることに対してこのままでいいんだろうかと考え込むようになりました。

こうして翌年の2007年に会社を辞めまして、長野県の御代田町というところに移住をして、家族を巻き込んで実験台に、自分たちの食料をつくるのはどのぐらい大変なのかということを試し始めました。米づくりを1年やってみてすごく学びが多くて、2年目から人を呼んでこんなふうに田んぼの活動をみんなでやっています。今、15年、15回目を終えましたけれども、300人がエントリーしていて、大体50人から100人が田んぼに作業しに来て、こういったお米づくりをしています。

それから、エネルギーの問題ですけども、日本は

木質バイオマスエネルギーが最も有効だということを「愛・地球博」で知りました。なので、薪づくりをするということで、移住した翌年、2008年から、このブルーのジャンパーを着た方が私の山仕事の師匠ですけれども、16年ぐらい学ばせてもらっていて、冬場になると木を伐ってきました。今や、2人から始めたことが20人ぐらいの人たちと一緒に学びながら山を整備しています。

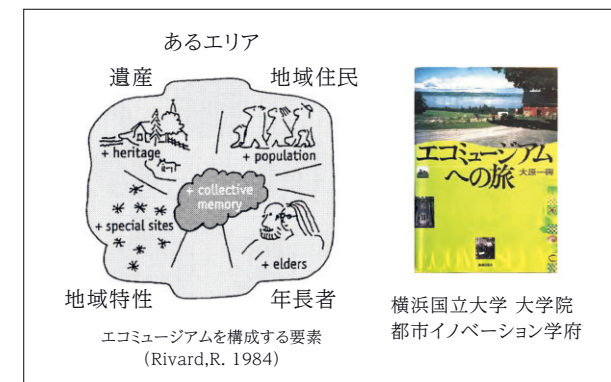
移住をした後にお手伝いをしたのが、「武蔵野プレイス」という場所です。東京の中央線の駅、武蔵境駅のすぐ降りたところにある図書館を含めた複合施設ですけども、ここの基本計画づくり、それから開館支援までお手伝いしました。移住した長野県は全国で1番公民館が多いものですから、公民館での交流活動というのも経験していた。地域にいろいろ出てくる課題をみんなで解決していくということであれば、本が好きな人だけが来るという場所ではなくて、あらゆる人が来るようにしなければならない。ということで、ひとり静かに使うというような図書館の作法を一旦消すために真ん中にカフェをつくったり、いろいろなことをしました。1番特徴的なのが、地下2階に青少年の居場所をつくったことです。「ティーンズスタジオ」という名前を付けましたけれど、まず計画をつくった時に中高生にヒアリングをしたんですね。「こういった場所をつくるんだけどみんな来る?来てくれるかな?」って聞いたら、「いいと思うよ。だけど自分たちは行かないかな」というふうにみんなに言われてしまったんです。なんでって聞いたら、「自分たち、宿題があるし、塾もあるし、クラブ活動もあるし、友達と遊びたいし、ゲームもやりたい。ここにくる時間なんてないよ」と。「だったら、ク



武蔵野プレイス ティーンズスタジオ

ラブ活動は残念ながらできないけれど、塾の帰りにここ寄って喋ったり、おやつも食べられたらどう?」って言ったら、「だったら行くな」って言ってくれたので、全部許すことにしました。ここではカップラーメンも食べられます。

こうして準備をして2011年に開館したんですが、同じ年の3月に東日本大震災というとても大きなことが起こりまして、私も、せんだいメディアテークで一緒にさせていただいた伊東豊雄設計事務所出身のヨコミゾマコトさんに誘いを受け、石巻市の半島部に復興支援に入りました。土木や建築の一流の専門家と一緒に入ったわけですけども、私はどの専門でもないの、何をしたらいいのかわからなかったんですね。でも、こんな光景のところに以前「まち」があって、そこにもう1度住みたいんだと住民の方が言うんです。でも全然まちがイメージできなかった。ここに神社があってねって言われてもわからない。そしたらたまたま津波を免れたパソコンの中に写真データが残っていた。それがこの写真だったんです。神社で正月にお祭りをしている。みんなが言うまちがなんとなく見えてきた、分かってきた。それまでも建築家の方々と一緒に仕事をしてきましたが、自分は建築のことを何も知らないのはちょっと残念だというか、後ろめたく思っていたので、2012年に横浜国立大学の建築計画の先生の研究室の門を叩いて入れていただいた。その方は大原一興先生という方なんです、専門は図書館や博物館、高齢者、保育園などの施設で、さらに「エコミュージアム」、地域全体を博物館と見立てるとい、1960年代にヨーロッパで始まった取り組みの日本の第一人者だったんです。



エコミュージアムへの旅(著:大原一興)



森田秀之(マナビノタネ)

大原先生の著書の中でこの左側の絵を見つけました。住民がいます、暮らしがあります、名所旧跡があります。この真ん中が空洞で、ここに「コレクティブ・メモリー」と書いてあります。「集合的記憶」と日本では訳されていますけれど、共通の記憶があると。自分は、この地域の集合的記憶を集めようと思って、必死になって浜のお母さん方とか漁師の方々とかに聞き回ったりして。集めた記憶を新聞仕立てにして大量に刷りました。それを浜の方々がボランティアに来た方だとかいろいろな方に手渡しました。そうすると、別の記憶がまだありますということで、続編をつくることになり、住民の方にも企画会議に参加して頂き、写真を撮って頂いたり、文章を書いて頂いたりしながら完成させました。出来上がった後、ひとりの女性の方が私のところに来て言ったんです。「自分はこの場所が本当に好きなんだということがわかりました。私、ここに住み続けます。」と。泣いていました。そこで僕は思ったんです。まちってというのは記憶でできているって。もう少し言うと「世界」は記憶でできているんじゃないかなと思いました。この頃、各地でいろいろな地域づくりの仕事をしていましたが、地域の人々の共通の記憶がどれだけ大きかったり、深かったりするかということが、人の結合力とか、暮らす力にかかわっているんじゃないかという仮説を立てました。

被災地のこのような低平地には建物を建てられなかったの、建築家の方々と協力してトレーラーハウスを3棟持ってきて、高台移転地の工事の進捗の掲示もしながら、集合的記憶をみんなで語り合っていくというような場をつくりました。

石巻市で4年半支援をした後に、今度は宮崎県の都

城市というところの図書館のオープンの支援をしました。都城市というのは宮崎県の第2の都市で、かつては3つのデパートがあったんですけども、それも全てなくなって、最後に残されたこの大丸センターモールというショッピングモールの建物をコンバージョンして図書館をつくるお手伝いをしました。こういった典型的なショッピングモール建築を図書館に変えていくということを家具の力とか内装デザインの力を使ってやりました。コンセプトは、「ひとりひとりが『だいじなもの』をみつけていくために」としました。実は、ここを運営している指定管理者の責任者もやっけてもう7年目に入ります。スタッフの方々はほんとによく頑張っていていて、いろいろなイベントをやっている。でもイベントをやるのが目的ではなくて、市民のニーズを察知することを目的としてくださいというお願いをしています。子どもが対象のこともやっけていて、何が喜びのかわっていることもみんなで見ている。多くの人々に開かれたパブリックライブラリーをつくったわけですけど、そもそも「パブリック」な場ってオープンになったらいいんだろうかっていう問いにぶち当たりました。パブリックの対義語は「プライベート」ですね。そして「コモン」という言葉もある。コモンはパブリックとプライベートの間にあるんじゃないかと皆さん多分イメージすると思うんです。私は、コモンはプライベートの先、パブリックとは正反対の側にあるんじゃないかなと思うんです。それは、プライベートなこと、すごく個人事に対して、それを叶えるために、課題を解決したり実現するために、仲間と手を取り合っけてやっけていくという、非常に個人的なことの延長なんじゃないかと。一方、パブリックってというのは誰でもいいよってということ。これはとてもいいことなん

ですけども、正体を問題にしない、つまり関係を求められない、求めないんですね。そういう「パブリック」の中で、「コモン」のことをやろうとすると、信頼、信用をちゃんと築くには非常に大きな壁があるんじゃないかと思います。なので最近は、「コモンプレイス」というのを新たにづくらなきゃいけないなと思っています。「コモンプレイス」がとてもいいところは、ひとりひとりが役割を持つことができ、あなたはこれやっけてください、私はこれをやります、ということができるとのこと。「パブリックプレイス」の場合には主客の関係がほぼ固定してしまっけて役割分担がしにくい。これがとても大きな違いなんじゃないかなと思います。

これからますます農地や山林が守れなくなっけてくる。どうやっけたら守ることができるかを考えていて、「コモンプレイス」をつくっけてやっけてみようということになった。こうしてできたのが、今日紹介したい場所、「コードマーク御代田」です。

これが私の住んでいる長野県の御代田町です。向こう側にあるのが浅間山で、この後ろ側に続いている森が、私たちが冬場に木を伐るところです。ここを下ったところには川が流れてまして、その川の流域で田んぼをやっけています。そういった山と里との境界に小さな「コモンプレイス」をつくったということです。現在約60人が出資して、株式会社で運営しています。このやり方はJリーグのやり方と同じで、Jリーグの場合には、サッカーに興味があるファンがファンクラブに入ってサッカーチームを応援していく。ファンクラブは集まった会費を、チームを運営する株式会社に投資していくわけなんです。同じように、ここでは里山のファンクラブを持株会という形でつくり、

集まった入会金を株式会社に投資して資本金にしてやっけています。このやり方は、弁護士や公認会計士の先生と相談をしながらつくっけていったもので、たとえば1口5万円で1000口だったら5000万円で、そういった規模で何かが守れるような仕組みです。この撮影をしている日はちょうど田植えで、終わった後に皆さんでお疲れ様会をしている様子ですけど、こういった里山を守って生き延びる、これから生きていくためにどうしていかなきゃいけないのか考えたり思ったりするための拠点をつくっけて3年目になります。設計はアイダアトリエにお願いしました。会田友朗さんが代表の建築事務所です。1階はカフェになっていて、飲食店と密封包装食品製造業のダブルで免許を取っけています。自分たちがつくったお米や大豆からつくった味噌を使って食事をつくっけています。それから、村の人がたくさんつくっけて食べきれないサツマイモだとかカボチャだとか、ブルーベリーとかいろいろなものがここに運び込まれて、それでアイスクリームやジャムなどをつくります。それから山仕事をやっけていくメンバーもここで会議をする。こういうことをやっけていると県の林務課だとか林業士を育てている林業総合センター、県立図書館の方々も来て、一緒にコラボレーションしようということになってきています。様々な里山を知るための入口を、ものすごく敷居を低くして、山に入っけていい匂いがする木々を拾っけてきてアロマウォーターを抽出してみたり、栗のイガを煎じて草木染めをやっけてみたり、竹を伐っけてひごにして竹細工をつくるとか、里山に関するいろいろなことをここでやっけてます。

「自分たち事」の場のつくり方ですけども、まず、良い居場所をつくらないと始まらないっていうのが私の考えです。良い居場所があると安らぐ、安らぐとずっと居たくなっけて、その場を守りたくなる、大事にしたいなっけてるんです。場ってというのは、空間だけでなく、人も、自分自身も環境の1つだとか、そう考えると人も自分も大事にする。自分たちのために場を整えるし、つくる側になっけていく。嬉しい経験をして、試行錯誤しながら「自分たち事」を行っけて、既成概念に囚われないで自発的により良い暮らしを目指す。これが自治の意識が芽生えることなんじゃないかなと思います。



■ 集合的記憶の展示 (宮城県石巻市)



■ 都城市立図書館



■ コードマーク御代田
©野秋達也

良い居場所はこうしたらできるかと聞かれることがあるのですが、キーワードは「ゆるゆる」だと思っています。はじめの「ゆる」は「緩」さです。もう1つの「ゆる」は「許」せるですね。緩さがあると許せるということで、例えば、空間の境が緩いと多様な環境ができる。それから、ルールも緩いと自由なこと、発想が生まれる。属性も揃ってない、いろいろな属性の人がいると同調圧力を感じることもなくなります。権利とか責任が緩ければ、私これやりますとか言えるわけです。責任を求められると言えないですよ。あと、目的、機能があまり定まっていない。定まっちゃうと、合理性とか、効率みたいなものを問われて、建築なんか特にそうですけれど、ここは無駄なんじゃないかみたいなことを言われて、そういう遊びというか、質に関するところが削ぎ取られてしまう。それから、価値付け、これはKPIがそうですけども客観的な指標っていうのも個々の主観が尊重されにくいということが起こり、居心地が悪くなります。

まとめです。場づくりというのは人の内面に关わるものじゃないかなと思っています。場所を人の内面に合わせていくという。普通は逆だと思われているんですけど、まず人の内面があって、それに場所を合わせていく。建築の計画の段階からそれはできるし、設計の段階でも十分できるし、なんだったら、家具の段階でもできる。これ、緩くないと人の内面に合わせていけないと思うんです。ですから、先ほど伊東さんがおっしゃった、みんなの家には仕切りがないということとか、そういうことは非常に大事だと思います。そして、いろいろなことを許せないと人の内面が見えてこないんですよ。なんか困っているような人がいてもルールが厳しかったりするとどんな思いでいるのかがよく見えてこない。ということで、自治やその意識が芽生えるような場をつくるためには、「ゆるゆる」をどうデザインするかだと思っています。

第3部 ディスカッション「新しい公共性とは何か」

曾我部昌史(以下、曾我部) それでは、ディスカッションを始めたいと思います。第2部では、4名の方々から、それぞれの活動についてお話いただきました。それぞれ関わられている地域ごとの特徴に合った活動内容でしたし、また、それぞれの関わり方の立場も違っていて、大変興味深いお話を伺えたかなというふうに思いました。一番気になるころとしては、そういう関わり方に向かっていくモチベーション。また、会場に集まられている方の多くは、建築の設計に関わっている方や、設計事務所を主宰されていたり、建築を勉強している若い方々が非常に多いと思うんですけども、そういう人たちが気になることとしては、収入はどうなっているのかということ。先ほどの佐々木さんのお話では、用途が決まっている依頼と決まっていない依頼というふうに分けられていましたが、用途が決まっている依頼だと、何となく何で稼いでいるのか想像もつく。そうでない場合には新しい建築家の職能として、どのように位置づけられているのか。森田さんは立場が異なりますが、お考えがあれば、どういうモチベーションでやられているかっていうことと、職能としてどのように位置づけられるているのかについて、一言ずつ簡単に解説をしていただきたいと思います。今日の発表順でお伺いしてもよろしいですか。

金野千恵(以下、金野) モチベーションや建築家の職能についてということですが、建築をやっていく上で、暮らしを考えるとということが根本に大きくあると思っています。そうした時に、自分がどう生きてい



■ 曾我部昌史 くまもとアートポリスアドバイザー

きたいかっていうことを考えることを、どうしても重ねざるを得ないと感じています。最後の森田さんの「自分たち事」っていうものの延長かなと思いますが、用途、期限、予算が全て決まっているから、こうですと手を動かすだけではなくて、今私たちの仕事としても、基本計画のように枠組みから考える仕事が多いのですが、必要なものが何で、建築家が何をすべきで、何をしないべきかというところから一緒に考えることに、新たな可能性を感じています。

曾我部 あまり掘り下げてもあれですけど、例えば実現するまでに7年かかったんですけど。その7年間というのは無報酬ですか。

金野 ダイレクトなご質問ですね。最初の3年間は、本当に部分的に行政に書類を作成する時だけいただいて、あとはなかったです。でも実は、他のプロジェクトを3つ、その間に同じ法人さんとさせていただいて、それらと並行して寄り合いに出るということが続けていました。

曾我部 ありがとうございます。踏み込みすぎました。家成さん、いかがでしょう。

家成俊勝(以下、家成) モチベーションなんですけども、建築家としてというのを一旦置いて、1人の生活者として考えた時に、本当に、生きてて楽しいなっと思える瞬間が少ないっていうか、結構しんどい社会やなっているとも思っています。1つの理由としては、自分がどうしてもこのシステムの中では受け身的になってしまう、消費者的になってしまうところがあって、自分たちでもっと能動的に自分たちの状況をつくっていきたいっていうのが1つのモチベーションで、その時に建築を通して実現できることがたくさんあるなというところ。僕は職能という意味では、建築を設計するだけではなくて、つくっていくこともありますし、そのつくったその場所をいかに運営していくかっていうこともありますし、同時に映画つくったりもするんですけど、建築がここでは求められてないなっていう時は映画つ



くってみたりとか、その時々に合わせて、自分のやることを変えていけると思っているので、建築を通して学んできたこととか、やってることって、いわゆる狭い範囲の建築に閉じないようなことも含まれていなくなっている風にはすごく思ってます。

曾我部 「クリエイティブビレッジ構想」ですが、あれは事業としてやられてるんですか。

家成 あれは千鳥文化を依頼してくれた不動産会社が事業としてやってるんですよ。僕は北加賀屋にいるアーティストの方々全てを知ってるというわけではないので、程よい距離感で「クリエイティブビレッジ構想」と付き合っている感じです。

曾我部 もうちょっと掘り下げたいところもありますけど。佐々木さん、いかがでしょうか。

佐々木翔(以下、佐々木) 僕の関わり方のモチベーションは、先ほど申し上げた中にもありましたけど、長崎が過疎化と人口流出がものすごく、もう好きなお店がなくなっていくとかっていうのが本当に身近にある。あと、設計者としても、使われないようなものを間違えて設計してしまったら、本当にそのまちに対しての影響が大きいなと感じてます。なので、用途が決まってる決まってないってことで、ちょっと分かりやすく説明しましたが、既存の用途に当てはまらないものの方が、渴望を感じるというか、何のためにこの建築が必要なのかが、むしろ今の時代ですごく肌感としてわかってくるところがある。要はオフィスという言葉だけではもう捉えきれないような想いがある、何のためにオフィスが必要なのかって問いをよくしたりもするんです。要

するに、何のために建築が必要なのかっていう話が結構できるのが、非常に僕は興味深いし、設計をしている人間として非常に面白いなと感じています。ちょっと古い人間かもしれませんが、それによって新しい建築が生まれるかもしれないなということにも非常に興味があって、携わってます。

曾我部 森田さん、何かありますか。設計者じゃないですけど、例えばコードマークを運営することに対するそういう話、今一通りしていただいたようにも思いますが、一言でまとめていただくとどうですかね。

森田秀之(以下、森田) 最近、自分の役割ってなんだろうなって思っていて、それで真ん中に立つって言葉を見つけたんです。それはセンターで目立って立つってということじゃなくて、人と人の間にこう立って、この人はこういう思いでやってるよ、こっちは人はこういうつもりで言ってるよってなことを橋渡しするような役でいるなと思っているんです。それは建築家と行政の間にも真ん中に立つ人が必要なが多いけれども、本当にくまもとアートポリスというのは素敵で、行政の方がよくわかっていて仲介役がいなくてもうまくいく場だと思うんですが、なかなか世の中ってそううまくいかないんですよ。そういった真ん中に立つことをやっているというのが、モチベーションというか、自分の役割だと思っています。

曾我部 今日の登壇者の皆さんが目指されていることは、比較的共通してると思うんですよ。金野さんは「民から立ち上がるコモンズ」っておっしゃってましたが、家成さんの話の中にあった社会センターが

目指していることも相当なところで重なっているように思います。佐々木さんが目指そうとしている程よい公共性というの、許容しようとしている内容は近いかなという風に思いました。まさに、森田さんが「自分たち事」とおっしゃっていた「ゆるゆる」ということが目指してるのは、そういうことなのかなという風にも思いました。そういう意味では、この先の新しい公共的な場の在り様というのは、一定の形で浮かび上がりつつあるかなという気もしてきました。コミッショナー、アドバイザーの皆さんから、何か質問などありますでしょうか。

伊東豊雄(以下、伊東) 皆さん、それぞれに違う角度から話をされていて、大変興味深く拝聴しました。共通しているのは、1つは公共性というテーマでありながら、自治体の仕事ではないということです。佐々木さんが言っておられたように、民営ということ。それからもう1つは、共通に設計だけをやっている建築家ではなくて活動をやっておられるという、森田さんは建築家ではないとおっしゃってますけれども、ある意味では全く同じような活動をしておられるということ。もはや建築家というのはそういう活動を中心にものを考える仕事になってしまったのかということを感じながら伺っていました。質問としては、僕は、やっぱり自治体の仕事ということにこだわっているんです。それで、もちろん今の日本の社会はもうひどいことになっていて、アートポリスはその中では相当いい方だと思っていますが、コンペティションにしる、実際の活動にしる、自治体と対応していくというのはものすごく困難なことばかりで、自分のやりたいと思っていることはできない。だけど、僕はそこで自治体と向き合って対峙



■伊東豊雄 くまもとアートポリスコミッショナー

して、少しでもそれを変えていきたいと思うのです。それに対して、皆さん方は、のっけからそういうところは避けておられるような気がしていて、自由で勝手にいいじゃないかと、楽じゃないかというようにも取れるのですが、その辺どう考えておられるのかを伺いたいと思いました。

金野 今日ご紹介したのは民間の仕事だったんですけれども、今、公共の仕事も3つぐらいやっています。あとは、プロポーザルだったり、コンペっていうのも年に1回か2回は挑戦しています。私は根本的には民が官かというのは関係ないと思いたいのですが、現実には、私たちの今までの仕事の中では、民の方が実現しやすいことは、たくさんあると実感しています。けれども、公共でそれをやるにはどうしたらいいかということ、今、挑んでいるところです。例えば、公共の仕事でも、基本計画から始める仕事が多いので、3年とかで部署の変わる行政の人たちだけでなく、その場所と一緒に考えてくれるサークルを町民のあいだで立ち上げて、その人たちと議論しながらつくっています。少しずつ、そうやって公共でも民のエネルギーを形にできるな、という実感もつかみつつあります。私の中では、民が粘り強く関わっていけば、公共事業であれ民間事業であれ、「コモンズ」というのは立ち上がるんじゃないかなと思っています。

伊東 はい、幸せですね。

金野 楽観的ななのかもしれないです。

家成 私は、今日ご紹介させていただいたプロ



■金野千恵

ジェクトが、自分の事務所とそのすぐ近くにある地域交流拠点なので、ある意味ではその仲間、顔の見える範囲の仲間たちと楽しく思えることをやりたいていうのがあるお話を今日させていただいた。その楽しく思えることをできるフィールドがあるのと、もう1つ、やっぱり行政とかあるいは国レベルの自治体のお話とかがある時に、どっちも大切だと思うんですけども、私は、その大きな自治体の仕事は、コンペは多少出したことがあるけど通らないですし、仕事を私にくれる人も少ない、少ないってうかいないので、やりたいけどできないっていうのが1つあります。

僕は、伊東さんが今日紹介していただいたお仕事で、自治体と一緒に組んであいう素晴らしいお仕事をやるっていう活動と、それから我々のちっちゃい範囲の活動とサンドイッチで、息苦しい社会をちょっとひっくり返していきたいっていうのはある。ただ、自治体の仕事にはまだほとんど関わったことがないという状況ですね。

曾我部 家成さんは、このことを暴露していいのかどうかわかりませんが、もう10年くらい前に、とある公共のプロジェクトの設計者に推薦しようと思って確認をしたら、建築設計事務所の登録をされていなかった。そもそも、そこに中心的な関心はおそらくなくて、サンドイッチっておっしゃられてましたけれど、違う角度から公共を変えていこうっていう意識をお持ちなのかなと感じます。

佐々木 僕は2つありまして、1つは、伊東さんがおっしゃられたように、逃げてるところがあるかもしれませんが。というのは、前職で公共建築ばかり担当してまして、その20代が非常に大変だったんですね。というのは、誰のために設計しているのか分からなくなってしまって、公共建築なのに非常に大きな、1万3000平方メートルぐらいの中学校とホールと、300平方メートルのギャラリーって、小さいものとすごく大きいものの設計を担当させていただいていた。その担当者の人と話をしていくんですけど、僕や代表の末光さんも、公共のためにこういう場所が必要じゃなかったって訴えても、なかなかその担当者の人には分からないというか、自分事ではないというか。だから、担当していたからかもしれませ

んけど、非常にそれが苦しくて、それよりも、この人のために建築をつくるっていうことをやってみたいになってというのが、逆にちょっと渴望としてあって帰ってきて、この10年ぐらいは、もうほんと伊東さんがおっしゃったように避けてきたかもしれません。

ただ、もう1つあるのは、僕が拠点にしてる「水脈mio」っていう場所は公共の建物で、それを民間が運営してるという関係になってますので、少しその公共と民営の在り方を考え直すきっかけに僕自身もなりました。そうやって10年やってきて思ったのは、この人のために設計をすると、その人や僕らの関係者の人たちが、そこを使ってみて、楽しく使われてることはわかるんですけど、全く僕らに無関係な人たちを幸せにしたり、何か生きるきっかけになるかもしれないっていうのは、やっぱり公共建築の役割だと思うので、そこにはやっぱり携われていないってことは非常に感じてみいる。なので、この10年間で感じたことを、これからの10年、それを公共建築として僕はどうできるのかってことには取り組みたいなとは思ってるところです。

曾我部 「水脈mio」の活動は、元々公共の建物だっていうこと以上に、その運営も公共から受けてやってるわけで、そういう関係がないわけじゃないのかなとは思います。

佐々木 そうですね。「水脈mio」は、公共所有の建物で、運営は指定管理者でなく賃貸借契約なので家賃を払っている。だから、ある意味自由にさせていただいてるという感覚です。

森田 私の建築での立場、仕事がちょっと難しいんですけど、お米をつくって薪を持っているので、自分から仕事を取りに行くってことはあまりしないです。要するに、自分の役割として、自治体さんなりに求められればそれに応じるというようなやり方をしている、今、厚木市さんと足立区さんと新しい複合施設整備のアドバイザーをやってるんですが、これからは公共が変わらなきゃいけないって思っているところの仕事をしているというような、すごくわがままな状態です。やっぱり、今までの公共ってちょっと勘違いしていて、あらゆる国民や県民、市民に、均等にサービスをしなきゃいけないっていうふ

うに皆さん、職員の方は思われているみたいなんです。本当は、不便に思っている方だとか、怪我をしたり、体調が不調だったりして困っている人に対して多めにサービスをする、不公平な支援をするのが行政だと僕は思っているんです。ちょっと難しい話をしますけれど、例えば、公共図書館も少数の困っている人に対してどう助けられるかを真剣に考えていく。そういうことは市場原理の下ではできないわけで、公共の事業としてやるべきことだと思うんです。そういうことを自分たちもやろうよって言うってくれる人が集まってみんなでやっているということなので、それが新しい公共というような気がします。

曾我部 私も徳島県の南の方の小さな町で活動してます。そこでは基本的に行政と無関係にはものごとが進めにくい。行政と一緒にやってるんですけど、実感としては、さっき金野さんのインドネシアの話の中で、公共サービスが追いつかないから、自治体側で自主的にどんどんやるとおっしゃった。最近の日本の地方都市はそれに近い印象もすでにあって、公共に体力があまりない場合、多くのことに予算をさけない。その地域の人たちが「もう、自分達でやろうよ」というのを公共側が後押しする形になっている。平等とか言ってる場合じゃないなみたいな空気も強まってるかなという気がします。

末廣香織（以下、末廣） 今いろんなお話の中で出てきて、公共って話もあったんですけど、最後、森田さんのお話の中で、みんなで共通に持ってる記憶みたいなお話があったと思うんですよね。皆さん活動されてる時に、すごく楽しんで活動されてるなっていう感じがすごくしたんですけど、そういうみんな



■ 佐々木翔

で共有できるような思い出というか、記憶というか、そもそも人生生きてるうちに、何のために生きてんのみたいな話だと思うんですけど、そういう時に、その時の経験とか記憶とかっていうものが持つ価値とか、そういうものをどうやって育んでいくかっていうことについて、それぞれなんかお考えがあればちょっと伺いたいなという風に思います。

森田 フランス国立図書館を記録した映画は、「世界の全ての記憶」っていうタイトルですけども、日本の公共図書館は文学を中心にした本がある場所に思われてしまっていて、記憶を扱う場所とはなかなか思われていない。もっと、人々の記憶っていうのを扱うような場所が必要なんだけど、それは博物館もちょっと違うなと思っていて、そういった場所ってどこかなって思った時に、先ほど伊東さんがおっしゃった公民館の図書室ってのは、僕もすごく大事だと思っています。巨大な中央図書館をつくるのではなく、村とか地区単位で公民館図書室のようなものをもっとつくるべきで、それはやっぱり住民同士が記憶を共有するための場所であるべきだと思います。

佐々木 ドンピシャでこう答えられるかわかりませんが、先ほどの程よい公共性の話の中で、人が集まる場所みたいなことへの渴望を、どれも共通で感じていたんですけど、さっきの森田さんの記憶の話を聞いた時に、結果的にその記憶を紡ぐようなことを、要は共通の記憶、それがどんどん今、デジタル化も進んで、1人で何でもできるみたいな、個人主義的なところになって失われていっている。その中で物理的な出会い、一緒にいることを求めていく



■ 末廣香織 くまもとアートポリスアドバイザー



と、結果的に記憶が積み重なっていく。もしかしたら潜在的にそういう渴望もあって、そういうことが行われてるのかなって、逆説的に感じたところでした。

末廣 森田さん建築家ではないってことですが、その建築として、そういったことに関われることってありますか。それも含めてお願いします。

佐々木 僕が思っているのは、その建築の設計するプロセスの時に、クライアントももちろんですけど、そこに関わる人たちとの対話とか話し合いですかね。要は設計を僕らが提案して、これでいきましょう、出来上がるものと。そのプロセスもしっかり汲み取っていきながら、こういうものがふさわしいんじゃないかって、つくっていったできるもので、それが先ほどのハコモノをつくる余裕はないと思ってることでちょっと共通するんですけど。結局それは、みんなでその記憶を、共通の記憶をつくるための居場所をつくるためのプロセスとして、そういう具体的なハードとしてっていうよりも、その設計をするプロセスの方が結構大事なんじゃないかなと感じてはいます。

家成 記憶という意味では、1つは、今すぐリノベーションの仕事がやっぱり多くなってる時代だと思いますので、新築と比べた時に、建築そのものがその1つの記憶を喚起するものになってるという風にも思います。「千鳥文化」とかは、その当時の生活の雰囲気とか、大工さんの仕事をできるだけ残していこうっていうのが1つのテーマとして、あったところで、建築としてはそういうことが考えられます。あと、社会センターには多くの場所にライブラリーが入っていて、そこでその地域のアーカイブが

きっちり残ってるんですよ。だから、いろんな人が来て、その地域の歴史にアクセスできるようになってるっていうのが素晴らしいと思います。私が個人的に記憶がすごくいいと思うのは、常にあやふやであるっていうか、過去をいい意味で捏造できるっていうか、考え方を変えて過去をもう1回見れるって言いますか。例えばすごく嫌な思い出があったとしても、振り返った時にもうちょっと楽しい側面も見れるかもしれないですよ。だから、記憶っていうのは常に固定的なものではなくて、すごく動的で、扱い方によっていろんなものを取り出していける場所っていうか、そういうイメージがすごくあります。

金野 今、私たち関わってる仕事、先ほど言ったように、大体設計入る前に、半年か1年はまちの調査をさせていただいています。市史や町史に載っているフォーマルな内容も抑えるのですが、昔ここに物知なおじさんいて、こんなことを教えてくれて、というようなインフォーマルな記憶にも面白さや魅力が詰まっています。そうしたまちの記憶を紡ぎ合わせて新しい環境を考えたいということは考えています。なので、新しい拠点のプロジェクトでも、こういう機能はまちのここにあるから、自分のところで持たなくていいね、というような、何か不完全なことで、敷地外のまちの補完されざるを得ないような全体像を、どうつくれるかを考えていることが多いです。それが、私たちのプロジェクトの中での経験や記憶との関わり方かなと、今、お話を聞いてて思いました。

桂英昭(以下、桂) 話は変わるかもしれませんが、伊東先生の講演も、今日 4名の皆さんの講演も、久

しぶりに楽しい内容で、やはり建築家だけが集まって話をする時代じゃなくなったんじゃないかなって思いました。それで、僕の個人的な経験で言うと、なぜ公共建築がダメかというと、まさに森田さんが言われたみたいに、公共建築は「ゆるゆる」ではないのです。結局、公共建築をつくる時は、まず予算を申請しなくてはなりません。その時、予算というのは結局概算なわけで、建築の機能と空間規模、それが決まって初めて予算が成り立ちます。それを申請してから設計を含めて建築をつくることが始まる。今日の話から言うと死んでるんですよ、スタートが。皆さんが戦ってるのは、その曖昧さどう戦おうとしてるかっていうところに尽きるのではないかなって思っています。

これ非常に難しい。今、この場に参加していただいているのは、熊本県庁の方ですので、正直なことをお話しても大丈夫だと思うんですけど。正確に言うと、アートポリスで建築をつくるケースは県が関わる建築予算のほんの数パーセントいってるかいかなのレベルのはずです。私が、アートポリスを続けたいと思ってるのは、その1パーセントでも2パーセントでもが、将来公共建築のつくり方を変えてくれるんじゃないかという希望を持ってるからです。熊本県の方々と一緒に、伊東先生がおられるからなんですけど。伊東先生がやっぱりコミッショナーとして優れてるのは、勝手に言わせていただいているのですが、先生はファイターなんですよ。戦う建築家って、実はなかなか日本の建築家の中にいないんですよ。曾我部先生も末廣先生もそうなんですけど。公共的な建築のつくり方、本当はそれを突き詰めて話しても、いくらやっても現状の制度ではなかなか難しい。これから言うと、なお難しく



■ 桂英昭 くまもとアートポリスアドバイザー

なる可能性があるんです。例えば個人的な話をすると、昔だったので、たまたま個性的な首長がおられまして、「お前面白いから好きにやってもいいよ」という風な仕事の依頼がありました。要するに先ほどの予算決めも含めて直接特命で頼んでいただけの世界がありました。若気の至りで問題を起こすと、いつも町長とか村長に「議会で説明させてください」って言ったら、説明のチャンスを与えてくれる時代でした。

今の時代は、そのような機会はほぼ失われつつあります。したがって、本日4名のプレゼンテーションをお聞きし、民間的な立場から徐々に公共に攻め入るようなチャンスっていうか、示唆を与えるような活動しておられ、新しい可能性を感じとても嬉しく思ったところです。

前置きが長くなりましたが、質問をしたいと思います。20年後に皆さんはどのような活動しているか、お聞きしたいと思います。お答え前に、勝手な予想を言います。金野さんと佐々木さんは、おそらく空間とかデザインの方にもう少しシフトした活動をしている。家成さんは職業変えてるかも。森田さんは現在のスタイルを持続し続けるのでは。プレゼンテーションをお聞きして、このような印象を受けたという前提の憶測です。20年後にどういう活動をされてるか、あるいはどういう活動をしたいかっていうのを教えていただきたいと思います。失礼な質問ですがお許しください。

金野 先に公共的なところの枠組みの難しさの話で言うと、実はすごく前向きに取り組んでるって、さっきお答えしたのですが、これまで関わった公共のプロジェクトの半分ぐらいが何らかの理由で突然止まるのも経験しています。やはり全然楽しいことばかりではなくて、町長さんが選挙で負けたり、プロボで変なプロセスがあったりと色々ですが、公共は解せない結論になることが、まだまだたくさんあると感じています。

そういう政治や権力に左右される体質自体も変えていきたいです。また、私はもともと建築に興味に向く前に、まちの風景や、都市の雰囲気の違いといった、文化がにじみ出る情景に興味を持ってから建築に入っていったんです。今、やりたいなと思っていることも、その原点回帰のようなところがある

なとも感じていて、まちの調査や人々との対話から、これからの風景を描くことがすごく楽しいと感じています。

最近のプロジェクトでは、建物スケールも1万平方メートルを超えたり、大きいものも増えたので、最初の頃の仕事と比べると、規模的にもまちの風景づくりに近づいていくのかなと思います。本質的には、ドーンと大きな建物をつくりたいというよりは、長く付き合っまちの風景を1つずつ考えていくという仕事に、20年後も携われているといいなと思いますし、それが少しずつ実現しているかなと思います。

家成 先ほどの伊東さんの質問受けてちょっと考えてたんですけど、今私たちがやってるこの小さな仕事ってのは、最初から顔が見えてる人とやってつくっていったってパターンなんです。伊東さんのお仕事って、建築を通して顔が見えてくるっていうお仕事だと思うんですね。その大きな自治体のお仕事で、それを20年後、20年以内にはやりたいという希望を今持ちました。こういう方法があるんだっていうのをちょっと改めて気づいたっていうこと。それからもう1つは、出身が神戸で、阪神淡路大震災で家が全壊判定を受けたっていうこともあって、やっぱり自分たちで場をつくっていくっていうことをやりたいとずっと思っていて。1つは大阪の北加賀屋の私たちの拠点である工場(こうば)があるんですけど、もう1つは今、農場(のうば)というか、それをつくりたいと思って、今神戸の六甲山の北側にずっと出入りして、ブドウ畑の栽培手伝いながら、今同時に畑もちょっとやっていこうと今考えてるので、その工場と農場と自治体と欲張りです。すごいフィールド横断して、それが建築家なのかどうかかわかんないですけど、もしかしたらやめてるかもしれませんが、なんとかやっていきたいなと思います。

曾我部 家成さんたちの活動は、活動当初から、建築家として物をつくるっていうことに対するこだわりはあんまりなかったような気がします。そのスタンスは変わらないままですね。

佐々木 先ほどの桂先生の公共の発注の手前側のプロセスの話からお話すると僕も本当そこは共感していて、公共でそれを変えるの、なかなか今まで難

しいかもしれませんが、民間で依頼を受けるときに、用途が決まってないって話しましたが、例えば、オフィスと工場を複合的につくりたいけど、そこから先を具体的に決めないまま相談してくださるというような機会がだいぶ増えてきた。仕事の受け方としても、設計業務というよりも、設計の手前の企画だったり、基本構想だったりっていうところから、しっかり仕事として受けるようになっていくことは、増えてきてるような気がします。用途を決めきる前に関わることが、建築をより長く使ってもらうためのきっかけになるんじゃないかなとは思っています。

将来の話ですけど、変化が激しい時代なのと、長崎にいと本当に人がいなくなっていったるので、そこをフィールドにしてることが非常に僕にとっては危機感があって、仕事すらなくなるかもしれないと思っているのと、だからこそ、なんかそういう小さな公共性みたいなものに携われるようにずっといたいていうか、その長崎全体の存続のために。存続というか、衰退していくのはしょうがないのかもしれませんが、人が少なくなったって豊かに過ごせると思うので、それを僕らもしっかりそれに携われるような職能を持っていたいです。そういう意味で、桂さんのおっしゃっている空間をつくるみたいなことは、僕はやっぱりその職能がないとそういう機会に僕は携われないと思っているので、しっかり建築をつくるってことはずっと日々続けていながら、そういうことにも携わって、結果長崎が豊かになっていく立場になれたらいいなとは思ってます。

森田 職業名が僕ないんです。いつも名乗れないんです。思うんだけど、これ百姓なんですよ。百の仕事という意味ですけど、百姓って、ある時は農作物をつくり、木を伐り、小屋をつくり、図書館の空間をつくって、旅行業もやってますし、カフェもやってますし、本屋さんもやっている。実際、今そういう状態なんです。その時その時で自分の役割で必要とされるものをやるというのは多分変わらないと思うんですが、やっぱり相当これから社会が変わってくと思うんですね。今までの職業っていうのじゃない、いろんなものが出てくる。ですから、「真ん中に立っていく」っていうことは変わらないんですけど、多分その位置はどんどん変化すると思います。でも百姓をやっていると思います。

曾我部 今日は、日本人のオーディエンスの他に、台湾、韓国からもたくさん来てくださってるということで、背景の異なる方々にも聞いていただいていると思います。台湾、韓国に限らず、会場の皆さんから質問をお受けしたいと思うんですけども、何かございましたら挙手でお知らせください。

伊東 ちょっとその前提になるようなことをお話ししたいと思います。そこに行き着くまでに僕も前座があるんですが、さっき桂さんが言われた、熊本県庁は素晴らしいと。僕も、コミッショナーを16年やっているのですが、この3人のアドバイザーの方たちに助けられてでなければ、とてもやってこれなかったと思うのです。

ほとんど、今のアートポリスのプロジェクトはプロポーザル方式なんですけど、1度として、県の方が口を出したことはない。他のコンペティションだったら、まず自治体の方から、これはやめてくれ、あれはやめてくれっていうようなことがあるのだけれども、どんな案を僕らが選ぼうが一切口を出さないです。それで、それをサポートしてくれる。色々問題はあると思いますが、桂先生をはじめとして、県の方がそれを補ってくださるんですよ。だから僕はやっていて、それでいろんな他府県から見には来るのだけれども、一度としてそれを踏襲しようとする府県はない。

それから、私事で恐縮ですが、先ほど紹介した「おにクル」の建築を周りの自治体の市長、町長たちがみなさん見に来てくださるそうです。でも、見に来て、ええなとは言ってくれるらしいけど、それをやろうという自治体はない。日本っていうのは、本当に僕は情けないと思ってるのです。「せんだいメディアテーク」の時もそうだけど、みんな見学には来るけど、それをやろうというような自治体はない。



■ 家成俊勝

ここからが肝心なのですが、それに対して、韓国それから台湾の人に今回わざわざ来ていただいたのは、ものすごくどちらの国も元気なんですよ。台湾では、僕は、12個ぐらいのプロジェクトをやらせていただいています。それから、韓国でも、今年、ある大学キャンパスのプロジェクトのコンペティション審査委員長をやらせていただいたんですが、コンペティションで指名された建築家は全部外国のチームです。韓国の建築家は1人もいない。それから、審査員も7名のうち4名は外国人です。それで、この案だけは、選んだら大学の理事長が嫌がるだろうと思う案を多くの審査員が選んだのです。それで僕はすごく心配して、審査委員長としてこの案を選んで大丈夫だろうかということを何度も大学の審査員の方に聞いたのですが、大丈夫ですって言うんですよ。絶対理事長を説得しますって。理事長はあまり好きではなかったようですが、今日伺ったら、プロジェクトは進んでいるということでした。わざわざ韓国と台湾の方に来ていただいたのは、そういう元気な国の人たちに来ていただきたいとすごく思ったのです。是非、発言してください。そういう前提で、日本は元気ねえなと言ってくればいいんですよ。

曾我部 それでは、その前提でコメントなり質問なりをよろしく願います。ハードルが上がったかもしれませんが、気にせず。

C David Tseng (以下、ツェン) (通訳・胡佳林)

台湾から来たツェンと申します。さきほど話の中にあった記憶というキーワードがとても興味深いです。



■ 森田秀之

特に、地域によって共通している記憶というものには
すごく感心があり、建築は新しい記憶をつくる力を
持っていると思います。特に伊東さんが、台湾でや
られた「台湾オペラハウス」など、今の若い人たちが
よくそこにいて、若い人たちの世代にとっては新し
い記憶になったのではないかと思います。質問
の1つとしては、若い建築家の方たちに聞きたいの
ですが、こういう建築が持っている新しい記憶をつ
くる力についてどう思っていますか。

また、コメントになるのですが、伊東さんの「台湾オ
ペラハウス」とは別に、「スカイタワー」というプロ
ジェクトがあり、その「スカイタワー」は、建物の前に
古い庭園とか残されているプロジェクトでして、そう
いう新しい記憶と元々既存の記憶が両方あるところ
はすごく面白いなと思っていて、皆さんにも建築
の持っている記憶をつくる力についてお伺いしたい
と思っております。

金野 私たちの事務所は、おそらく同世代の人た
ちに比べると新築のプロジェクトが圧倒的に多く、
改修が少ないです。おそらく、今後は数が限られて
いく新しいものをつくっていると考えたときに、今
の建築家が何を次に繋げられるのか、次世代の人
たちがどういう環境、原風景を持つのかということ
にすごく影響を与えるなと感じています。そう考え
ると、私たち自身が、これまでの時間をどこから引き
受けるのか、よくよく考えることが大切で近視眼的
にならずに、建築やまちからいろいろな奥行きを感じ
られる原風景をつくっていきたいと思います。

家成 私もやはり、その新しい建築が新しい記憶を
つくっていくというのは、その通りだなという風に

思っています。その時にその場所の歴史とか文化と
か、そういう背景をすごく大切にしながら、どうい
ふにできるかっていうことをやっぱ考えたいです。

佐々木 僕もまだ、金野さんと同じく新築はまだ多
い方なんです。長崎の状況で、改修が増えてきてま
すけど、まだ新築も依頼していただけてます。あと
は改修って、工務店とか、建築家が入らなくてもあ
る程度の規模だったらできてしまっていたことを、
だんだん僕らにも依頼がくるようになってきて、要
は設計料払ってでもお願いしたい。それはおそら
く、一般の方々もハード建築に対しての力を感じた
り、信じたり始めてるんじゃないかなという実感が
ある。僕が帰ってきた10年前に比べても、例えば
「HOGET」って場所をつくりましたけど、それを見
て、また小さな会社でも依頼したいって人がいらっ
しゃったりとか、要するにそれは、新しい記憶を建築
がしてくれるんじゃないかっていうことに、多分一般の
方も少しずつ感じてるところもあるんじゃないか
なって、僕は希望は持っています。それがあからこ
そ、僕は建築を、建築の設計者として続けていくモ
チベーションにもなっています。

森田 思い出すための時間とか、空間とか、それを
デザインするっていうことがとても大事だと思いま
す。それは新しい建築であってなくてもできる。
図書館でもそうですし、映画館でもそうですし、何か
を読んだり観たりして、何かこう、「サムシング」です
ね、名付けようもない大事なものを見つけた時に、
それを語り合ったり、そういう場の持つ力っていうの
は、建築家ができるし、建築に携わる全員ができる
ことだと思っています。



■ C David Tseng (ツェン)



ツェン 建築がとても好きで、建築の方々とても
話したいということも、実は理由があって、それは
「コモン」からユニークな記憶がつくられると思うん
です。その「コモン」から生まれたユニークなこと
が、また新しい「コモン」になる。それについてすごく
面白く感じております。

伊東 記憶の問題というのは、森田さんが言ったこ
とに、非常に僕も共感を覚えていまして、やっぱり、
人間には共通の記憶があると思うのです。家成さん
が今やっておられるプロジェクトを見てて、僕も、今
大阪で万博に関わっていて、家成さんには、ひどい
やつだと思われるかもしれないけれども、あの
敷地を見に行くときに、途中船で行ったら、すごい
工場地帯、ほとんど使われていない工場地帯の脇
を通っていったのです。それを見ながら、ここで万
博やればよかったのにとつくづく思いました。あんな
埋め立て地の何にもないところでやらないで、こ
の工場地帯の膨大な空き家というか、空いている
建物を使ってやったら素晴らしい万博になるのにな
と思ひながら。

つまり、人間にはすごく共通の記憶というものが
あって、それは日本人だけでなく、やっぱりアジアの
人には特に、言葉にしなくても通じるような何か共
通の、共同の記憶というものがあって、それが建築
をつくる原動力になるような気がしているのです。
だから、新しい記憶というものも、自分の持っている
古い記憶から、何か新しいものに置き換えられてい
くという時に、初めて居心地の良さにそれは繋がっ
ていくんじゃないかと。森田さんが言われていた記
憶ということと居心地の良さは、本当に連続してい
るような気がしています。

曾我部 共通の記憶の話も、新しい「コモン」が生

む新しい記憶の話も、まだまだ深められそうな興味
深い話題ではあるんですが、すでに定刻を何分か
過ぎてまして、韓国の皆さんからもお願いしたいと
思っております。いかがでしょうか。

HAN, DONGWOOK (以下、ハン) (通訳・姜来秀)

今日のシンポジウムとてもありがとうございまし
た。私は韓国から参りましたハン・ドンウクと申しま
す。3つ質問したいと思っております。まず、1つ目と
しては、公共建築の役割です。特に先生方は16年ぐ
らい、長期的に(コミッショナーやアドバイザーを)さ
れていますが、それはどうやって可能だったのかっ
ていうのを伺いたい。

2つ目としては、国ごとに、政治だったり、文化だつたり、
特に民主主義の意識として、日本と韓国で比べ
てみると、その差があるように感じるんです。そう
いったことがどう影響するのかについて伺いた
いと思います。

3つ目としては、地方自治体としてのことですが、
でも、現代社会としては、一般市民の方も参加して
進めていかないといけないところですが、特にプ
ライベートハウスとか、そのユーザーのニーズと公共



■ HAN, DONGWOOK (ハン)

建築を合わせられるのかっていうことはどうやって解決するのか。また、先ほども出てたんですけども、予算が不足した場合、その足りない予算でどれくらい合わせられるのかってということもお伺いしたいです。

鄭一止(通訳) ひと言、追加させてください。最後の質問、そのユーザーと公共建築をつくる建築家の間のギャップっていう話で、山本理顕さん、結構韓国で愛されて、コンペティションで優勝されて、作品もどんどんつくられてる最中なんですけど、実際ユーザーとしては不満の声が出たり、勝手にアレンジされたりかっていうエピソードがあるんだそうです。

曾我部 ありがとうございます。この3つの質問に全部答えていると時間足りなそうなので、特に最後の質問が1番重要でしょうか。現代社会において、一般市民のニーズに応えるってことのやり方。その他、1つ目は公共建築としての役割、2つ目が日韓の文化的、政治的の差異についてみたいなことだったんだと思うんですが、どれか答えてみたいものについて答えていただけるといいかなと思います。どなたからでも、早めに答えていただける方からお願いしてもいいですか。

森田 最後の質問の市民参加型でつくるという話なんですけど、私はとても慎重派です。なぜならば、まったく新しいものをつくろうとする時に、旧来の、従来のもののイメージをベースに持っていてはつくれないんですね。新しいもの、例えば私たちのアイディアで新しい映画館を仮設でつくって、そこを体験してもらってからもっとどんなことができるかというような聞き方をします。新しい映画館には何が必要ですかと聞いても、今の映画館からしかなかなかイメージがでないんですね。そんなやり方だと市民のありのままの声を聞いてないんじゃないかという人もいるかもしれませんが、そんなに飛躍してもいいのかと分かってもらった方がいろいろな話が出てくると思っている。なので、市民参加型ワークショップをやりなさいという行政に対してはやり方を変えてもらいます。あ、「映画館」は民間施設でいい例えではなかったで

すね、「図書館」に置き換えてください。

家成 僕も森田さんと同じ意見です。

金野 私も完全に賛成していて、ワークショップ自体は良いと思うのですが、何が欲しいですかかっていう聞き方を一切しないんです。むしろ、このまちのどういう場所が好きですか、印象に残っている遊び場所はなどを聞くんです。それって多分、記憶を聞いているんだなと思いました。そうした記憶を刻む環境のリテラシーを地域の人に教えてもらい、そこから設計するのは、ぜひとも任せてほしい!という態度でいつもワークショップをやっています。

佐々木 僕も皆さんに近くて、本当いろんな意見をこう同時に聞いてしまうと、なんともつかないものになってしまうっていうのは非常に感じています。なので、どちらかという、コアメンバーで少し絞ってお話して議論したものを出していく、もしくは、やっぱりそこで、こういう方向がいいんじゃないかとか。ヒアリングはちょっと別として、具体的な場をつくる時は、こういう方向性のものがふさわしいんじゃないかっていうものを、僕らから提示するのは僕らの職能だと思いますので、でも決めきれないけど、こういう方向じゃないかなって、その対話のための少し方向性を持った議論をうまくしていくことは大事なのかなと思っています。

曾我部 ありがとうございます。時間も随分過ぎましたが、伊東さん最後に何か一言ありますか。大丈夫ですか。続きは懇親会ということに。それでは、今日は長時間にわたって、どうもありがとうございました。登壇者の皆様に、また拍手をお願いいたします。

閉会挨拶

小路永守 熊本県土木部建築住宅局長 皆様こんにちは。熊本県土木部建築住宅局長の小路永でございます。3部構成のシンポジウムに最後までご参加いただきありがとうございました。県内外、そして韓国や台湾からも参加いただいた皆様方に改めて感謝を申し上げます。また、基調講演をいただきました伊東コミッショナー、活動報告をいただきました4名の皆様方、それとディスカッションに加わっていただきましたアートポリスアドバイザーの皆様方、大変お疲れ様でございました。



■ 小路永守 熊本県土木部建築住宅局長

冒頭、知事から挨拶申し上げましたとおり、くまもとアートポリスがスタートして、今年で36年になりますが、歴代それぞれのコミッショナーによって社会背景に沿ったテーマが設定されておりまして、この変化する社会ニーズへの対応こそが事業が長く続いている理由というふうに考えております。このテーマ、現在は伊東コミッショナーによって「自然に開き、人と和す」とされておりまして、多くの方に認知されております「みんなの家」、そして熊本型の仮設住宅などもこの方向性に沿って進めております。そして、コミュニティを重視した一連の災害での対応を通して、「新しい公共性とは何か」、この問いかけが今後ますます私たちの社会で重要となってくるように思っております。本日、4名の方からいただきました活動報告には、「持続する志」としたアートポリス建築展2024の全体テーマに最もふさわしく、建築文化運動として常に進化を目指す私たちのこれからの活動にも大きなヒントを与えていただきました。本日参加された皆様方お1人おひとりの中にも「新たな公共性」の意識が芽生え、それぞれの地域で開花いただくことを祈念申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。



くまもとアートポリス建築展2024 交流会

日 時 2024年11月23日(土)17:45~19:45

会 場 ホテル熊本テルサ たい樹

次 第

主催者挨拶

くまもとアートポリス建築展2024実行委員会副会長 伊東豊雄

乾杯の挨拶

熊本県土木部建築住宅局建築課長 折田義浩

《歓談》

シンポジウム出演者紹介

金野千恵 (teco)

家成俊勝 (ドットアーキテツ)

佐々木翔 (インターメディア)

森田秀之 (マナビノタネ)

代表者挨拶

(韓国)

YOON DONGSIK (ユン・ドンシク)

LEE HYUNHO (イ・ヒョンホ)

(台湾)

Chun-Hsiung, Wang

C David Tseng

(日本)

小野田泰明 (東北大学大学院教授)

閉会 挨拶

日本建築学会九州支部熊本支所支所長 本間里見

(熊本県建築士会会長、熊本大学大学院教授)

参加者 152名(一般80名、学生72名)

うち 韓国 29名(一般17名、学生12名)

台湾 44名(一般6名、学生38名)

日本 79名(一般57名、学生22名)



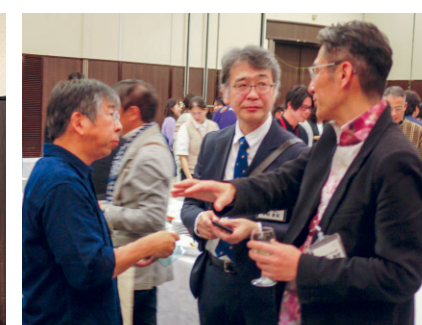
くまもとアートポリスコミッショナー
伊東豊雄



熊本県建築課長
折田義浩



日本建築学会九州支部熊本支所長
本間里見



©2010熊本県くまモン

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

展覧会

展覧会 巡回展 「くまもとアートポリス36年とこれから」

上通会場

2024年11月16日(土) / 上通アーケード、熊本市現代美術館 (アートラボマーケット)

メインシンポジウム会場

2024年11月23日(土) / ホテル熊本テルサ (テルサホールホワイエ)

観光施設会場

2024年12月4日(水)～15日(日) / 熊本地震震災ミュージアムKIOKU (交流ラウンジ)

2025年2月15日(土)～28日(金) / 南阿蘇鉄道高森駅・交流施設 (ラウンジ棟)

大学機関会場

2024年12月18日(水)～24日(火) / 崇城大学 (J号館)

2025年1月8日(水)～27日(月) / 熊本大学 (五高記念館)

2025年1月31日(金)～2月7日(金) / 熊本高等専門学校八代キャンパス (コワーキングホール)

2025年2月12日(水)～14日(金) / 熊本県立大学 (学生会館)

展覧会は、「くまもとアートポリス36年とこれから」として、これまでの36年を大きく4つの期に分け、それぞれの時期で特長的なプロジェクトのパネル展示や建築家へのインタビュー映像を、中心市街地や観光施設、大学機関など、県内各地を巡回する形で開催しました。

建造物を通して地域の活性化に資する熊本独自の豊かな生活空間の創造に取り組んでいる「くまもとアートポリス」について、アートポリスや建築に関わりの少ない方から建築関係者・建築系学生まで、県民に幅広く発信することができました。



1. パネルや模型の展示

「くまもとアートポリス」36年を大きく4つの期に分け、各期のアートポリスのテーマやコミッションナーの発言とともに、それぞれの時期のプロジェクトの特長を設定し、プロジェクトパネルや模型を展示を行いました。

また、最新のプロジェクトとして、災害からの創造的復興に資するプロジェクトである「南阿蘇鉄道高森駅・交流施設」や「芦北町地域優良賃貸住宅友田団地」、民間プロジェクトである「エバーフィールド木材加工場」や「高橋酒造田野蒸溜所・交流施設」の取組みを発信しました。

第1期 「公営住宅」



第2期 「木造建築」



第3期 「学校建築」



第4期 「災害対応」



2. 俳優・田中道子によるアートポリスプロジェクト建築家へのインタビュー映像

くまもとアートポリス36年の取組みを振り返るため、各期の特色に応じた建築家へ、当時のプロジェクトへの思いやこれからのくまもとアートポリスへの期待などについてインタビューをしました。
インタビューアーは、2022年度に一級建築士試験に合格された俳優の田中道子さんにお願しました。
収録したインタビューは会場で上映するとともに、公式YouTubeチャンネルに公開しました。

▶▶ 第1期プロジェクト「公営住宅」 山本理顕（県営保田窪第一団地設計）



©清島靖彦

磯崎さんから指名していただいて初めて公共建築をつくるチャンスを与えられたってことなので私にとっても非常に大きな転換期のような、初めて建築家として公共的な建築に携わることができるわけですから公共の側から建築家として認められた最初の経験だという風に言ってもいいと思いますね。
多くの建築家にとってそうやって初めて手がけた公共建築というのが非常に多いんですね。
ですから思い入れはアートポリスのようなプロジェクトを作って若い建築家たち意欲のある建築家たちがその建築を設計するチャンスがくまもとアートポリスで、すごくそれが多くの建築家たちにとっては多くのチャンスを与えられたので、是非そういうような仕組みを持続していったらいいと思います。
(インタビューより抜粋)

▶▶ 第2期プロジェクト「木造建築」 藤森照信（熊本県立農業大学校学生寮設計）



©宮井政次



若い人たちをちゃんと育てるっていうまあ行政の大事なことであるのでいいことだと思いました。
世界でもね公共体がああいうことやってるとこってあるかな。
ていうのはねアメリカの研究者がアートポリスに興味をもって細川さん（元県知事）にインタビューしたいって言ってそれで知ってたから紹介したことがあってその時にああやっぱり珍しいのかなと思った。
『これからこのくまもとアートポリスに期待することは。』
もうそれは継続することです。継続は力って言いますよね。プロジェクトをずっとやっていくっていうことは本当に大事だなと。
(インタビューより抜粋)

▶▶ 第3期プロジェクト「学校建築」 赤松佳珠子（宇土市立宇土小学校設計）



これだけ本当に続いているのは多分世界的に見ても珍しいんじゃないかなと思いますし、私も学生の頃からもうずっと知っていて、学生の時に建築を見に来るといふか見に行くっていうのがひとつの熊本になってるんですね。それは今日本全国の学生さんも熊本にとりあえず行こうと言って行きますし、そういった意味ではこれだけ素晴らしい建築があるまとまった範囲の中にあるっていうのは建築を志す人間としてはひとつの聖地みたいなものですね。
なので、それがどんどんこの後もちゃんと続いていくことでいろんな人たちもやってくるし、建築に対する意識とかも普通の一般の方々もアートポリスっていうのがあるんだって思ってくただけでも違うと思います。公共のプロジェクトになかなか参加できる機会って本当に少ないのでそういった意味ではそれこそ本当に若手の方とか含めてアートポリスが育んでいくみたいなのは本当にすごくあるんじゃないかなと思います。
(インタビューより抜粋)

▶▶ 第4期プロジェクト「災害対応」 乾久美子（人吉市のみんなの家設計/ 新八代駅前モニュメント「きらり」設計）



私は熊本にくまもとアートポリス推進賞（選考委員）のこととかもあって割と頻繁に行かさせていただいてるんですけども、行くたびに熊本っていうのは本当に風景が綺麗な県だと思ってうんですね。
そうしたその綺麗な風景の場所なんだから建築も素晴らしいものであってほしいなという気持ちがあってそれがくまもとアートポリスによってより下支えされていくという風になるといいなと思います。
(インタビューより抜粋)

各会場の開催状況

≫ 上通会場 (上通アーケード、熊本市現代美術館)

上通アーケードでは、各期のアートポリスの特長に限らず、44作品のプロジェクトパネルや、東日本大震災から令和2年7月豪雨における「みんなの家」に関するパネルも展示しました。非常に人通りが多く、たくさんの方に足を止めて見ていただくことができました。また、熊本市現代美術館のアートラボマーケットでは、アートポリスプロジェクト建築家へのインタビュー映像を放映しました。



≫ メインシンポジウム会場 (ホテル熊本テルサ)

メインシンポジウム会場のテルサホールホワイエで、パネルや模型を展示しました。シンポジウム開始前には、会場のスクリーンで、インタビュー映像を放映しました。韓国や台湾からの参加者も含め300名を超える方に、くまもとアートポリスの取り組みをご覧いただきました。



観光施設会場 (熊本地震震災ミュージアムKIOKU、南阿蘇鉄道高森駅・交流施設)

観光施設会場として、くまもとアートポリスプロジェクトである「熊本地震震災ミュージアムKIOKU」や「南阿蘇鉄道高森駅・交流施設」において、パネルの展示やインタビュー映像を放映しました。施設を訪れる国内外の観光客などに、くまもとアートポリスについて知っていただく機会となりました。



大学機関会場 (熊本大学、熊本県立大学、崇城大学、熊本高等専門学校)

熊本県内の建築系の学科がある「熊本大学」「熊本県立大学」「崇城大学」「熊本高等専門学校」に協力いただき、各大学機関でパネルや模型の展示やインタビュー映像を放映しました。建築を学ぶ学生を中心に、くまもとアートポリスのこれまでの取り組みについて学んでいただくことが出来ました。



2022-2024 完成プロジェクト



南阿蘇鉄道高森駅・交流施設

事業概要 事業主体／高森町
設計者／太田浩史
完成年月／2024年7月

©Takumi Ota



熊本地震震災ミュージアム 体験・展示施設 (KIOKU)

事業概要 事業主体／熊本県
設計者／大西麻貴+百田有希+産紘設計
完成年月／2023年6月

©Takumi Ota



人吉市宝来町のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／乾久美子
完成年月／2023年7月



人吉市大工町・二日町のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／乾久美子
完成年月／2023年6月



エバーフィールド木材加工場

事業概要 事業主体／株式会社エバーフィールド
設計者／小川次郎+小林靖+池田聖太
完成年月／2023年10月



芦北町地域優良賃貸住宅友田団地

事業概要 事業主体／芦北町
設計者／片山和俊+龍口元哉+太宏設計事務所
完成年月／2024年11月



人吉市下新町・上新町のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／乾久美子
完成年月／2023年6月



八代市中津道のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／柳澤潤
完成年月／2023年6月



高橋酒造田野蒸溜所・交流施設

事業概要 事業主体／高橋酒造株式会社
設計者／平瀬有人+平瀬祐子
完成年月／2024年12月



人吉市温泉町のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／乾久美子
完成年月／2023年3月



八代市藤本・大門のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／柳澤潤
完成年月／2023年9月



球磨村渡のみんなの家

事業概要 事業主体／一般財団法人熊本県建築住宅センター
協働事業者・資金助成／日本財団
設計者／渡瀬正記+永吉歩
完成年月／2024年2月

展覧会企画トークイベント

「小さな風景と建築」

2024年11月16日(土) 【第1部】13:30～14:30 【第2部】14:45～16:15

■会場 / 熊本市現代美術館 ホームギャラリー

マリーナ・アブラモヴィッチ《Library for Human Use》2002年 ©Marina Abramović

ジェームズ・タレル《MILK RUN SKY》2002年

第1部 トーク 「小さな風景と建築」

乾久美子 (乾久美子建築設計事務所)

第2部 トークセッション

乾久美子 (乾久美子建築設計事務所)

桂英昭 (くまもとアートポリスアドバイザー)

第1部 トーク「小さな風景と建築」/ 乾久美子

桂英昭(以下、桂) こんにちは。お忙しい中、くまもとアートポリス建築展のトークイベントにご参加いただきありがとうございます。熊本県建築住宅局長さん、各課長の方々、アートや設計事務所関係の方々などにご参加いただいておりますが、堅苦しい挨拶は省略させていただき、このまま進行させていただきます。本日は、くまもとアートポリスプロジェクトの建築家でもあり、くまもとアートポリス推進賞の選考委員をお願いしています乾久美子さんに御講演をしていただきます。その後に会場の皆様からご意見を伺う機会を設けます。また、私の方からアートポリスの宣伝も兼ねまして、セッション形式で乾さんと意見交換のような場をつくりたいと思います。くまもとアートポリスでは、使用させていただいてる現代美術館に何度もこのホームギャラリーを含めてお世話になってます。前回の建築展の時、奥に

あります井手宣通記念ギャラリーで建築展を開催させていただきました。この熊本市現代美術館ホームギャラリーには大変親しみをもっております。記憶が定かではないのですが、ジェームズ・タレルの照明と、マリーナ・アブラモヴィッチの本棚。子供たちが、中に入って寝転んだり、隠れたりしながら本を楽しむことができるような本棚です。スクリーンを上げていただくと、印象深い絵画が現れます。このような空間を支配する要素があるなしで、人々の活動はかなり変わると思います。それから、少し前にクラウドファンディングで、このテーブルとか、この場の設えが変わったのですが、昔は低いどっしりとしたソファで構成されており、もう少しアットホームな静的空間でした。現在は要望に応じて勉強や色々なワークショップができるようなアクティブな空間にシフトしたように感じています。現代美術



館と県立美術館の違いのひとつに午後8時までオープンしていることがあります。アフターファイブといいますか、勤務が終わった方々にも美術館をご利用いただけるように配慮した運営です。美術館コンサートなども開催されることもありますのでHPなどでチェックしてください。本日、初めて来場の方もおられると思いますが、今後も機会をみつけてご利用していただくことを願っております。熊本市現代美術館に感謝の意を込めて少しPRさせていただきました。

それでは、乾さんの登場です。簡潔に紹介させていただきます。乾久美子さんは東京芸術大学で建築学ばれまして、それからイエール大学の大学院で修士、それから建築家青木淳さんのアトリエに4年ほど在籍され、独立されました。その後は、東京芸術大学で教鞭を取られ、現在は横浜国立大学で建築を教えられています。私達が将来の活躍を最も期待している建築家のひとりであります。今日は多面的にお話いただいて、勉強させていただきたいと思います。それでは、乾さん、講演の方よろしく願いいたします。

乾久美子(以下、乾) 桂先生、ご紹介いただきましてどうもありがとうございます。建築家の乾です。横浜国立大学で、今教鞭を取っております。よろしくお願いします。

本日は、「小さな風景と建築」ということで、1時間ほどお話をさせていただきたいという風に思います。

私、くまもとアートポリスの作品が2つありまして、まず1つ目が、新八代駅前モニュメント「きらり」で、2004年にできたものになります。私が独立したの



■ 乾久美子

は2000年で、最初、ブランドのファサードや内装ばかりで、独立した建築や構造物を設計していない時代が結構長くて、そういうタイミングでこのモニュメントの話をいただきました。建築物じゃなくて、最初はモニュメントかと思ったんですけども、構造物をつくれるってのは非常に嬉しいなと思って取り組んだ記憶があります。モニュメントをお願いされたんですが、八代市の職員の方には、八代で有名な晩白柚のオブジェをつくってくださいよっていう風に最初お願いされたんです。せっかくだから、ちょっと一休みできるところつくりませんかって言って、建築的な空間にさせていただいたという経緯があります。

三角形の平面を持っており、見た目はこういう屋根を持った構造物です。ガラス繊維のコンクリートでつくっており、厚みが60ミリという非常に薄い構造物を、構造家の岡村さんと一緒に考えたものです。基本的には、ガラス繊維とコンクリートでかなり強度が出るので、構造計算的にはそれだけでなりたっているものになります。しかしながら、施工的なばらつきがあって、破損等の可能性があると思いましたので、メッシュ筋を入れて補強をしております。遠くから見ると家のような形をしているので、家のように見えるんだけど、近づいていくと穴だらけの建物が見えてくるというそういう建物で、中に入ると光が入ってきます。ただ、半分ぐらい壁なので、それなりにちょっと涼しいっていうようなところですよ。

新八代駅ができた時の風景をご存知の方もいらっしゃると思うんですが、当時は本当に田んぼの中に駅ができた状態でした。人もほとんどいないみたいなところに、新幹線駅降り立って、なんとも心許ない気持ちになるだろうなということもあって、人の居



■ 新八代駅前モニュメント「きらり」 ©河野太一

場所になるようなものをつくることにしたものです。もう1つ、最近、アートポリスの関連事業として、「人吉市のみんなの家」というものを担当させていただきました。これは、人吉市の水害の後に、公民館をつくらうということでやっているものです。全部で4棟つくっており、人吉市の中の4つの地区に対して、1棟ずつつくったものです。木造で、形としてはパツと見、普通な感じなんですけど、ちょっと変わった形をしてまして、コンクリートの基礎が、普通は30センチぐらいの立ち上がりですけども、ぐっと高くして、大体80センチぐらいの高さまで上げています。その上に屋根があることで、図面で見るとこんな形になっておりまして、仕組みとしては本当、木造在来の形をしているんですが、その基礎をちょっとだけ立ち上げることで、人吉市の水害への対応を考えました。今、河川の改修等でこれから水害はなくなっていくことになると思うんですけども、私がこの設計に入ったタイミングでは、河川のこれからの方向性が定まってないってこともありまして、今後100パーセント水害が起こらないってということもないんじゃないかなっていう風に思って、お椀のようにこのコンクリートの立ち上がりが働くってようなことができればなと思いました。

なぜこんなこと考えたかという、普通、水害の多い地域だと床のレベルを高く上げると思います。ただ、お年寄りの方の多いエリアで、利用される方が足腰が弱まった方が多いというようなことでしたので、単純に床を上げてしまうと、スロープが長くなったり、大変不便だろうと思ったので、できるだけ床のレベルは地面に近づけながら、水を避けるっていうようなことを考えて、このお椀型の建築を考えました。当然、入口のところは穴が空くので、ここに防



■ 人吉市のみんなの家

水のパネルがはめられる仕組みになっています。人吉は妖怪漫画の「夏目友人帳」の舞台ですけども、その舞台にふさわしいというか、あちらこちらに祠とか神社とかが点在していて、それがすごい魅力的な場所だと思っていました。そうしたところに建てるにあたって、古い信仰の対象みたいなものがたくさんあるところにふさわしい形はなにかなと考えた時に、こういう深い屋根、深い影を落とすような屋根があるといいんじゃないかっと思い、どっしりとした存在感のある屋根を持つ建物っていうことでつくっております。全体の特徴としては、お椀型の立ち上がりで、深い影を落とす屋根っていうものということになります。

4つの地区が、それぞれに敷地形状も違いますし、若干面積も違うってということもあるので、それぞれの敷地に合わせて、今の仕組みをアジャストしながらつくっているという建物です。内部では屋根裏の懐みたいなものをつくって、いろんなものが置けたりとか、神棚みたいに使っていただいたりとか、実際にエアコンを置くみたいな、そうしたちょっとした工夫みたいなものをしている建物になります。

次に、どういう風な興味を持って建築をやってるかをお話させていただきたいと思います。生活者によって生み出され、メンテナンスされている風景というか、そうしたものを「小さな風景」っていう風に呼んでおりまして、そこにいられる工夫とか知恵みたいなものを調べて、それを建築のデザインに生かすことができないのかということを、平日頃考えながら活動しております。今映し出されているのは、前勤めていた大学で学生とともに、その研究をまとめた本（「小さな風景からの学び」TOTOTO出版）になりま



■ 人吉市のみんなの家



す。中を開くとたくさんの写真が掲載されています。その1個1個の写真が、その地域に暮らす人々がその場所で工夫して自分たちの居場所をつくったり、その場所を便利に使うようなことを行っている現場の写真になっています。学生とこのリサーチを始めるかなり前からこういうものに興味があって、個人的にずっと撮り続けてたんですけども、学生とともに、日本全国にあって、大量にこうした写真を撮りためていくうちに、これらのものは一体何なのかってことを考えて、一種のこれは「コモンズ」であろうと思うようになりました。

「コモンズ」というものは、よく言われるように、「パブリック」と「プライベート」の間にあるものだと言えると思います。伝統的に「コモンズ」っていうものは、例えば漁場であったり、あるいは井戸とか里山のように、誰のものでもない、しかしながらみんなが使っているというようなものだと思います。この「コモンズ」ですけども、日本は近代化をする中で、こうした公私が曖昧なものっていうものをどちらかにより分けることを、法整備をしていく中で行いました。なので、「コモンズ」はなくなっていく方に日本は進んだんですけども、それでも現代において「コモンズ」はまだまだ残っていると思っています。例えば、湧水も、当然「コモンズ」で、これは沖縄の例ですが、簡易水道であったり、農業用水として使われているということで、現役の「コモンズ」だと思います。「コモンズ」に関しては、「コモンズの悲劇」という言葉があって、聞いたことある方がとても多いと思います。これはギャレット・ハーディンっていう方が唱えた説でして、1つの「コモンズ」があると、多くの人々がそれを我先にとひたすら使ってしまうので、「コモンズ」が荒廃して枯渇することを指摘した言葉になり

ます。この「コモンズの悲劇」という言葉は、1968年あたりに唱えられて、世界的にこの概念が受け止められまして、多くの議論を巻き込むということが起こりました。このハーディンですけども、「コモンズの悲劇」を唱えるとともに、どうすればいいのかについても唱えておりまして、ハーディンの説によると、市場による管理か、国家による管理っていう、どちらかしかないっていう風に彼は唱え、ハーディンモデルと言われております。このハーディンモデルは、発展途上国で結構いろんな問題を引き起こして、そのことに対していろんな学者が疑問を感じて、そうじゃないモデルっていうのもあるんじゃないかっていうことを、様々に研究するっていうタイミングがございました。その成果として、オストロムという女性の研究者がSOCC理論(self-organized collective choice理論)っていうのを打ち立てまして、そうじゃないガバナンスの方法があるんじゃないかっていうことを唱えました。それは一体何かっていうと、ハーディンが国家か市場かと唱えたところ、オストロムは、地域コミュニティのガバナンスが1番いいんだってことを経済学の立場から、ゲーム理論を使って証明するっていうことをしました。これが、現在の「コモンズ」理論において主流の考え方になっておりまして、「コモンズ」ってのは、ハーディンモデルではなくて、地域の人、使う人が管理するべきだっていうことが言われるようになってきているということになります。ちなみに、このオストロムの理論っていうのは、日本の里山とか、伝統的な「コモンズ」の観察からも、その理論が展開してます。そんな「コモンズ」なんですけど、そうした目線で、私の小さな風景っていうものをさらに深く考え、面白いなっていう風に捉えるようになっていきます。

さらに面白いなって最近思っているのは漁港です。これは海水浴客が漁港に集まって水浴びをしてる写真です。漁場ってのは「コモンズ」です。漁業権という法整備の中で「コモンズ」を法的に認めるものなんですけれども、その漁業権を行使する漁場という「コモンズ」、漁業組合が管理している「コモンズ」を、なぜか全然関係ない人が入って、それ使ってるって面白い事例です。

これは一体何なのかなっていうのに興味がありまして、今思ってるのが、「コモニング」っていう言葉で、それを捉えるといいんじゃないかなって思ってます。この「コモニング」っていうのは、社会学者の人が言い始めた言葉でして、ある場所をものとして「コモンズ」と考えて、行為とともにその「コモンズ」が発生するっていうことを言ってます。ウォール街のオキュパイ運動があったと思うんですけど、ああいうデモとかはそうですね。ああしたものが都市を「コモニング」している事例だっていうことをこの社会学者は言っています。一般的に、デモとか割と政治的な話とともに、「コモニング」ってのは社会学者の人たちは議論するんですけども、意外と日本だと平和的にその「コモニング」ってのは行われてるかなって思っております。

例えば、これは高知の日曜市ですけども、普段は自動車で占有されている道路を、一時的に人間が「コモニング」している事例かなと思っています。あるいは、その花見は、普段そんなに人はいないんですけど、人がいっぱい押し寄せてきて、花のある場所を全員で「コモニング」しているという面白い事例かなって思っています。このように「コモンズ」を名詞で捉えると、ものとして捉えてしまうんですけども、そうではなくて、動詞として捉えると、様々な

ものが「コモンズ」として捉えられるようになるっていうのは、非常に面白いと思って、建築でもそんなことが考えられたらいいのかなっていう風に思っています。また、「コモニング」っていう概念なんですけれども、ある場所を「コモニング」するっていう中で、単にその場所がみんなのものになるっていいことなんですけれども、「コモニング」をみんなですていく中で、人々の間に、いわゆる社会的な関係、人と人との関係が副次的に生まれるっていうことも、非常に良い効果があるんじゃないかと言われていて、それもいいなと思ってます。これも「コモニング」の事例で、堤防なんですけれども、おばあちゃんたちが勝手に「コモニング」して、それはもはや一時的ではなくて、それが常態化して「コモンズ」になっているっていう、「コモニング」が「コモンズ」になるっていう事例です。また、商店街も、そもそも商店街のアーケードっていうものが、道を「コモニング」して「コモンズ」になった事例ですけど、そこをまたおしゃべり好きのおばあちゃんたちが「コモニング」するってような事例になっていて、なかなか面白いなと思っております。というように、公と私の間にある「コモンズ」なんですけれども、意外とその様々な次元で「コモニング」が起こっているということに着目しながら建築を考えていくといいんじゃないかと思って活動をしています。

実際の作品を3つほど紹介します。1つは、「延岡駅周辺整備プロジェクト」です。「コモンズ」は公と私の間にあるって申し上げましたけれども、公共が頑張って「コモンズ」をつくらうとした事例になります。全体像は結構複雑でして駅前再編です。ロータリーの形を変えることで、建物を建てる敷地を頑

張ってつくって、ロータリーとJRの駅舎の間に、細長い隙間をつくって、そこに市民の居場所をつくろうというプロジェクトでした。それが「エンクロス」っていう建物になります。それ以外にも様々なものを設計したり、デザイン監修をして、様々な事業の組み合わせをしながら整理していったものになります。1番中心の「エンクロス」は、こういう建物になっております。全体として2階建ての建物になってます。元々、このJRの駅舎があって、市民アンケートだと、非常に好ましいというか、特に不満がないみたいな、そういう駅舎がありました。そうしたこともあって、このJR駅舎の増築に見えるような建築にするのがふさわしいのかなと考えて、2階建てのJRの駅舎とほぼ同じ高さ設定をして、かつ、柱と柱のスパンもほとんど同じにして、JRの駅舎と一体的に使えるということ考えた建物になります。ロータリーに接するようになってますので、バスの乗り場やタクシーの乗り場が、そのまま直接的にバスの乗り場だったり、タクシーの乗り場になっているという関係性になります。

公共施設でありながら、みんなの居場所を「コモンズ」にするために様々なプロセス的な工夫がここには存在しています。まず、たくさんの市民ワークショップを、コミュニティデザイナーの山崎亮さんで行いました。そこで、駅の前にこんな建物ができるんですけども、何がしたいですかってことを、かなり丁寧に聞き取ることをしております。また、延岡市にいらっしゃる設計士の方々と一緒に、似たような事例を全国回って見て、どういうプログラムがあれば、この市民ワークショップで出た意見っていうものを受け止められるのだろうかということ調査するっていうことをしました。また、延岡市内の駅近く

の商店街の空き店舗をうちの事務所の実施設計をする場所にしつつ、市民の方がここで集まって様々な意見交換を行う場所にすることもしたりしています。そういう中で、一体ここで何が必要なのか、つまり、「コモンズ」としてこの建物が役立つというのはどういう状態なのかっていうことをきちんと考えるという時間を取りました。結果としてこうした建物になっています。こうした事例は最近「滞在型図書館」と言われるようになり、一般的な建築のプログラムになりつつありますけれども、割と早い時期のものだと思っていただければと思います。建物としては、JRの駅舎と同じ高さ、同じグリッドで設計しています。そこに時々、吹き抜けがあったり、トップライトがあるということを組み合わせていろいろんなタイプの居場所をつくっていくことをしました。例えば、ここは割と明るいところで、クラフトのワークショップができる場所にしたり、吹き抜けの下では、食べ物系のワークショップスペースがあります。ここでコーヒーを入れましょとか、チキン南蛮つくってみましょってようなワークショップをするような場所をつくったりしています。あるいは、この市民の方々がレクチャーをするような場所をつくったりしています。また、読み聞かせの場所をつくったり、そのご両親が仕事をできるようにカウンターをつくったりしています。また、子供たちが単にゲームをしに行きたいだろうということで、そんなスペースがあったりするような状況です。全体として、基本はなんでも受け止めるっていう場所になってます。そうでもない「コモンズ」としては使われないとみんなで結論を付けて、自由な使い方ができる場所を延岡市の予算でつくるということをしたものです。

延岡市の人口が大体11万ぐらいなんですけど、その



■ コモンズの事例(漁場) ©乾久美子建築設計事務所



■ コモニングの事例(日曜市) ©乾久美子建築設計事務所



■ 延岡駅周辺整備プロジェクト ©河野太一



■ エンクロス ©河野太一

ぐらしい規模の地方都市ですと、1つ1つの建築のプロジェクトは下手をすると命取りになるし、うまくいくと、それがまちをもう一度、みんなが住んでよかったなって思える場所にできるようなきっかけになるものだと思います。地方都市では1つ1つのこうした公共のプロジェクトは本当に大切だと思っています。例えば、熊本市内みたいに商業集積があると、商業者が市民の居場所になるものをいくらでもつくってくれると思うんですけども、11万ぐらいの都市になると商業の力がほとんどない状況だと思います。なので、公共がそれをやらざるを得ないという状況が生まれておりまして、延岡市もそこを頑張って、大都会であれば商業が提供してくれるであろう場所っていうものを公共が提供することで、まちというものが、もう少し行きたいなって思える場所にしていってことをやったプロジェクトになります。そういう意味で、公共が「コモンズ」の方にアプローチしていくっていう、そういう意味で面白いプロジェクトでした。

次が、地形を「コモニング」するっていうものになります。これは、岩手県の「釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館」のプロジェクトになります。東日本大震災で津波の被害を受けた集落になります。この辺りまで津波が遡上して、ここから下は流されてしまいました。実は言うところ、ここまで水は来たんですけど、そこまでの勢いがなかったので、この辺りのエリアが残ってるという状況です。学校は、元々ここここに建ってまして、地震の揺れで結構ダメになってしまったという状況でした。こうした学校の再建が一番難しいのは、仮設校舎で学校運営をしながら、残った敷地に再建しなきゃいけない

ということなんです。少なくとも東日本大震災で学校再建したところ、ほとんどそういう条件でどこもやってるんですが、ここもその条件でした。敷地があるんだけど裏山しかないってような中で再建をいたしました。この裏山がすごい急斜面でして、高低差が大体33メートルで、これはなかなか厳しいと思いました。当然、建設コストは跳ね上がりますし、斜面地に建物建てるのは、地盤をどう設定するのかとか、切土と盛土の差が、後々地盤のずれを生んだり、嫌なことが起こりそうだなみたいなことが考えられる敷地だったんですけども、そこしか場所がないのでやらざるを得ないという厳しいプロジェクトでした。やったこととしては、この山を切り開いて、とにかく建物を建てるということをやったんですけども、4メートルごとに宅盤を設定しております。いわゆる都市計画の開発行為の条件から4メートルという設定でやると、1番このグラウンドが残せる計算になるということからきております。この造成なんですけれども、擁壁で斜面を処理しなくてはいけないのですが、近代に出てきた擁壁は精度が高すぎて、人間味がないってことがあります。子供たちの居場所をつくる。それが4メートルの段差である。それが、この近代的な土木技術でつくると、ものすごい精度が高くて、機械的で怖いみたいになるので、なんとかそれを和らげる方法ってないものかなっていうことに対して、苦戦して様々な検討をしました。その結果としてやったのは、擁壁は一方にできるだけ限るということをして、だから、こっち方向だけは擁壁なんですけども、そうじゃないところはできる限り自然地形に馴染ませるっていうことをすると、ちょっとマシになるかなっていうことで判断をしました。

これがいいなっていう風に思ったのが、東日本大震災で津波が起きて、またそれが起きた時に、この小学校が建ったことによって人が避難できなくなってしまったってことがあってはいけないので、やっぱりその避難ルートをきちっと校内につくっていかなきゃいけないっていうことに対しても、一方向だけに擁壁をかけることで、避難ルートが割とつくりやすいうってこともいいなって思いました。

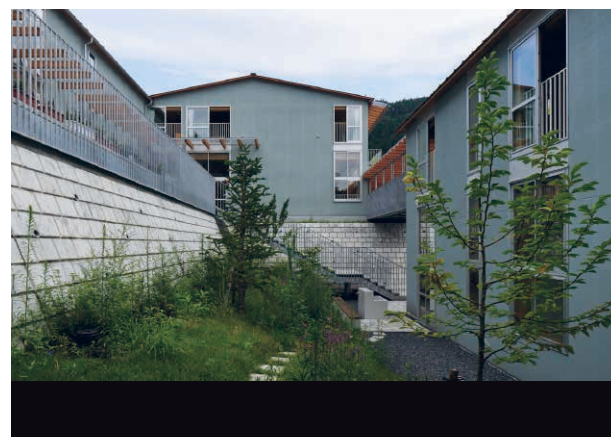
実際にできたのはこういう状況で、こっち側は擁壁があるんですけど、こっち方向は自然地形ですり付けていくってことをやっています。これも反対から見たところなんですけど、擁壁で、こちら辺も擁壁あるんですけど、こっちはずっと繋げるから、そんなに嫌じゃないってような状況をつくっています。また、ここに避難ルートをつくっているという状況です。発災後3年目ぐらい、1番の建設の状況がもう混乱している状況でして、資材も高騰してますし、人も集まらないっていう中でやんなきゃいけなかったのも、かなり単純な建物じゃないとお金が合わないという事情がありました。とても単純な切妻の建物を単に並べるというような判断をしています。その配列がこのような市松状なんですけど、ちょっと崩していくってような形です。基本、単純な建物なんですけど、1つだけ工夫したのは、建築の階高、2階の階高を擁壁の高さの4メートルにぴったり合わせるってことをしています。そうすると、ブリッジで繋ぐと、例えば、この棟の床レベルと、この向かいにある棟の1階の床のレベルが完全に一致するので、バリアフリー的にも、便利なルートがいくらでもつくれるということになるかなと思いました。そうすることで、棟と棟とはとにかく単純である。あとは、耐火要件をクリアしたかったんで、分棟にしたんですけども、

ども、分棟で、非常に単純な建物でありながら、このブリッジで繋ぐことで一体的に内外を巻き込みながら、移動して使えるものになるんじゃないかなと思いました。これは、3階と呼ばれるエリアが、様々な棟を繋いでいるフロアなんですけれども、その動線を書いています。また、先ほど避難ルートをつくりましたよって申し上げましたけれども、その避難ルートってというのは、基本、建物の両端にルートがあるんですけども、なるべくその両端に地域開放ができる機能っていうものを配列して、学校開放っていうのがしやすい状況をつくりました。できた写真っていうか、先ほど申し上げた向かい合う棟の1階と2階がブリッジで繋がっているというのがよくわかる写真です。擁壁があって、時々この階段でどーっと上がっていったりはするんですけども、できた様子を見ると、子供たちはめちゃめちゃ楽しそうにこのブリッジと階段を走り回りながら使っているという状況です。先生によっては、渡り廊下が寒いとかの不満がある方もいらっしゃるんですけども、基本は、割と喜んで使っていただいているかなって思っています。基本、単純な要素の集まりでつくっておるんですけども、斜面全体が、学校としてだけではなくて、地域の方にとっても、その「コモンズ」として生きていくってことはできないのかなっていう風に考えたことです。1階の階高が4メートルあるので、木造にしては、かなり開放的な天井高のものになってると思います。対して、2階は、割と天井だと下げてまして、割と低い落ち着いた場所にするっていうことと、コストもあつたのでかなり下げているってことをしています。これ全体像でして、斜面もともとは本当にうっそうとした裏山だったんですけども、そこに建物を置く、各避難ルートをつくる、



毎日のようにワークショップや
レクチャーが開かれている

■ワークショップ(エンクロス) ©河野太一



■釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・
釜石市唐丹児童館 ©Daici Ano



■ブリッジ ©Daici Ano



■建物内観(1階) ©河野太一

また、その建物の間を庭にしていってということをなんとか頑張ってます。それが全体としてこの地域にとっての「コモンズ」、みんなが使えるものになっていけばいいんじゃないかっていう風な思いを込めて設計しました。

最後に、最近、大学の設計が進行したものになります。「京都市立芸術大学・京都市立美術工芸高等学校」です。中学とか高校のは、まだそこに通う学生さん、生徒さんとか子供の方とか親御さんとか先生だけの閉じたコミュニティのものになることが多いと思うんですけど、大学って日常的に外部の方が来たりとか、また外との連携とかが求められてるものですから、そもそも大学ってのは「コモンズ」だろうなと思っております。その「コモンズ」としての大学っていうのは、どうやって体现するのかなっていうことを、私個人としては考えながら設計したものになります。京都市立芸術大学という非常に歴史の深い芸術大学の校舎です。元々は郊外に80年代の時に移転してたんですけど、それがまた都心に戻ってくるというプロジェクトです。京都駅の近くの1等地に、3つの地区の中に横たわるようにキャンパスを設計しました。このエリアは、京都の駅のすぐ隣の、大変交通の便のいいところなんですけれども、そこに建てられた公営住宅が非常に高齢化をして、新しい住み手もほとんどいないっていう状況が90年くらいから始まった地域です。そこで、教育施設として、ここに大学を持ってくることで、もう一度このエリアを活性化できないのかっていうことを考えられました。また、芸術の大学ですので、そうした難しい歴史を持つ場所であったことで、逆に何か地域とうまく連携できるんじゃないかという期待も込めて、

この移転が決まったという背景があります。設計は、うちの事務所だけではなくて、5つの会社の連携で設計をしています。私どもと、熊本地震震災ミュージアムKIOKUを設計された「o+h」、 「フジワラ テッペイアーキテツラボ」、東京の「RING ARCHITECTS」というアートポリスのコミッショナーである伊東豊雄さんのところを出身された2人がつくった会社、そして、京都の地元の「吉村建築事務所」の5つの会社で設計企業体をつくって設計をいたしました。京都につくるということは、どうしてもこの碁盤の目の非常に明快なそれが残っている都市ですので、これを意識せざるを得ないと思いました。また、京都の碁盤の目っていうのは、時代を経るうちに、結構色々な改変がされていて、ちっちゃい道に分かれたりとか、いろんなアジャストというか、そうしたものが行われているのは面白いなと思って、そうしたものも取り入れられればなと思いました。京都につくるということで、その京都の街並みに何か連続するようなものにしたいことと、設計のテーマとして、「まちのように育まれる、水平につながっていくキャンパス」というテーマをこの5社で話し合っ

て決めてたんですけど、大学というものが、もう1つの建物としてあるわけではなくて、まちとともに存在してるものだし、まちが成長するのと同じように大学っていうのも成長していくだろう。そうしたものに対して建築的な回答を与えたいっていうことをみんなで議論しました。その時に、京都のまちの構造を使うべきなんではないかということを議論しました。

まず、碁盤の目にあるように、キャンパスの中に通りをつくるってことを考えました。さらに、その通りに対して、元々の京都のまちが、町屋の連続でその軒

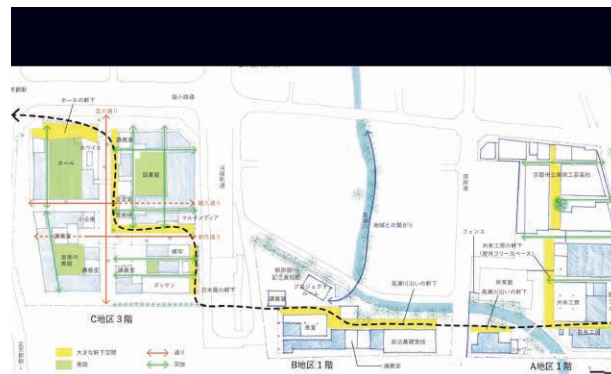
下が連続していくのと同じように、我々の設計も、軒下空間みたいなものを連続させた方がいいんじゃないかということを議論しました。あともう1つ、京都の町屋の連続の裏に、「奥庭」って言われる、みんなが大体同じような場所に庭を持つので、それが連続して1つの緑の関わりになってるということが、ブロックの中で起こってますので、そうした「奥庭」みたいなものを今回のキャンパスでもつくるべきんじゃないかっていうことを議論しました。これが全体の配置でして、道で開かれた3つの敷地なんですけれども、先ほどの大きな軒下っていうのは、ずっと連続してメイン動線になるっていうことをしています。また、1番巨大なC地区っていう、大体100メートル×100メートルの地区に、大きな公園を通して4つの建物に分割した、その建物の1つ1つの中に「奥庭」と呼ばれる場所をつくっていくっていうことをしています。これがC地区という1番大きな地区の正面から見た写真になります。これが大きな軒下と呼ばれるもので、地区を超えて人を導いていくようなものになっています。また、キャンパスは、塀のないキャンパスにしております、自由に誰でも入ってこれるというような場所づくりをしました。先ほどの通りから、ぐっと曲がって、隣の地区に導いていく。その両脇にこの軒下空間っていうものが連続していくというような構成になっております。構造が特徴的でして、佐々木睦朗先生にお願いをして、「マトリクスフロア」という言葉、佐々木先生はその言葉で呼んではないんですけど、この2枚の人工土地を設定すべきだっていうことを、佐々木先生からアイデアをいただきました。全てのフロアを同一でつくるんじゃなくて、佐々木先生は、人工土地としての強い床をきちんと設定すべきだっていう

ことをおっしゃられました。それは非常に、我々としては、まちのようにつくりたいっていうことを議論して、この設計を進めていたので、土地を設定するのは、非常にいいなっていう風に思いました。これが、佐々木先生は「メジャーストラクチャー」と呼んでるんですけども、我々は「マトリクスフロア」と呼んでいる強い床になります。地上階、3階、6階っていうとこに、3つの床があって、その間に建物のようなものがこう挟み込まれてる、そういう構成になっている。また、この6階の人工台地の上には軽やかな鉄骨の建物を乗せてくってというような形で、全体が立体都市になるような建築になっています。あと特徴的なのは屋根でして、京都は景観的政策を重視している市なんですけれども、これも景観審議会で色々協議する対象でした。その中で、やはりきちんとした屋根を持って建築するべきであるということを、委員の先生方からアドバイスを受けまして、寺院とか寺社仏閣にあるような、柔らかいカーブを持つ屋根っていうものを組み合わせながら、この巨大な平面を覆っていくっていうことを考えました。その時に、「折れ・反り・むくり」というこの3つのボキャブラリーを自在に組み合わせながら屋根をかけていったということです。できたものとしては、こうした本当に緩やかなカーブなんですけど、反ったり、折ったり、むくったりっていうものが組み合わせあった形になっています。その先ほどの「奥庭」なんですけれども、場所によっては外部の空間っていうこともあります。ただ、多くはこの三層吹き抜けだったりするような巨大な空間をつくる仕組みとして、「奥庭」というのを位置付けましたので、図書館とか、この学校が学生さんも先生も、あと地域の方も、みんなで使える場所っていうのを、特に「奥



京都市立芸術大学・京都市立美術工芸高校 (2023)

京都市立芸術大学・京都市立美術工芸高校 ©ToLoLo studio

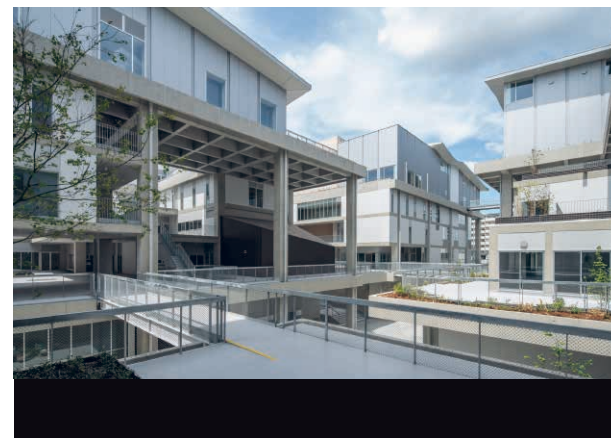


まちのようにつくる…京都の都市構造を現代的に翻訳
通りと大きな軒下

全体の配置



C地区 ©ToLoLo studio



マトリクスフロア ©ToLoLo studio

庭」に位置付けるということをして、あるものは図書館になったり、講堂になったりするというような、そういう建物になっております。

全体としては、まちのようにつくるということで考えていまして、まちっていうのも1度できたら終わりじゃなくて、ひたすらそのどこかが壊れてどこかが再建されるってことの繰り返しで、特に日本のまちっていうのは、そうやって運営されてると思うんですけども、それと同じように、この建物も、どこかが壊されて、どこかが増築されていくっていうことを含みながら使い続けられていくっていうことを考えながら設計をしておりました。我々の設計はこのように外壁がいろいろな形をしてるんですけども、それをもうこの増築が始まっているかのようにつくことで、今後の変更っていうものが許されているっていう雰囲気をつくれればなっていう風に考えてこのような判断をしているっていうものになります。

総じて、大学が「コモンズ」、要するに誰のものでもあり、誰のものでもないっていうか、そうした感じっていうものを設計からも感じさせたいと思いましたし、そのように使われていく場所っていうものが実現できればいいかなと思っておるものです。

実際には、芸術大学ってのは、結構いろんな先生がいらっしゃって、いくらでも自由に使えばいいじゃないかって言っていたく現代アート系の先生方もいっぱいいると同時に、研究者として非常に厳しい

世界で研究に専念されてる先生方もいらっしゃる、なかなか全員同じ方向を向くっていうわけではないです。例えば、この図書館とかも、この学校のある会議で「ラーニングコモンズ」にしようよと、そういう方向で我々に行くんだなと思って、割と自由に使える場所として、この廊下と一体にしたりとか、「ラーニングコモンズ」として使える場所として大きなテーブルを置けばいいじゃないかみたいに設計をしたものがあるんですけども、蓋を開けてみると、やっぱり静かな図書館にすべきだみたいなことをおっしゃられる先生の声が結構強く、この活動が抑え込まれているみたいなことも起きているので、100パーセントうまくいっているっていう状況ではありません。それをまた心配する先生もいらっしゃる、使い方ワークショップしましょうって我々、設計者と呼んでくださったりとか、この模型をまたもう1回つくって、学生さんとともにここで何ができるんだろうってことを考えるみたいなことを継続しています。それも割と面白いなと思っていて、設計が終わって、もう建設も終わってるんだけど、この場所づくりっていうのは永遠に終わらないので、それにまだ関わり続けていて、面白い状況です。それは、「コモニング」っていうのは、やっぱり行為なので、私にとっては、「コモニング」のお手伝いをしているということで、興味深く対応しているという状況です。ご清聴ありがとうございました。

第2部 トークセッション



桂 第2部は90分間のトークセッションです。トークを展開していく中で、第1部の講演内容を含む乾建築の魅力に関する話題を組み込みながら進行していきたいと思います。アドバイザーをしている関係で、36年目を迎えましたくまもとアートポリスの宣伝をさせていただきます。会場隣のキッズスペースから子供さんの泣き叫ぶ声、バタバタという足音などに、ほっこりとしながら、乾さんの「コモンズ」という言葉を思い浮かべております。では、最初に乾さんの講演に関して御質問がある方、挙手いただけますでしょうか。

吉海 普段、被災地・益城町のまちづくりをしている吉海と申します。桂先生の教え子に当たります。よろしくお願いします。お話、大変興味深く聞いてました。「コモンズ」の話から、建築の設計、かなり技術に置き換わってる部分がすごく多くなって聞いてました。色々質問したいんですけど、2つ目の釜石市の中学校の話で、最初の小さな風景より技術に置き換わってる話が、特に多かったなと思って聞いてました。そこで、特に中学校の話で、最初の「公・共・私」の中で、「コモンズ」の中で、「コモニング」されるっていう話が特に興味深く聞いていました。その中学校において、「コモンズ」が、「コモニング」になるっていうことが、乾さんの中でどういうことなのかということと、あと地域の中に「コモンズ」が入ってくるっていうのが、可能なのかっていう2つをお伺いしたいと思います。

乾 ありがとうございます。釜石の場合、裏山という、基本的に誰も使っていないようなものを「コモンズ」として物理的な環境に設えていったことは、設計でやったことだと思います。それに対して、それがちゃんと「コモニング」されてるのかっていうことを質問されたということだと思います。まず、子供たちは「コモニング」してるというか、そこをちゃんと遊び場にしたり、裏山も含めて使っているかなって思ってます。地域の方にも、もうちょっと入っていただいて「コモニング」していただきたいなという風に思っているんですけど、現実には学校の先生が、そこまで地域の方が入ってこられると困るなという思いで阻止するところがあります。さきほど申し上げた「コモンズの悲劇以上の悲劇」というのは、よく日本の公共空間にあり、それに若干近い状況かもしれません。ただ、体育館など開放するところは区切って開放し、「コモニング」されています。2個目がちょっと、聞きそびれたのですが。

吉海 地域の中で「コモンズ」されてる振る舞いみたいなのは、きっとたくさんあるのかなと思ってたんですけど、その中学校の中で、校舎の端には地域に開くような部分が残されてるっていうお話だったかと思いましたが、その地域の振る舞いとか行為とか、サロンで行われてることが、入り込む余地っていうのが、どれだけ今可能性としてあるのかなっていう1つ目の質問にかなり近いところだったんですけど。

乾 その釜石でも設計の時に、地域の方とワーク

ショップをして、「地域のお祭りとか、なんかやってるんですか」って聞いたんですね。もちろん、獅子舞みたいなお祭りがあったりするんですけども、それ以外にもお茶会があったりとかしていることをお聞きして、学校でそういうことやっていただけたらいいかなっていう思いができました。すべての棟は設置しているので、その端っから特別教室に入れるプランニングにしたのですが、実際にはなかなかちょっとそれ学校の先生が許してくれなくて使ってないという。

桂 他に質問ありますでしょうか。ないようですが、時間に余裕があれば、最後に会場からの質問を受けたいと思います。本日は、全く乾さんとの事前打ち合わせなしにスライドを準備してきました。枚数が多いので早速進めて行きます。では、先ほど紹介いただいたのですが、もう一度「きらり」からスタートします。時々見に行きますと、内外にフラワーポットが設置されております。文句を言うと怒られそうですが、個人的には何も無い状態にしておいて欲しいという願望があります。建築がお好きな方であれば、ジャン・ヌーヴェルの「アラブ世界研究所」の外壁のメカニックに動くシャッターがつくりだす魅力的な影の動きを連想されるかもしれません。「きらり」は太陽の動きで本当に綺麗な影の動きを楽しむことができます。善意で置かれたフラワーポットが、いかどうかという話をしようと思ってこれを紹介したのではありません。実は次のスライドなのです。アートポリスでインスタグラム・フォトコンテストを行いました。この「きらり」の写真が選ばれた優賞作品のひとつです。これは私が推薦致しました。乾さんがお若いときの設計で、その時に「きらり」と背景



の山並みが重なる風景のお話をしていたのを思い出したからなのです。要するにどうということかっていうと、今日の「コモンズ」の話とかと同じなんですけど、建築家は設計主旨や理念などを述べます。しかし、一般の方々が、それを知らずに感じるのですが、それと同じかどうか。ここが話の難しいところ。このように感じて欲しいであるとか、このように利用して欲しいであることなど、色々あるのですが、実際はわからないというようなジレンマを抱くことが多々あります。インスタグラム・フォトコンテストを開催したときに、建築家の意図にそった写真を応募してくれたことがわかった、とても嬉しいのです。フラワーポットの話も落ちる影の美しさや移ろいなどの設計意図を汲み取っていただけたらということで紹介させていただきました。無理だとわかっているから、反対に上手く受け取っていただいた場合はとても嬉しく思うのかもしれませんが。感性的なものを共有できることというのは、大変難しいことですね。先ほどの講演スライドで紹介されなかった商業ビル「ディオール」のスライドです。乾さんが独立されて公共的な設計を手掛ける以前の建築です。ものすごく繊細で綺麗なデザインです。師匠の青木淳さんもそうなんですけど、このような純粋に美しい建築を創る方が、今日のテーマである「コモンズ」の話題をどのように展開するか。そこのところを興味深く拝聴させていただきました。どのような思考の変遷を経て、私達に刺激を与え続けてくれているのかが興味の対象であります。次のスライドは乾さんの建築の中で私が1番好きな「ハウスO」です。この建築知っておられる方いますか。個人的にはとても関心がある建築です。乾さんを語る時に、今日の講演内容から、どうしても社会派的な建築家で、延岡駅も釜石の小学校のようなデザイン性、鋭さ、スマートさなどを排除するような建築家のイメージをもってしまいます。しかし、「ハウスO」を題材に少し攻めて言いますと、乾さんは非常にシャープな建築を創る才能に恵まれた建築家なのです。スライドで平面や外観写真、模型写真をご覧ください。形態が造形的であるだけでなく、プランニングがかなり刺激的なのです。少し乾さんに説明してもらった方がいいかな。

乾 「ハウスO」は影の形を建物にするという風になってます。建築基準法の斜線制限ですが、斜線制

限の形で建物の形がズバってなっているビルとかがあると思います。あの法律をそのまま住宅設計に活かすっていうことをやったものでして、こういう造形を作りたかったってということよりも、どちらかというと、暗くなりがちな場所に光を与えるっていうことをしています。こういうふうに斜めにするってことで、この中庭をめちゃめちゃ明るくするということをやったりとか、基本は影の形を建物にすることで、非常に明るい外を作ることをやりました。

桂 本当に造形が鋭いと思います。最近作である釜石の小学校は緩やかな勾配の切妻屋根、延岡の駅は単純なコンクリートのグリッドを採用し、独自性や鋭さなどを意識的に消し去っているのではという解釈もできます。しかし、乾建築の原動力は、「きらり」もそうですが、シャープな造形とプランニングなのだと断言したいところです。平面図をご覧ください。中庭に接するリビングや寝室の出入りが不思議なんですよね。普通行けるところが行けない。この夫婦の寝室も真ん中に仕切り壁がある。ドアはありません。この場合も今、子供さん達の声が隣から聞こえるので、この壁と同じです。微妙な関係性がこのプロジェクトを成立させているのかも知れません。勝手に想像しながらのトークですので、乾さんに更に説明していただきましょう。

乾 この寝室に関しては、いびきの問題があって、どっちもが安らかに寝たいという要望に応えた感じです。ここの扉の場所もちょうと悩みました。当然、何度もここに扉をつけ、なくしを繰り返して、結局なくしました。そこまで大きくない家なので扉がなくてもなんとかなると思ったのと、ここに扉つけると、



■ ハウスO

リビングの雰囲気台無しになるなと思ったんですね。落ち着きっていうものが欲しいなと思ったので、扉なしにしたっていうのが最終的な話です。

桂 次のスライドにある幾つかの「ハウスO」模型写真をご覧ください。少しずつ変化が見られて興味深いですね。例えば、この模型の時には、ここの部分に空洞がないなどです。時々、建築雑誌の記事を色々探ってみることがあります。面白いのは、思考の過程で、これを開くか閉じるかとか、思考過程の残像が残っていて、葛藤のポイントがわかることです。「ハウスO」では、中庭を媒体として、動線や視線を通すか、遮断するかのをせめぎ合いがあるので。ミステリアスですね。この操作を発見して、ただ者ではないと感じました。第1部の講演では、コモンズに関する話がテーマの中心になっていました。繰り返し、言及するならば、乾建築を楽しむためには、鋭い造形手腕と立体的な思考に着目するべきでしょう。「ハウスO」では、もうひとつ魅力的なことがあります。それは「懐の深い空間」です。最初に建築雑誌を見たとき、内部空間の上部が意図的に薄暗く鋭角的な空間構成に惹かれました。奥深い宇宙空間のようなものを感じさせてくれるのです。そのほの暗い空間に先ほど述べました穴からでてくる光がこぞんまりとした温かな空間をつくるのです。住宅にしては結構ボリュームがあるのですが、家族が集まる場所性を巧妙に創りだす建築だなと感心させられます。このような作家性の強い建築を作る方が、次に何を産み出すか。そこなんですよね。一般的な話になりますが、建築家の多くが自分のスタイルを守ること終始しているようにみえることがあります。「ハウスO」を創りだす乾さんが優れている点は、芸術性を含めてシャープに攻めることができるのに、それを前面に出すことなく、求められている課題を追求できることにあると言うことができます。何故このような話をしているかというと、先ほどの延岡駅の説明を聞いておきますと、乾さんの建築的特性を余り感じられないと思う方々が多いのではと思っているからなのです。建築プログラムといっても良いかも知れませんが「コモンズ」の概念を成立させているのは、緻密に計算されてた乾流空間操作なのだと受け止めています。冒頭にお話しさせていただきましたが、皆さんがおられる、ここ現代美

術館ホームギャラリーの天井照明や本棚の作品などが場を創りだしているように延岡駅のcommons空間も、視線交差、吹抜、本棚などのスケール調整、光の採り入れ方が無意識に感じられるように操作されています。人々のアクティビティを誘発するために尖った空間操作能力を抑え、特異性を感じさせない空間を仕掛けているのです。最近、建築のソフト、或いはプログラムというような、つくり方を前面に押し出す傾向が強いのですが、少し古い時代に育った者としては、それはそれとして、最終的には空間のもつ魅力の勝負だと言いたところ。乾さんの講演では、ソフトを中心にしてお話をいただいたのですが、実際はやはり空間で勝負してることを第2部では付け加えるかたちで勝手に展開させていきたいと思います。乾さんの延岡とかが、なぜ使われるか。ここのホームギャラリーにおいても、冒頭にふれました天井照明やアブラモビッチの本棚の空間等々で構成される空間があるからこそです。延岡駅では、例えば、色々な人が読書や学習してるところは、大きな空間なのですけど、よく見ると本棚のスケールで落ち着きのある場をつくりだしていることがわかります。その空間は決して独立しているわけでもなく、吹き抜け空間の連続性や光のコントロールなどによって、コモナイズを誘導するアクティビティがつくりだされているように感じました。乾さんの建築設計の魅力を皆さんと少しでも共有できればと思っています。本当に、打ち合わせをしないでスライドを用意しましたので、話が行ったり来たりします。次のスライドは、KAPコミッショナーの伊東豊雄先生の「ホワイトU」という住宅です。この住宅も記念碑的な建築です。平面図と写真を見ながら2つの住宅を比較してみるととても面白いの



■ 桂英昭

です。中庭空間の位置づけ、個室空間の成り立ちと関係性、それらと中庭の関係、光の取り方と効果。「ホワイトU」の取り込む光は、昭和世代の眼で見るとコルビジエの影響が感じられます。乾さんの「ハウスO」との相違が興味深いですね。次のスライドは一般的な中庭住宅のプランニングです。このような普通といわれる中庭建築は、中庭を中心にぐるぐると動線がまわる回廊形式で計画されています。伊東先生の「ホワイトU」、乾さんの「ハウスO」を、この一般的な中庭住宅と比較しながら思考をめぐらせると2作品の特徴がよくわかるのではないのでしょうか。建築にはどれが正解かというのはないのですが、建築家の発明というべき計画を発見したときの楽しみは尽きません。中庭を媒体とした考え方で、アクティブな使われ方で言いますと一般的な中庭住宅が優位だと言えますが、「ホワイトU」は、このような使用を前提としていない静的な空間を求めているのかも知れません。「ハウスO」は活動動線だけでなく、視線や明りの変化の立体交差という表現ができます。本当のところをご本人に聞いてみましょう。

乾 「ハウスO」を、興味を持って見ていただけてるのは、なかなか言うてくださる方がいらっしゃるんで、大変嬉しい思いで聞いておりました。「ハウスO」ですけども、先ほど形の説明しましたように、とにかく明るい庭を作るってことを考えました。それと同時に、まさに暗い室内にしたかったんですね、暗い室内と明るい庭っていうセットを作るってことが建物のテーマになってました。私の中で何に興味があったかっていうと、都内なのですが敷地周辺は地形がなく掘り所があまりない感じでした。住宅街として戦後開発されたんですけども、グリッドの繰り返しで、実際迷うんです。何回通っても迷うぐらいに場所性を見つけにくいまちなんです。そうした場所に生涯を過ごすという場所になるためには、何か明るさと暗さのコントラストがあって、落ち着きがきっちり感じられるっていう場所が必要だと思いました。ジェイ・アップルトンっていう環境の研究をした学者の方が、「眺望=隠れ家理論 (prospect-refuge theory)」を書いておられて、それは、動物が安全と感じたりとか、心地よく感じるってのはどういう場所かって言った時に、眺望は得られるんだけど、自分が隠れてるっていう、そういう

環境を作るっていうのが、動物行動学的に求められてるっていう、そういう理論が1つあるんです。それに結構近い感覚の場所を作ろうかなと思って、要するに、自分としては暗い中で隠れてるんだけど、そこから外を見ると非常に明るい、いろんなものが眺められるっていう場所を作るといいんじゃないかっていうことで。屋根を斜めに切ったり、平面も影の形で斜めに切ったりしながら、明るいところとにかくいろんな方向に存在しているっていう場所を作りました。でも、10何年前なんで、はっきりとその時の記憶っていうのは忘れてしまったんですけども、今、「ホワイトU」と比べられると、ちょっと困ってるんですが、やっぱり中庭に入れて使えないと、ちょっと周辺の環境の明るさだけだと、ちょっと変えきれないっていう風に思ったっていう感じですかね。

桂 打ち合わせなしで進めるといい感じの回答がいただけてワクワクします。話の展開を少し戻らせていただきます。スライドでは現代美術館の平面や関連のものを紹介していきます。乾さんの「コモナイズ」の話と上手く繋がれば良いのですが。再び、現代美術館の話題です。このホームギャラリー横の通路の突き当たりに井手宣通ギャラリーがあります。アートポリス建築展の色々な展示などで活用させていただいております。その時に、クライン・ダイサムの「べちゃくちゃナイト」っていう催しをこのホームギャラリーでさせていただきました。その時はテーブルがなく、椅子がローソファの静的な空間でした。空間は椅子が違うだけ、テーブルが違うだけ、音や光の入りが違うだけで全然違った雰囲気になりますね。アート繋がりの方にシフトします。次のスライドは、この現代美術館へのアプローチとなる熊日びづれす広場からスタートする上通アーケードです。フランスのオルセー美術館のメイン通路・展示空間のスライドとダブらせています。本日、この乾さんの講演会と同時平行して、上通でKAPパネル・模型展示をおこなっており、多くの方々にご覧いただいております。1992年、アートポリス第1回建築展での上通での展示を思い出します。当時はバブル時代の名残で予算もあり、若い創作にエネルギーを注ぐ若者が多くいました。上通、下通、サンロードのアーケード内の展示に加え、上通パビリオンなどの中庭、キャッスル横の広場、パルコビル改

装前の空店舗展示場を様々なアート作品で埋めつくし大いに盛り上がった記憶が鮮明に残っています。実はスライドのように上通アーケード空間をオルセー美術館の中央展示空間に見立てていますのであります。本日はこの会場でのトークセッションの機会を与えていただきましたので、長年抱いている妄想的な計画を披露したいと思います。現代美術館は私にとっては、とても大切な場所なのですが、スライドにある平面を見ていただけるとわかるのですが、不満に感じているのは、この会場の先が行き詰まりになっていることです。過激な提案ですが、井手宣通ギャラリーと隣のビルの熊日生涯学習プラザや熊日イノベーションオフィスに壁に穴を穿ち、繋げること、現代美術館の改修されたアトラボマーケットの一部床を取り除いて下のスターバックスと直接行き来できるような吹抜空間をつくることを夢想しているのです。びづれす広場と新しく改装された地下道も展示空間になっていますので、これも繋げてよいでしょう。本日は乾さんが「コモナイズ」をテーマに講演されるのであろうと推測して、現代美術館を中心にアートを媒体とした交流拠点として上通界限全体を考えるというのはどうでしょうか。そのためには延岡駅のように水平方向だけでなく、垂直方向の空間構成が重要だと思います。老いの戯れ言ですが。この提案をイメージできるような建築事例が次のスライドです。中国系と日本人の3名からなる建築設計事務所マッド・アーキテクトの集合住宅「ワン・リバー・ノース」です。空間の繋がる造形は強烈なインパクトがあります。日比野館長の製作されたアトラボのロゴが活きるようなインパクトが欲しくて話題としました。ここで一休みということで乾さんの御意見をお聞きたいと思います。



■ 乾久美子

乾 都市や建築に風穴をあけるという破壊の話かと思いますが、全てのまちや施設には桂先生みたい

に風穴の存在を大切に思う方が必要だと思うんです。先ほど京都市立芸術大学のお話をしましたが、何人か破壊者的な先生方がいるんですけど、本当にやっぱり建てたものを壊してもらわないと困るというか、壊すように使っていただきたいという気持ちがあります。なので、今話にでたみたいなとんでもない構想があることはすごい重要なことで、いい話だなと思って聞いてました。とにかく日本は公共施設やパブリックスペースとかが、「モنزの悲劇以上の悲劇」になっていて、要するに管理者が強すぎてユーザーを萎縮させてしまい、やれることがやれないっていうとんでもないことが起こっていて、それはちょっと変えないといけないと思います。町ももう管理の目が厳しすぎて自由に振る舞えないっていうことが起きてるのは良くないなと思ってるので、桂先生のような意気込みというのは、全員がっていうか、多くの方が持つべき気持ちなんだなと思っています。

桂 勝手に褒めの言葉として受け取らせていただきます。ありがとうございます。若い時に公共建築を設計し、何度か議会に呼ばれたことがあります。問題とされた議題の1つに、運営管理がありました。私の計画する山間部にある町の公共建築はメインの入口だけでなく、どこからでも入れるように計画してあるのです。縁側のようなところ、裏口のようなところ、個室のテラスからという具合です。公共建築は管理上の問題で入口は1箇所でよいというわけです。いや、いや、あなた方は自分の家に人が来る時に、正面玄関から来る人何人いますか。縁側の方に回って入ったり、裏の台所から入ったりが普通なのに、急に公共建築になったら、そのような決まり事をだけを押しつけられる場合、徹底的に議論をつくして理解を得るまで闘うことを心がけていました。既成概念にとらわれたルールは疑いからスタートしたいという気持ちは強いです。例えば、ここで本を読んだり鑑賞してる人がいて、ちょっと気の短い人だったら子供が走ったり物音を立てたりすると文句を言うかも知れない。近くにある上通の喫茶店サンマルクを利用する機会があります。少し広い空間で大きなテーブル席、小さなブース場の席、ソファー

タイプの席、窓際のカウンター席など多様なスタイルで、老若男女、海外からの観光客、家族連れで賑わっています。勉強している若者も多いです。公共建築にはない自由さです。騒音と見なしてきたものは、ひょっとしたらコミュニティBGMかもしれないのです。民間では既成のルールを疑うことで新しいニーズを開発する試みを繰り返していることを学ぶべきだと思います。ここら辺から、別の展開に進めましょう。私が乾さんの建築思考に興味を持つことになったきっかけのひとつに和水町小学校のKAPプロポーザルがあります。乾さん、落選されましたよね。

乾 落ちました。

桂 プロポーザル1次審査の時に、1つだけ敷地をはみ出してる案がありました。意識的かどうかは定かではありません。目指す提案のためにはルールにとらわれない。この提案は、とても興味のあるもので強く印象に残っています。審査はコミッショナーとアドバイザーだけでありませんので2次審査に残ることはできませんでした。一般的な公共建築プロポーザルでは、応募要綱の拡大解釈や既成の建築概念を大きく逸脱する計画を許してもらえません。後日、提案者が乾さんとわかりました。乾さんこそ、破壊者、チャレンジャーではないでしょうか。コンペやプロポーザルの提案は既成概念と闘う意気込みがなければつまらない。つい先日、相良村交流施設のKAPプロポーザル公開2次審査がありました。最優秀賞案は他の応募案と異なり、敷地与条件のメインだけではない部分にも着目して魅力的な可能性を探っていました。実は、KAPプロポーザルは、そのせめぎ合いが面白いのです。せめぎ合いのせいで落選する場合も、勝ち上がるケースもありますので、ご注意ください。建築コンペの歴史で、シドニーのオペラハウスのコンペでウォツオンが勝ったとき、余りに他の案とかけ離れていたためにはじめはゴミ箱に捨てられていたというエピソードがあります。審査委員のひとりであった建築家の英断で拾い上げられたと言われています。アートポリスをやりながら、私たちはステレオタイプ化した与条件に束縛されすぎていないか、それを問い直すことを心がけています。新しい時代に即した建築を目指すには、常に既

成概念とのせめぎ合いが求められるはずですよ。次のスライドからはアートポリスのキャッチフレーズというテーマの変遷です。

アートポリス初代コミッショナーの磯崎新先生のテーマは「都市にデザインを、田園にアイデアを」です。自分達の手で社会を変えていくのだという力強さが時代を反映していました。また、ダイヤモンドのように輝く建築を点として打込み、それが周囲に繋が

り線となり、やがて面となって都市や景観を形作るという言説も聞かれました。プロジェクト建築が輝くのは、ある意味、アバンギャルドであるからです。「〇〇主義」などによってスタイルが決まってしまうのを打破、先ほどの話で言えば破壊する前衛的な思考や活動と考えてもよいでしょう。初期アートポリスの意気込みというか精神は、年を重ねる毎に多くの人々を巻き込みながらの変遷をしてきましたが、根底に流れるものは受け継がれていると感じているのは私だけではないと思います。近年では、伊東豊雄コミッショナーの唱えている「自然に開き、人と和す」というテーマがあります。建築活動のテーマ、或いはキャッチフレーズの中で一番素敵だと思います。自身の創作活動にしか関心のない建築家には、到底浮かばない表現でしょう。このような表現ができるのは、他者への配慮ができることと文学者の資質を持った建築家でなければ無理だと考えます。自身で常に手を動かし、この精神を持ちながら美しい建築を創り続けるのであります。コミッショナーと言うより師匠なのです。次のスライドに移りますが、先の点・線・面の話に繋げての展開になります。故人となりました、アップルCEOのスティーブ・ジョブスの言葉に「コネクティング・ザ・ドッツ」というのがあります。時間が経った「点」としての我々の経



験やその時の思いのようなものが、ある時、突然結びついて、新しいものや活動になっていくという意味です。アートポリスを36年やっていると、その36年間にやってきたこと、感じたことにずいぶん影響を受けました。体の半分はアートポリスでできてるんです。そういうことが、なんか繋がってくるっていうのは、この歳になって、やっとわかってきたような気がします。先ほどアバンギャルドという言葉を使いましたが、既成概念にとらわれないためには、別の視点から言いますと「ノーヴィス」ということかも知れません。この言葉は、芸術の分野では、色々な経験はあるのだけれど、何かをするときには全くの素人、新参者を意味します。建築家も建築をやるときはプロ、まちづくりは素人、そういう新鮮な目をもって事に当たる。「みんなの家」もそうですが、全然建築のことがわからない人たちが集まって自分達の集まる特別な場をつくるのがいいのです。「アバンギャルド」じゃなくて、素直な気持ちをもった「ビギナー」。ここの現代美術館の企画で、いつも関心を持っているものに「アール・ブリュット」があります。「アール・ブリュット」っていうのは極簡単に言えば、画家とか彫刻家などの芸術専門教育を受けてない人がアートを産み出すことを意味します。個人的に作為的な建築や芸術にあまり興味がないために、このような話をしています。「コネクティング・ザ・ドッツ」、「ノーヴィス」などの感覚は重要な気がします。この会場には、建築家を目指している熊本の若い人たちがおられます。乾さんは、現在、くまもとアートポリスの推進賞で選考委員を務めていただいていますので、機会があれば、どういうことに注目して推進賞を選ん

でるかとか、こういうのはダメだ、そういう話をお聞きしたいところです。次のスライドから、

また、アドホックに展開していきます。年老いた私が建築の勉強をさせていただいているテレビ番組にBS放送の「小さな村の物語イタリア」があります。毎回、イタリアの小さな村を訪れて村民の生活、食文化、風景、お祭りなどをドキュメンタリー調で紹介するものです。どこも小さな集落で、人口規模的には消滅自治体なのですが、何故か、これからもずっと生き延びるのではないかという希望を感じるのです。スライドにあるように石畳、カラフルに塗られた石壁、窓際に飾られた花々、どれも手造りで同じものがない、しかし、共通した感性によって共有される習わしのようなものがあります。宗教、食事、音楽、芸術、犬や猫等々も深く関わって風景が受け継がれているのです。10年以上の長寿番組なので、コロナ禍も全ての村が経験している。それで最近の番組ではコロナ禍を挟んで7〜8年を空けて再び同じ村を訪れるという企画もあり、リアリティある村の変化も非常に上手く浮かび上がらせてくれています。それぞれの村の中心にはコモンズである広場があり、そこに繋がる不規則な石畳の路地の数々、何処の路地に面する窓には手入れの行き届いた美しい花々が咲き誇っています。恋愛のエピソードも豊富で、何れの村も、故郷を一時期離れることがあろうと、ある時期になったら、皆故郷に戻ってくる物語が描かれています。日本の消滅自治体の話題のような悲壮感というか、諦め感がない理由を求めて、この番組から勉強させてもらっています。スライドでお見せしているように、1つ1つの住宅、路地、花壇等々が「小さな風景」であり、或いはそれらで構成される小さな村そのものが「小さな風景」と言ってもいいかもしれません。乾さんの「小さな風景」の位置づけとは視点が異なりますが、構成要素は常に更新され続けているので、感覚的な価値観は共有できるものがあると思います。私の世代は、モダニズムの最後、ポストモダンが台頭し始めた時に建築を学んでいました。自身の建築の師匠はバキバキな機能主義者で、丹下健三先生のお弟子さんですが、その師匠から何故か、次のスライドに示す本を読むように薦められました。今は日本語訳が出てます。とても造詣の深い内容です。「ザ・タイムレス・ウェイ・オブ・ビルディング」、日本語訳では「時を超えた建設の道」。時代を超えるような普遍的な建設のあり方のようなものを説く内容です。スライドにある他

方の本が、「パタン・ランゲージ」です。近年、あまり話題にはしませんが、ベーシックな部分で「パタン・ランゲージ」から影響を受けた建築家やまちづくり専門家は少なくはないのでは。特に、まちづくりに関わる人は一読をお勧めします。壁、階段、入口などの持つ意味を考え直させてくれます。それをどのように設計に繋げていくか。乾さんの延岡駅のコモナイズが成功してるのは、利用者とワークショップなどを積重ねて、パタン・ランゲージにあるような要素を磨き上げて空間を構成しているのだと推察しています。付け加えまして、スライドの中央にある図は、「形の合成に関するノート」という本のメインとなるもので、都市はツリーでなく、セミラチス構造でできているというものです。いずれの本もクリストファー・アレグザンダーという方の著作です。この話題の最後に、穏やかで普遍的な生活環境だけではだめで、時々、イベントや祭り、観光客などの外部の人との交流などの刺激を得る仕掛け、仕組みが必要だと思います。仕掛けの媒体として真っ先に浮かぶのはアートです。次のスライドは先ほどのイタリアの小さな村でのアートフェスティバルの光景です。様々なアートだけでなく、パフォーマンスなどがテンポラリーに繰り広げられます。最近、日本でも越後妻有のような農山村のアートフェスティバルが定着してきております。外国の事例で私の知っている米国の小さな漁村の場合、若いアーティストに無償でアトリエと魚などの食料を提供する仕組みがあります。アーティスト達は、返礼の意で年に2度ほど漁村のメインストリートで制作した作品を並べ、住民と一緒にアートフェスティバルを開催するのです。住民数を上回る観光客が多く押し寄せ、経済的な効果も大きいと聞いております。何事も凝り固まることなく、新しい刺激を取り入れることは、ここまでの話にでてきましたアバンギャルドの精神の重要性、或いは乾さんが言われた、いい意味での破壊者的なものと共通していると考えています。アートポリスの考え方の中にも底通するところがあります。上手く繋がってないかも知れませんが、勝手に準備してきた多数のスライドを用いて話を展開しておりますが、ここで乾さんに御意見を伺いたいと思います。

乾 すごいたくさんの内容が含まれてたので、どれも面白い内容ですが、まずおっしゃられてたのが粹

組みを取り直そうっていう、ものを考える時の基本をおっしゃられてたのかなっていう風に思います。その時のエピソードとして、アートポリスのプロポーザルが意外と粹組みを取り直す、粹組みを疑って提案をしたら、失敗することあれば成功することもあるっていう面白いサンプルとともにお話をくださったのがまず1つで、全くその通りだなんていう風に思ってた。次に、破壊者ってのは、私が失礼な言い方で申し上げたんですけれども、その話っていうのは、もうまさに私が今日最初にオストロムの「SOCC理論」っていうものを先ほど御紹介して、「コモンズ」のガバナンスっていう本を映し出したと思うんですけれども、その話だったと思います。つまり、いわゆる公共の空間っていうのはハーディンモデルで、市場化っていうもので監視すべきだってのは議員さんとかよくある施設管理者の考え方で、それはもうハーディンモデルしか知らないんですよ。それに対して、そのオストロムの「SOCC理論」は、使う人がガバナンスをするべき、使う人が管理することだっていう風に言っている理論でして、それは桂先生の設計したものというのはたくさんのエントラントがあって、ごく当たり前にみんながそれを使うべきだっていうのは、もうまさにその話なんですよ。つまり、使う人間が責任を持って使うし、みんなが管理し合えばいいじゃないかっていうことをベースに桂先生は設計されたでしょうし、多くの利用者ってのは、そういう感覚を持てる。多くの管理者だけがそれを理解できないというのが今悲劇なんですよ。それは本当に治すべきだと思います。ここで強調すべきだなと思うのは、そうした間違い、公共空間を管理する人の裁量で管理するべきだという考えを指摘してきたのは建築家であるということです。早いタイミングから建築関係者はそのことに疑問を持って主張し続けていて、世間の圧力にあらがいがら言い続けてきたところに、ようやくオストロムのようなこういう経済学者の人たちが、理論的なバックボーンを与えてくださったので、公にそのことを理論的に証明できるって今時代に来てると思います。あと、今のお話本当に面白くて、「パタン・ランゲージ」のアレグザンダーの話、最後していただきました。私もアレグザンダーは本当に好きで、この小さな風景の学びっていうのは、まさに「パタン・ラン

ゲージ」、私にとっては「パタン・ランゲージ」なんです。ただ、彼のパタンは西洋中世のまちなんですよ。なんで、日本人にとってちょっと使いづらいっていか、素敵なんだけど日本の空間に合わないなって思うパタンが多くて、それを自分たちのまちで採取できるパタンを持っておくべきなんじゃないかっていう裏テーマが私にはありました。なので、本当にそのアレグザンダーのようすっていうのは本当にそう思います。あと面白いのは、そのアレグザンダーって、実際に日本で建設をして非常に評判が悪かったですよ。私もちょうど学生の時にアレグザンダーの作品ができて、ゲゲって思ったんですよ。これやばいなって。やっぱりちょっとよろしくなく見えた。冷静にみるとただ、今行くとすごくいいんですよ。やっぱり時が気持ち悪さを解決していて、素晴らしい雰囲気醸し出して、アレグザンダーっていうのは間違ってたんだって思わせるものがある。なので、なんて言うんですかね、こうボトムアップでいろんな物事を解決していくっていうものが、やっぱり30年とか40年前だとやっぱり理解されなかったっていうタイミングだったんだと。それがようやくその2024年っていうこういう時期に来て、多くの人間が理解できるようになってきたっていう時代なのかなっていう感覚がある。そういう感覚を持って、先生のお話をお聞きしておりました。

桂 素晴らしいお話をありがとうございます。実は、乾さんの飛行機遅れたらどうしようかということも含めて、トークセッションの準備をしてまいりました。その場合、今からスライドで紹介するアートポリスが関係した「みんなの家」と応急仮設住宅配置計画の話を中心にした解説をさせていただこうと思っておりました。時間の関係で簡潔に説明しなければなりません。2011年東日本大震災時に、仙台市にKAP「みんなの家」第1号を建設しました。以後、熊本県内に九州北部豪雨、熊本地震、豪雨災害で被災した方々のために、13年間、くまもとアートポリスは「みんなの家」を計画してきました。このスライドが仙台「みんなの家」です。KAPの歴史的な建築のひとつと位置づけています。この小さな40平方メートルの建物によって、被災者の方々がどれぐらい救われたか。このスタートが能登震災後に「熊本モデル」

とニュースで話題になるまでに成長しております。次のスライドはおまけですが、乾さん、わかりますでしょうか。

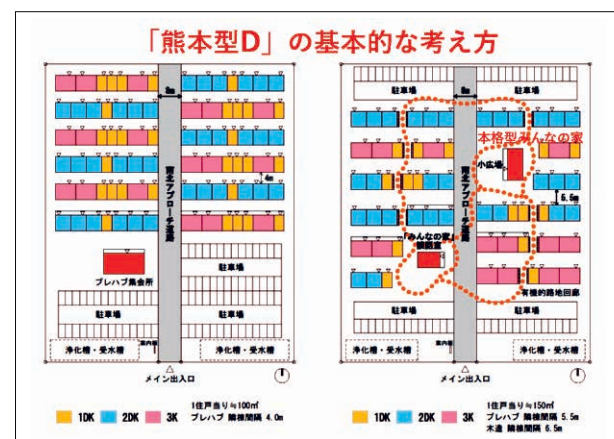
乾 伊東さんのスケッチですかね、

桂 そうです。仙台「みんなの家」の伊東先生のファーストイメージ・スケッチです。キュートなハート型と切妻型の2タイプがあります。結果的に予算の関係で切妻型に落ち着きました。意見交換時に私が2タイプを称して、ショートケーキかおにぎりかの選択だというような勝手な例えをさせていただいています。被災直後に、おにぎりを持っていくか、ショートケーキを持っていくか、という例えです。実は単純な選択ではなく、どちらの考え方も大切なことです。海外の被災地ではフルコースの食事が提供されるという報道も耳にします。そここのところの感性は、伊東先生の優れたところであります。どのような場面でも、美しさやデザインの持つ力を信じている。また、薪ストーブを設置する意味も大変重要です。単に暖をとる目的だけでなく、見知らぬ人々が集い、コミュニケーションをとるためのアイテムとしての選択です。次の東北大震災時の応急仮設住宅団地のスライドをご覧ください。隣接する住宅地と比較すれば4世帯分の敷地面積に、仮設住宅がなんと24戸押し込められているのです。幾つかスライドを見せますが、まるで養鶏場のような計画であります。このこと自体は災害救助法に則ったものですから、誰かが悪いというものではないことをお断りしておきます。熊本震災では、被災して10日後に伊東先生と私が県庁に呼ばれ、いきなり鉛筆を渡され、応急仮設住宅団地の配置及び「みんなの

家」の考え方のスケッチを描くことになりました。時間の関係で、大まかなことだけをスライドで紹介します。基本的な駐車場の考え方、南北メイン通路の他に3棟毎に3メートル程度の南北路地を設けること、規格型40平方メートルと本格型60平方メートルの「みんなの家」の配置、住戸間の東西通路幅の拡張などの「熊本型」と呼ばれるルールを設定することになりました。KAP提案をベースにすることを承諾くださった蒲島知事をはじめ、建築部局の英断と実現させるための努力は素晴らしいと感心させられました。次からのスライドにて実際の応急仮設住宅団地の航空写真をご覧ください。詳細は日本建築学会の論文などに掲載されておりますので興味のある方は参照いただければと思います。南北路地に設置された木製ベンチのあるたまり空間やプレハブ仮設住宅にたたずむ木造「みんなの家」は「小さな風景」のようなものと言えるかも知れません。付け加えて、新設した南北路地に面する住宅は可能な限り1人世帯用となるように考えています。皆さんがお声がけをして、可能な限り孤独死を防ごうという試みです。熊本モデルと呼ばれる理由は、全ての仮設住宅団地がこのルールで出来上がっているからなのです。このスライドが最初に建設の始まった西原村小森応急仮設住宅団地です。木造仮設とプレハブ仮設が混在するタイプです。大きな団地です。規格型5棟と被災された住民とワークショップをして個性ある「みんなの家」とする本格型が3棟あります。本日も会場に来られている熊本の若い建築家の方々が協力して計画にあたってくださいました。次のスライドは、500戸を超える最大の益城テクノ団地です。大きな団地で街から離れた場所に建設されました。商業スペースや岡野さんが設計され

た大型の本格型「みんなの家」、それから被災者の方々が数年後に安価に新しい住宅を建てられるときの参考になる約1,000万で建つ住宅3棟の展示場がある革新的な仮設住宅団地です。次のスライドの東北の大規模プレハブ応急仮設住宅団地と比較いただければと思います。「みんなの家」をつくる意味は、乾さんの講演をお聞きして、なんだか、安らぎを与える「小さな風景」を内包させることと言えるのではないのでしょうか。熊本震災後の応急仮設住宅団地は110団地も建設されましたが、どれひとつとして同じスタイルは採用していません。後2つほどスライド紹介します。ひとつはドッグランを備えた団地で、他は阿蘇に建つ木造団地で恵まれた風景に溶け込む別荘地のような住環境となっております。熊本震災後の応急仮設住宅団地は、それ以前と比べて異次元とも言ってよい画期的な計画であると考えています。次のスライドは豪雨災害のために全て木造で建設された応急仮設団地です。熊本震災の応急仮設住宅からバージョンアップして全てコンクリート基礎と瓦屋根となっております。微妙に住棟の配置にずれを生じさせて、堅苦しさを緩和させることを試みた団地もあります。木造と瓦は再利用するという大きな目的があります。次のスライドは、九州の建築を学ぶ大学生が集まり、KASEIというボランティア活動をおこなっている様子です。色々な「みんなの家」を拠点に、被災者の方々と一緒にテーブル、椅子、花壇や植物の日よけなどをつくっていただいています。また、「みんなの家」の棟上げ時にはスライドのような元気のでの餅撒きも企画していただきました。「みんなの家」の入口にある表札は、被災しなかった町から提供いただいた木材に各高校の書道部の方々に揮毫いただいたものです。表

札の裏にある密にかかれた心のこもったアートに感動します。応急仮設住宅団地計画と「みんなの家」の素晴らしい面だけをかいつまんで紹介しましたが、ここまでの道程における公共、民間にかかわらず、多くの障害や苦勞についてのエピソードは取って割愛しました。そろそろ時間がなくなりますので、エピローグとします。次からのスライドはアートポリス初期の建築プロジェクト3件です。まず、山本理顕先生の保田窪第一団地です。一般的には住棟間の空地を敢えて、閉鎖的なコの字型中庭をつくり、集会場を舞台のようにし、住戸群を客席のように見立て、コモナイズしようという革新的な試みです。次は、故早川邦彦先生の熊本市新地団地です。ここでは、「51C」と呼ばれる公営住宅標準設計の系統で同じ間取りが並び市営住宅において、可能な限り同じプランニングをしないという壮大なチャレンジをしています。次は伊東豊雄先生の八代未来の森ミュージアムです。その中にある喫茶店がこれまでにないポップな空間でしたので、何故そのような設計をしたのかをお尋ねしましたところ、観覧に関係ない若者達でも気楽にデートできるような場にしたという返答でした。既成概念にとらわれないということの重要性を示唆いただきました。若かりし頃、これらのことから受けた新鮮な刺激は忘れないものです。もう一度「コネクティング・ザ・ドッツ」の話に戻ります。スティーブ・ジョブスは大学やめてフラフラしていた時に、勝手に授業を受けに行ったらしいのです。その授業の中で興味を持ったのが文字を美しく見せるための手法であるカリグラフィー。そのことがやがてマッキントッシュというPCを成功させたフォントの美しさに繋がるのです。ジョブスは、後にスタンフォードの名誉博士号授賞式の会場



■ 応急仮設住宅団地の配置(基本的な考え方)



■ 応急仮設住宅団地の配置(南北軸路地)



■ 山江村中央グラウンド仮設団地(令和2年7月豪雨)



■ KASEIの取組み

で、「コネクティング・ザ・ドッツ」っていうのは、色々和若いきに経験したことは無駄なことだけではなく、やがて、その経験から得た刺激が色々なかたちで結びつくこと、やがて大きな収穫となるという話であります。くまもとアートポリス36年の継続があるからこそ、先にお話した新鮮な刺激などが繋がり、つまりコネクティングして、その一例として「熊本モデル」と称される応急仮設住宅計画や「みんなの家」に結びついたというハッピーエンドのようなで締めくくるといたします。乾さんとのトークセッションでしたが、アートポリスのPRで長時間を占領しすぎたようで申し訳ありません。

乾 まず、熊本型の仮設住宅っていうのは、あんまりまだ広まってないんですけれども、全国的にみても先進的な取り組みだと思います。県の西村さんとかによく連れて行っていただいて見ているのですが、ちょっとしたことが仮設住宅団地としての質を上げているっていうことは素晴らしいしなと思っています。それを丁寧にやっていると、継続的に熊本県でやっておられるのもすごいなと思います。「くまもとアートポリス」という組織がそれをずっとこうやってるっていうのは本当になかなかないことだと思っています、これが他の県にも広がっていくといいんじゃないかなっていう風に思っています。「コネクティング・ザ・ドッツ」は、ちょっと私、今どこまで内容を理解できてるかっていうのはわからないんですけれども、今、割とタイパとかコスパとかパフォーマンスがいいことをみんな重視するじゃないですか。割とすぐにその成果が現れるっていうことをやっぱり求められる。なんか世知辛い世の中だと思うんですけど、そうじゃないんだよっていうことを今桂先生

おっしゃっているように思いました。よくわかんなくても、何かに投資してかなきゃいけないんじゃないかと本当にそう思います。特に、なんて言うんですかね、例えば何かを学ぶっていうことって、それこそ「コネクティング・ザ・ドッツ」以外の何物でもない。例えば建築の勉強も、建築士の資格を取るという最終成果物として見えてるものはあったとしても、建築学ぶ時にどうなるかなってわかんない。やっぱりこの業界、この勉強始めたりとかって、建築だけじゃないと思うんですけども、ありとあらゆる学問とか学びっていうのは、どうなるかわかんないけど、とりあえずやってみようみたいな、そういうものだと思います。学びだけではなくて、仕事もそうだと思うんです。ある会社を選ぶとか、そうした時っていうのは、その会社に入ればこうなるなんて考えて、そうやって職業決める人もいるとは思いますが、そうじゃないですよ。なんとなく面白いんじゃないか、ちょっと給料安いかもしれないけど、なんか面白そうだから入ってみようって言って、その会社に取り込んでみるとか。なんかそういう動きができるかできないかっていうのは、全然やっぱり人生変わると思いますよね。ちゃんとなんでもそういうことって重要なんじゃないかっていうことを考えて聞いておりました。

桂 残り5分になりましたので、質問のある方はお願い致します。

菊池 九州大学学部3年の菊池と申します。本日はご講演ありがとうございました。僕から聞きたいことは1つですけど、建築家が公共空間を作る意図は何なのかっていうのを伺いたいです。これまで

の建築家っていうのはすごいマニフェストを発信していかなくちゃいけない立場だったと思うんですが、これからの建築家っていうのは、それこそマニフェストをコモンス化していく、コモニング化していくのがこれからの建築だと、僕は乾さんのお話を聞いて少し感じたんですが、これから建築家が公共空間を作っていく意味、その意義とは何なのかっていうのを聞きたいです。

乾 ありがとうございます。建築家というその個人と、個人として責任を取るつもりで設計をする人間が何をするかっていう興味からの質問なんだと思います。いろんなプロセスや方法論は誰もが結構すぐにアプローチしてできるようになるので、それは組織でも組織設計事務所でも誰でもやってるよっていう時代だと思う。たとえばワークショップは10年前だと話題になったんだけど、今はあたりまえのようになりました。なので、回答としては、ずっと桂先

生が今日強調されていた、やっぱり空間の質であったり、あと空間っていうと、ちょっと抽象的な話になっていくんで、やっぱりその場所の読み取りっていうのが、やっぱり人間の目を通さないと見えてこないものを、きちんと見つけられることができるかどうかだと思うんですよね。空間を良くするってのもあるし、その場所に立つんだったら、その場所の個性なり何なりを個人としてきちんと掘んで、それを設計に落とし込めるかどうかってことが問われていくのかなという風に思ってます、そういうところかなと思います。

桂 素晴らしい質疑応答をありがとうございます。最後に、お忙しい中ご講演くださった乾久美子さんに拍手をしてお礼に変えさせていただきたいと思います。参加くださった皆様にも御礼申し上げます。ありがとうございました。



くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

アートポリスバスツアー

アートポリスバスツアー

2024年11月24日(日)

参加者:111名(台湾:46名、韓国:37名、日本:28名)

アートポリスの取組みを効果的に情報発信し、国内外からの視察・観光者の増加につなげるとともに、人材育成として建築を学ぶ学生等に対し、建築やまちづくりに対する関心を高めていただくために、アートポリスバスツアーを開催しました。

ツアー行程

- 9:00 ● 集合
- 新阿蘇大橋展望所ヨ・ミュール(熊本地震みんなの家利活用)
- 熊本地震震災ミュージアムKIOKU
- 12:00 ● 昼食・休憩 草千里
- 南阿蘇鉄道高森駅・交流施設
- エバーフィールド木材加工場
- 17:00 ● 解散



実施状況

参加者111名は、1号車(台湾)、2号車(韓国)、3号車(日本)に分かれてそれぞれの集合場所を出発し、1箇所目の目的地である「新阿蘇大橋展望所ヨ・ミュール」へ向かいました。車内では、くまもとアートポリスの取組みをまとめたDVD(多言語版)の視

聴やスタッフの説明を聞いていただきました。また、海外参加者は、イヤホンマイクを利用し、同乗したスタッフやバスガイドの説明を通訳して施設を巡りました。

01 新阿蘇大橋展望所ヨ・ミュール(熊本地震みんなの家利活用プロジェクト)

新阿蘇大橋展望所ヨ・ミュールで、参加者はガイドから平成28年熊本地震の被害状況などの解説を聞きながら、展望スペースから新阿蘇大橋や長陽大橋を見渡す他、仮設団地内にあった「みんなの家」を利活用したビジター施設内に展示されている「みんなの家」の紹介パネルを観覧されました。



参加者の声

韓国からの参加者:
「みんなの家」の利活用はいい取組みで、縁側が非常に良く、風景とも合っていた。

国内からの参加者:
元が「みんなの家」なこともあり、最少の大きさでまとまっていて可愛い印象を受けた。

02 熊本地震震災ミュージアムKIOKU (くもとアートポリスプロジェクト)

熊本地震震災ミュージアムKIOKUでは、KAPプロジェクトカードを参考に建物の見学と併せて、震災遺構の旧東海大学阿蘇校舎1号館などを見学しました。また、施設内のシアターでは、熊本地震発生直後の被災地の様子や、当時の役場職員の話、創造的復興の歩みなどを映像やガイドスタッフの解説を受けて見学しました。



参加者の声

台湾からの参加者：

周囲の環境に調和した建物の外観は大変魅力的であり、博物館を訪れると差し込む日の光は、震災後に新たな建物を建てる人々に希望を与えてくれると感じました。

韓国からの参加者：

この空間は人と自然が共存し、災害の中でも希望と回復を発見できるというメッセージを含んでいた。このようなデザインは、単に災害を記憶する場所を超えて、自然と人間の持続可能な関係を反映したいという意図が感じられました。

03 南阿蘇鉄道高森駅・交流施設 (くもとアートポリスプロジェクト)

南阿蘇鉄道高森駅・交流施設では、特徴的な木組みの棟や回廊など、「とにかく広いプラットフォーム」を見学しました。

また、到着したトロッコ列車やワンピース像と一緒に写真を撮る姿がありました。



参加者の声

韓国からの参加者：

鉄道駅がコミュニティ空間になるという意図が斬新で良かったです。木造建築のデザインも素敵だが、中庭の芝生が重要な場所を提供するというのが印象的です。

国内からの参加者：

ホームとの段差や通路など多くの段差が座れる場所としても機能していて、実際に多くの人が座っていて良いなと思いました。また木組みの直線と駅舎で印象的に用いられている曲線が喧嘩することなく調和していることが印象的でした。

04 エバーフィールド木材加工場(くもとアートポリスプロジェクト)

エバーフィールド木材加工場では、施主で施工者の株式会社エバーフィールドの久原英司社長がプロポーザルの最終審査でこの案を選んだ際の気持ちを話されました。また、設計者の小川次郎氏が施設の特徴などを説明しました。

参加者が積極的に通訳を通じて、設計者や施工者に本建物の構造の仕組みや施工方法などを質問している姿が見られました。



参加者の声

台湾からの参加者：

建築家が設計した木造建築はとても素晴らしく、継承する価値のある日本の技術だと思います。

国内からの参加者：

設計された小川さん、職人の方に直に話を聞いたのは大変勉強になりました。このような機会は滅多になく、一緒に来た建築学科の学生も今回の見聞した事を大学に持ち帰り他の学生にも広めたいと言っていました。

施設の紹介

01 新阿蘇大橋展望所 ヨ・ミュール

平成28年熊本地震により、住む場所を無くした方は、仮設住宅団地での生活をよぎなくされた。くもとアートポリス事業として、仮設住宅で過ごしている方が少しでも心の安らぎを得られる場所として「みんなの家」を100棟以上整備。

「みんなの家」は仮設住宅団地の閉鎖に伴い、新たな施設として活用された。

新阿蘇大橋展望所ヨ・ミュールは、南阿蘇村陽ノ丘仮設団地内に古森弘一氏が設計した本格型「みんなの家」を移築して利活用したもの。



02 熊本地震震災ミュージアムKIOKU

平成28年熊本地震の記憶を未来へ遺し学ぶ回廊型フィールドミュージアムの中核拠点施設として、熊本県が整備し2023年6月に完成した。

2020年に全国から応募があった41件の中から「大西麻貴+百田有希+産絃設計」のチームが選ばれた。

本施設は、雄大な阿蘇のランドスケープと調和した大らかな屋根を持つ、美しい建築が大きな特徴。

敷地入口にある館名サイン(看板)のタイルは被災地域のこども達を対象に、「こども建築塾」としてワークショップを開催して作られた。



©TakumiOta

03 南阿蘇鉄道高森駅・交流施設

平成28年熊本地震からの創造的復興の一環として「定住」・「観光」・「防災」をテーマに整備され、2024年7月に完成した。

2018年8月に全国から応募があった39件の中から太田浩史氏が設計者として選ばれた。

建物の設計だけではなく、車内改札である特徴を生かして誰でも自由に入ることができる「とにかく広いプラットフォーム」が特徴的な建築。



©TakumiOta

04 エバーフィールド木材加工場

木造仮設住宅やみんなの家の建設に携わった株式会社エバーフィールドの木材加工場として整備され2023年10月に完成した。

「美しく、新しい木造空間を求める」をテーマにプロポーザルを開催し、2022年に全国から応募があった44件の中から「小川次郎+小林靖+池田聖太」のチームが選ばれた。

事業者の久原英司社長は、審査の段階で施工イメージが一番できなかったもの、木造建築の未来のため、技術力を結集してチャレンジすることに意義を感じ、前例のないものを選んだと話した。



くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

建築ウィーク

建築ウィーク

2024年11月11日(月)～24日(日)

数多くの幅広い年代の建築物であふれる熊本県の豊かさを再認識していただくともに、建築文化を国内外に情報発信していくため、2024年11月11日から24日の期間を「建築ウィーク」と称し、アートポリスプロジェクトの特別見学会とアートポリス関係施設の協力による一斉見学を開催しました。

また、いつでも気軽に見学できる施設として、アートポリスプロジェクト38施設・アートポリス推進賞受賞施設43施設・アートポリス'92選定既存建造物をホームページで紹介しました。

●アートポリス関係施設

アートポリスプロジェクト

アートポリス事業による設計者を選定し設計された建造物

アートポリス推進賞受賞施設

アートポリスの顕彰事業に応募され表彰を受けた施設

アートポリス'92選定既存建造物

「アートポリス建築展'92」において選定した県内の既存建造物

アートポリスプロジェクトの特別見学会

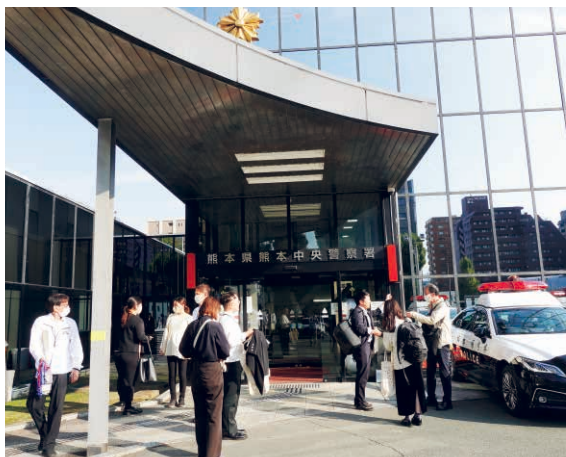
普段、見学することができないアートポリスプロジェクト3施設で、施設内部も見学できる特別見学会を開催しました。

≫ 熊本北警察署(現 熊本中央警察署)

11月13日(水)/参加者:26名

協力 熊本中央警察署

概要 アートポリスプロジェクト第1号として1990年に整備された熊本北警察署(現熊本中央警察署)では、普段見ることができない4階武道場などの施設内部を見学しました。



≫ 宇土市立宇土小学校

11月16日(土)/参加者:53名

協力 宇土市教育委員会教育部学校教育課、宇土市立宇土小学校

概要 2011年に完成した宇土市立宇土小学校では、開放的な校舎の内部や体育館を見学しました。



≫ 熊本県総合防災航空センター

11月18日(月)/参加者:21名

協力 熊本県防災消防航空センター

概要 2017年に完成した熊本総合防災航空センターでは、ヘリコプター格納庫やブリーフィングルームで、特徴的な木造架構などを見学しました。



アートポリス関係施設の一斉見学

アートポリス関係施設の施設所有者(管理者)や設計者等が主催者となり、見学者を受け入れる見学会が12箇所で開催されました。

アートポリスプロジェクト

県営保田窪第一団地

開催日 11月22日(金)、23日(土)、29日(金)/3日間
主 催 熊本県住宅課



エバーフィールド木材加工場

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間
主 催 株式会社エバーフィールド



大腸肛門病センター高野病院

開催日 11月12日(火)～15日(金)/4日間
主 催 社会医療法人社団高野会



県立あしきた青少年の家

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間
主 催 NPOひとづくりJAPANネットワーク・三勢体



©宮井政次

阿蘇警察署内牧交番

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間
主 催 熊本阿蘇警察署



©宮井政次

氷川ダム管理所

主 催 熊本県氷川ダム管理事務所



©宮井正樹

八代広域行政事務組合消防本部庁舎

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間
主 催 八代広域行政事務組合



出田眼科病院

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間
主 催 医療法人出田会出田眼科病院



熊本県民テレビ新社屋

開催日 11月22日(金)
主 催 株式会社熊本県民テレビ
株式会社三菱地所設計九州支店



株式会社野田市兵衛商店流通団地営業所

主 催 株式会社野田市兵衛商店



熊本市医師会館・看護専門学校

主 催 社団法人熊本市医師会
株式会社セルアーキテクト



©浅川敏

熊本大学資料館(国指定重要文化財 五高記念館)

開催日 11月11日(月)～24日(日)/12日間

熊本大学資料館別館(国指定重要文化財 化学実験場)

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間

熊本大学工学部研究資料館(国指定重要文化財 工学部研究資料館)

開催日 11月14日(木)

主 催 国立大学法人熊本大学



木魂館

開催日 11月11日(月)～24日(日)/14日間
主 催 一般財団法人学びやの里



水前寺成趣園

主 催 出水神社



古今伝授の間

主 催 公益財団法人永青文庫



くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

モク活シンポジウム

「モク活 × ○○」

2024年10月19日(土) [第1部] 13:30~15:10 [第2部] 15:20~16:45

■会場 / ホテル熊本テルサ テルサホール

これまで新しい木造建築を創ってきたアートポリスの人材育成事業として、県内の建築関係者と林業関係者が一緒になって、木造建築物の魅力を発信する取組みを「モク活」と位置づけ、2022年度からシンポジウムを開催しています。

県産材の利活用促進につなげるため、2022年度は「木材活用の可能性や熊本の木材供給に求めるもの」、2023年度は「木材のことをもっと知りたい」、3年目となる今年度は、これまでの「モク活」の取り組みを踏まえて「モク活×○○」をテーマに開催しました。

会場には建築を学ぶ学生をはじめ、県内外の業界関係者、行政関係者など100名を超える参加者が集まりました。



第1部 事例発表「モク活×○○」

第1部では、建築関係者や林業関係者など6名のプレゼンターが、それぞれキーワード『○○』を設定し、『モク活×○○』をテーマに、木材利用促進の活動事例を発表しました。



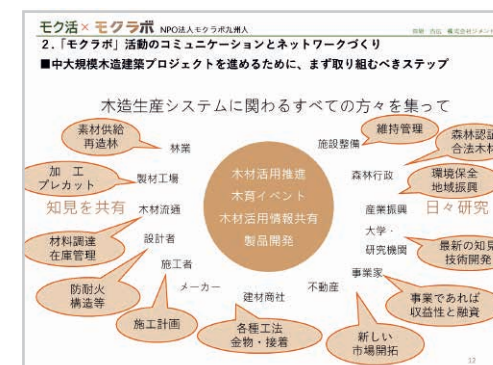
『モク活 × モクラボ』 / 発表者:真道吉広(ジメント)

「九州」に中層・中大規模木造を広める研究活動について発表された。

詳しくはこちらから



■真道吉広



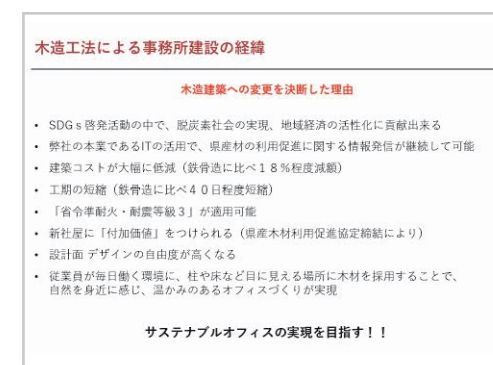
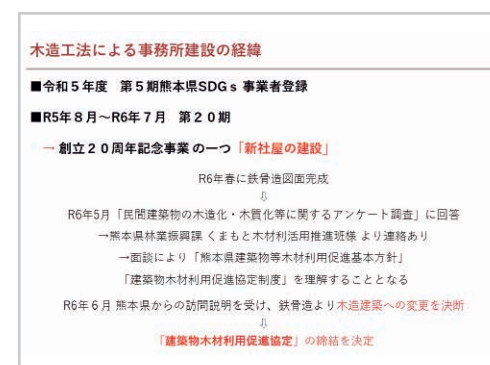
『モク活 × サステナブルオフィスの実現』 / 発表者:一山愉(ソフトシンク)

「新社屋の建設」を鉄骨造から木造に変更した経緯について発表された。

詳しくはこちらから



■一山愉



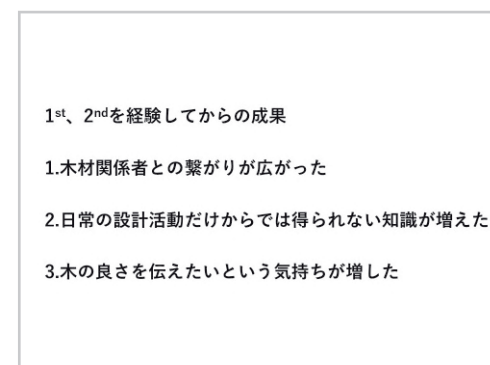
『モク活 × 続活』 / 発表者:林田直樹(林田直樹建築デザイン事務所)

過去2回のモク活を経験してからの成果について発表された。

詳しくはこちらから



■林田直樹



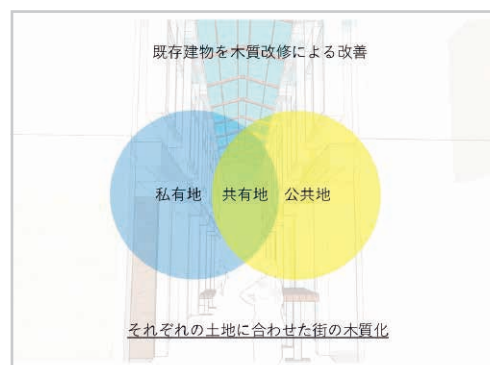
>> 『モク活 × 街の木質化』 / 発表者: 白橋祐二 (建築食堂)

それぞれの土地に合わせた街の木質化について発表された。

詳しくは
こちらから



白橋祐二



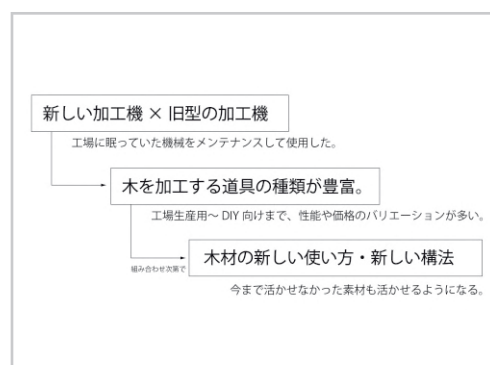
>> 『モク活 × プロセスの追求』 / 発表者: 三舛正順 (南小国町集落支援員)

木材の新しい使い方・新しい構法について発表された。

詳しくは
こちらから



三舛正順



>> 『モク活 × 地域と交わる』 / 発表者: 入交律歌 (小国町森林組合)

小国杉ブランドの地域への溶け込みについて発表された。

詳しくは
こちらから



入交律歌



第2部 ディスカッション

第2部では、6名のプレゼンターにコーディネーターと6名のコメントーターも加わりプレゼンターへの質疑を交えながら、県産材の定義や木材利用促進協定、持続可能な開発目標(SDGs)、クラウドファンディングによるワークショップの開催、構造の専門家としてのモク活への取り組み、ShopBot(木工用CNCルーター)の活用、山師の現状など多岐にわたりディスカッションが行われました。また、これまでの「モク活」を通して建築設計や構造設計、林業関係者とのネットワークが構築されたことにより実現したプロジェクトの一例などが紹介されました。途中、一般参加者が発言する場面もあり、会場全体を巻き込んだシンポジウムとなりました。

コーディネーター



原田 展幸 (ライフジャム)

コメントーター



桂 英昭 (アートポリスアドバイザー)



上野 瑞樹 (セルアーキテクト)



大塚 智子 (甲斐構造設計事務所)



堀川 恵巳子 (堀川建築・造形計画)



池田 元吉 (熊本県木造設計アドバイザー)



水間 信介 (熊本県木材協会連合会)



くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

創造的復興プロジェクト

創造的復興プロジェクト (完成見学会、新規プロジェクト決定)

南阿蘇鉄道高森駅・交流施設

南阿蘇鉄道高森駅周辺は、平成28年に発生した熊本地震から、南阿蘇鉄道沿線地域の創造的復興の一環として整備された。南阿蘇鉄道は、阿蘇山・阿蘇カルデラの南部(南郷谷)の地域にとって、住民生活を支える必要不可欠な“地域公共交通の基軸”であると同時に、地域の基幹産業である観光業を支える県内屈指の観光資源である。

高森町は、始発・終着駅である高森駅と駅周辺を対象に「定住」「観光」「防災」をキーワードに整備した。駅舎とラウンジ棟の2つの建物、それらの庇と回廊、塔が芝生広場を囲むことで、観光客が阿蘇のカルデラの風景を眺めることができる駅が実現した。また、熊本地震で車中泊という避難方法が注目されたことを踏まえ、交流施設を車中泊の支援拠点に、芝生広場を運動場として活用できるよう計画された。

設計者が目指した「とにかく広いプラットフォーム」が国内外から訪れる利用者を温かく迎える。



©太田拓実

経緯

2018年9月	プロポーザル/設計者決定
2019年3月	全体構想策定
2022年7月	工事開始
2023年7月	駅舎・プラットフォーム完成
2024年7月	交流棟完成/グランドオープン
2024年7月14日(日)	完成見学会 参加者:50名



設計者コメント



■ 太田浩史

2018年のプロポーザルから6年、高森駅の完成を迎えることができました。中松駅から先の線路が錆び付いているのを見て、本当に南阿蘇鉄道は再開するのだろうかと不安に思ったこともありましたが、2023年7月の全線開通でそれが現実となり、その1年後、高森駅も全く違う姿に生まれ変わりました。鉄道模型少年だった私にとって、南阿蘇鉄道の創造的復興に参加できたことは忘れることのできない経験となりました。

このプロジェクトは、高森町の景観づくりでもありました。今でこそ「とにかく広いプラットフォーム」から美しいカルデラを見ることができますが、この風景はもとは木立で見えず、敷地の真ん中に駅舎があったために、町なかからも風景は隠されておりました。町の方々や見学会の参加者の皆様から「こんな風景があるなんて知らなかった」「眺めが本当に素晴らしい」などの感想をいただき、景観づくりをテーマにして本当に良かったと思っています。

普通は駅舎の設計で終わってしまうプロジェクトが、景観、交通計画、プラットフォームとその上屋など、幅広いデザインを含むようになったのは、くまもとアートポリスが「グランドデザイン」づくりから関わったからかと思っています。今後もこのようなプロジェクトが増えてほしいと思っています。

芦北町地域優良賃貸住宅友田団地

令和2年7月豪雨は芦北町にも甚大な被害をもたらした。

芦北町は、「すべては、次代を担うこどもたちのために」をまちづくりの基本理念に掲げ、「創造的復興」を進めた。

被災した町民や移住希望者が安心・安全を実感できる魅力ある住環境の整備を計画した。

日常の暮らしの中に災害への備えを組み込むため、高い位置にバルコニーを設け、垂直避難場所としての役目を持たせている。各住戸に薪ストーブを設け間伐材を使い、地域林業と自然との共生を試みている。

また、役割を終えた仮設団地の「みんなの家」の木材を再利用した足湯を設置して地域住民の交流を促進するなど、子育て世代を対象とした他に類を見ない特色のある公共住宅となった。

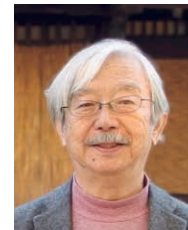


経緯

2022年 4月	プロポーザル/設計者決定
2023年 6月	工事開始
2024年11月	完成
2024年12月14日(土)	完成見学会 参加者:44名



設計者コメント



■ 片山和俊



■ 龍口元哉

プロポーザルコンペに参加する際、このプロジェクトの意義である「新しい未来への創造的復興」を熟考し、具体的な設計に取り組んできました。設計のテーマは次の3点でした。

- ①日常の暮らしの中に災害への備えを無理なく組み込むこと。
- ②次世代の為に安心・安全な住環境を創り出すこと。
- ③自然と共生すること。

これらを具体的な形としてまとめていくのは難しくもあり、責任を感じる仕事でした。コンペ選定後は地域の方々のニーズをいかに掲げ上げるか。また、県や町の各方面の方々との調整をいかに協議しながら進めるか。など、設計にさらに手を加えていく作業が続き大変ではありましたが、今となっては良い経験となっています。

建設開始後は、地域交流のイベントとして高校生の現地見学会や小学生を対象に建材の塗装体験ワークショップが開催されました。将来を担う子供達に我々のプロジェクトの意義の一端でも理解してもらえたかと思っています。公営住宅として、この住まいが地域の中で長く活かされていく事を切に願っています。

このアートポリス事業は、オープンに参加できる点が特徴であり利点だと考えます。36年余り続いているこの事業が、今後も長く続くことを願っています。

また、県内のみならず世界に認知される建築として、維持・保存されることを望んでいます。

》相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設

相良村は、令和2年7月豪雨災害を受け策定した「相良村復興計画」及び「相良村復興むらづくり計画」に基づき、川辺川の魅力を村内外に発信し、川辺川を中心とした周辺環境・地域資源を活かした地域活性化・関係交流人口の増加につなげるため、「川辺川魅力創造事業基本計画」を令和6年4月に策定した。

この計画は、復興を後押しする地域活性化事業として川辺川のみならず相良村の魅力を発信し、村内外の人が交流できる拠点施設を整備することとしている。

このことから、川辺川を核とした持続可能な拠点づくりを目指し、村民が地域のシンボルとして誇れる建物、かつ相良村廻り地区の村民が日ごろから気軽に使える身近な施設として、また交流人口を増やす施設とするため、公募型プロポーザルを実施し、全国44件の中から『本岡伊藤・赤熊・CAMPUS設計共同体』が最優秀賞に選ばれた。

経緯

2024年7月 4日(木) 応募要項発表
7月22日(月) 現地見学会
8月28日(水) 応募締切
9月 3日(火) 一次審査
9月29日(日) 二次審査(公開審査)
参加者:84名

最優秀賞 本岡伊藤・赤熊・CAMPUS 設計共同体
優 秀 賞 yHa architects
佳 作 永瀬・加藤・山内・丹部 設計共同体
佳 作 生物建築舎・figraph 設計共同体
佳 作 ヨシモトアソシエイツ

設計者コメント



■(左から)東郷拓真、赤熊宏紀、伊藤祐紀、本岡一秀、松岡篤

日本一の清流である川辺川を中心とした相良村の豊かな自然環境と魅力ある資源を活かし、訪れた人々を「川辺川での体験へとつなげる」ことをテーマとしています。川辺川の流れて広がる相良村に対して、川に直交して交流拠点施設を配置しました。川に直交する建築配置は村と川をつなぎ、廻り観音堂や上流の豊かな風景と訪れた人々の結節点となることを目指しています。村と川をつなぐこの建築は、山々や川の流れて呼応した「大らかな屋根」と浸水に配慮した「段状空間」により多様な居場所をつくり、県産材を活用した「ゆらぎのある天井」や「無柱空間」によって、豊かな環境とともに様々な体験をもたらすことを期待しています。

それぞれの設計事務所が強みを活かしながら、住民の皆さまが集い、訪れた人が川辺川と相良村の魅力を体験できる場所の実現に向けて、相良村役場はじめ、土木設計者や護岸設計者、関係者の皆さまと一緒に尽力していきます。



第28回くまもとアートポリス推進賞表彰式

2025年1月23日(木) 開催場所:ホテル熊本テルサ たい樹

「くまもとアートポリス推進賞」は、建築文化に対する関心を高めるため、1995年から県内各地の優れた建造物等を表彰してきました。

今回の第28回推進賞は、くまもとアートポリス建築展2024の一環として実施し、29件の応募があり、選考委員会の審査の結果、推進賞3作品、推進賞選賞4作品の計7作品を表彰しました。



推進賞

- ・東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパス／益城町
- ・箱の家163(Y邸)／大津町
- ・立野交流施設(立野駅)／南阿蘇村

推進賞選賞

- ・熊本保健科学大学 レストラン ピリア／熊本市
- ・酒蔵の片隅で角打ち／山鹿市
- ・垂玉温泉 瀧日和／南阿蘇村
- ・天然記念物布田川断層帯(谷川地区)見学施設／益城町



受賞施設

推進賞

》 東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパス



この度はありがとうございます。
阿蘇くまもと臨空キャンパスは、平成28年熊本地震で甚大な被害を受けた阿蘇キャンパスの復旧・復興として建設されました。講義、実習、研究が一つとなった総合農学研究施設を最大限に生かして人材育成に尽力してまいります。

事業主 学校法人東海大学
設計者 株式会社石本建築事務所
施工者 株式会社豊工務店
三井住友建設株式会社



©株式会社川澄・小林研二写真事務所 中村隆 長谷川健太

》 箱の家163(Y邸)



地震に負けないような家を作りたいとの思いから、難波和彦さんに設計を依頼しました。色々な縁があり、設計・施工ともにより優秀なレベルの高いものができたと思っています。とても良い住み心地で住んでいます。

事業主 匿名(個人)
設計者 株式会社難波和彦+界工作舎
施工者 株式会社オンサイト



©YASHIRO PHOTO OFFICE

》 立野交流施設(立野駅)



立野駅周辺の住民の皆様や阿蘇の玄関口としての観光の役割、豊肥本線・南阿蘇鉄道を利用していただいている方のために、立野駅だけでなく立野駅交流施設として整備しました。
推進賞をいただきありがとうございます。

事業主 南阿蘇村
設計者 株式会社ジメント
施工者 吉永・橋本特定建設工事共同企業体



推進賞選賞

》 熊本保健科学大学 レストラン ピリア



©上田新一郎／エスエス

事業主 学校法人銀杏学園 熊本保健科学大学
設計者 戸田建設株式会社 一級建築士事務所
施工者 戸田建設株式会社 九州支店

》 垂玉温泉 瀧日和



©平林克己

事業主 垂玉温泉 瀧日和
設計者 堺武治建築事務所
株式会社坂本達哉建築設計事務所
施工者 株式会社Lives

》 酒蔵の片隅で角打ち



©石井紀久

事業主 千代の園酒造株式会社
設計者 株式会社前原設計事務所
株式会社ZEN環境設計
施工者 株式会社本山建設

》 天然記念物布田川断層帯(谷川地区)見学施設



事業主 益城町
設計者 株式会社アーバンデザインコンサルタント
施工者 山王株式会社、株式会社真輝
株式会社坂澤建設、長義建設株式会社

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

協賛事業詳細

協賛事業詳細

第5回くまもとたてものづくりフォトコンテスト

主催 一般社団法人熊本県建築協会
日時 2024年9月3日(火)～2025年2月1日(土)
会場 (株)豊工務店〔現場撮影会〕
同仁堂ホールスタジオライブ〔表彰式〕
鶴屋百貨店地下2階通路〔受賞作品展示〕(以上、熊本市)
内容 これからの未来を担う子どもたちに、建築業の魅力や建築業への関心、「建物をつくる心」や「建物をつくる喜び」を発見してもらうために、熊本県内の建築現場で働くひとたちや建物・建築現場を題材にした写真コンテストを実施した。
応募数 226作品



山本理顕氏プリツカー賞受賞記念講演会 「保田窪第一団地の意味」

主催 公益社団法人熊本県建築士会(青年部会)、一般財団法人熊本県建築住宅センター、公益社団法人日本建築家協会九州支部熊本地域会
日時 2024年10月11日(金)
会場 熊本市国際交流会館(熊本市)
内容 2024年度プリツカー賞を受賞された山本理顕氏を講師に講演会を実施。くまもとアートポリス事業で1990年に設計した県営保田窪第一団地の設計の意味から、設計するに当たって考えたことをテーマに講演された。
来場者数 204名



令和6年賃貸住宅の住環境向上セミナー

主催 公益財団法人日本賃貸住宅管理協会熊本県支部
日時 2024年10月5日(土)
会場 ホテル熊本テルサ テルサホール(熊本市)
内容 賃貸住宅市場の整備と健全な発展のため、熊本大学名誉教授両角光男氏による基調講演等を実施し、貸主・借主や賃貸住宅管理者など賃貸住宅に関わる方々に対し、最新の行政動向や、法律等の改正内容を周知した。
来場者数 274名(うちオンライン87名)



令和6年度マンション管理基礎セミナー

主催 公益財団法人マンション管理センター、一般財団法人熊本県建築住宅センター、一般社団法人熊本県マンション管理士会
日時 2024年10月30日(水)
会場 ホテル熊本テルサ たい樹(熊本市)
内容 マンション居住者が安心して快適な暮らしができることを目的とし、マンション管理・運営に関する有益な講演を行うとともに、併せて個別相談会を実施した。
来場者数 42名



令和6年度(2024年度)熊本県耐震対策講演会 ～やってみよう、安心・安全な住まいのための耐震化～

主催 熊本県土木部建築住宅局建築課
日時 2024年12月7日(土)
会場 天草市役所(天草市)
内容 名古屋工業大学大学院教授 井戸田秀樹氏から「家族を守るための木造住宅の耐震化について」と題し講演いただいた。講演後の質疑応答では、限られた時間の中で複数の質問があり、講師と参加者との活発な意見交換がなされた。また、参加者アンケートでは講演内容等について好評を得た。
来場者数 39名



第34回熊本の建築家作品展「建築家のしごと展」

主催 公益社団法人日本建築家協会九州支部熊本地域会
日時 2024年10月8日(火)～10月14日(月)
会場 熊本県立美術館分館 1階展示室1(熊本市)
内容 日本建築家協会九州支部熊本地域会会員を中心とした建築作品及び活動の紹介展示を行った。
来場者数 508名



土木の日フォトコンテスト2024

主催 熊本県土木部監理課
日時 作品募集期間:2024年7月20日(土)～9月30日(月)
結果発表:2024年11月18日(月)「土木の日」
内容 「あなたの推し土木」をテーマとしたフォトコンテストを実施した。
※「土木の日」実行委員会事業の一つとして実施
応募数 346作品



小学生部門グランプリ作品「我が家の頼もしい大工さん」

熊本県立大学公開講演会「三木順子氏講演会」

主催 公立大学法人熊本県立大学
日時 2024年10月5日(土)
会場 熊本県立大学 大ホール(熊本市)
内容 神戸女学院大学教授 三木順子氏を講師に迎え「ひとはなぜ形をつくり形を味わうのかーHomo Pictorの美学ー」と題する公開講演会を開催した。
来場者数 103名



2024ゆのまえ漫画フェスタ、漫画月間

主催 湯前町、ゆのまえ漫画フェスタ実行委員会
日時 2024ゆのまえ漫画フェスタ:2024年11月24日(日)
同前夜祭:2024年11月23日(土)
漫画月間:2024年11月1日(金)～11月30日(土)
会場 湯前まんが美術館一帯〔2024ゆのまえ漫画フェスタ〕
湯前町内〔漫画月間〕 (以上、湯前町)
内容 11月24日開催の「ゆのまえ漫画フェスタ」に合わせ、町内
周遊スタンプラリーや「コスプレdeお仕事」などを実施し
た。漫画フェスタでは、漫画家のトークショー、アニソン歌手
のライブなどを実施し、多くの来場者で賑わった。
来場者数 約10,000名



熊本県建設技術協会研修会

主催 熊本県建設技術協会
日時 2024年11月5日(火)～6日(水)
会場 芦北町湯浦地区地域優良賃貸住宅、熊本城 他(県内一円)
内容 港湾事業、河川改修事業、跨線橋上部工工事、堰堤工事、地
域優良賃貸住宅新築工事、4車線化事業、宇土櫓解体及び
石垣工事現場と計8カ所において、建築のほか土木等、
様々な観点から研修を実施し、若手技術者の実務で必要と
なる知見を深めた。
来場者数 25名



熊本大学建築展

主催 国立大学法人熊本大学工学部土木建築学科
日時 2024年11月2日(土)～4日(月)
会場 熊本大学 全学教育棟E201教室
内容 建築学科3年生を中心に、学生が主体となって「突然、人が
10分の1サイズになったら…そんなもものはなし。」とい
うテーマで建築模型9個と、それを説明するパネル9枚を作
成し、多くの人に建築の魅力を伝えようと、学生自身に
とっても今後の学習に活かすことのできる経験となった。
来場者数 1,465名



真紅の森の工芸展

主催 道の駅 秘境の郷いずみ
日時 2024年11月1日(金)～4日(月)
会場 道の駅 秘境の郷いずみ(八代市)
内容 「真紅の森の工芸展」として、工芸品の展示即売会を開催した。
また、開催期間中の11月3日(日)には「真紅の森の音楽祭」
も同時に開催した。
来場者数 1,098名



令和6年度(2024年度)中大規模木造建築物推進事業 株式会社豊工務店新社屋 現場見学会

主催 熊本県農林水産部森林局林業振興課、一般社団法人熊本
県建築士事務所協会
日時 2024年11月21日(木)
会場 株式会社豊工務店隣接地(熊本市)
内容 熊本県産材を使用した木造建築物である新社屋の新築工
事について、施主の効力を得て現場見学会を開催した。
来場者数 51名



令和6年度(2024年度)中大規模木造建築物推進事業 モクサン 講演会「木造新時代」～くまもとの木で実現する木造3階建てビル～

主催 熊本県農林水産部森林局林業振興課、一般社団法人熊本
県建築士事務所協会
日時 2025年2月5日(水)
会場 熊本城ホール 3階大会議室(熊本市)
内容 中大規模木造建築物を推進していくため、建築基準法改正
を踏まえた木造ビルにおける防耐火の考え方及び熊本県
内で生産した製材を利用した木造3階建ての実現・普及に
ついて、講演会を開催した。
来場者数 91名



令和6年度(2024年度)中大規模木造建築物推進事業 講演会「中大規模木造建築物の耐久設計と維持保全」

主催 熊本県農林水産部森林局林業振興課、一般社団法人熊本
県建築士事務所協会
日時 2025年2月25日(火)
会場 ホテル熊本テルサ たい樹(熊本市)
内容 中大規模木造建築物を推進していくため、耐久設計と維持
保全についての講演会及び県内関連事業者からの情報提
供を実施した。
来場者数 56名



建築展2024を終えて

桂 英昭

くまもとアートポリスアドバイザー



4年に一度のくまもとアートポリス（以下、KAP）建築展が9回目を迎えた。ウィルス禍、地域格差の拡大、少子高齢化の加速、インバウンドという社会背景に加え、県内では新しく木村知事の就任、熊本地震災害と熊本豪雨災害からの復興促進、TSMCの進出による大規模開発などの話題がある。これらのことに建築に携わる者が底通して関心を寄せているのは「コミュニティの変容」である。

年末の熊本日日新聞朝刊1面のコラム「新生面」で、熊本城壁と対峙する県立美術館分館と被災後に再建された阿蘇神社楼門が題材となっていた。前者は第1回建築展1992年に完成したKAPプロジェクトである。後者は同年にKAP既存建築物に選定されている。両者に共通する銅板葺屋根の経年変化にふれながら、物質面だけでなく人の営みにおいても「時が経る」ことの重要性に言及している。実に感慨深い。

年が明けて、NHK熊本放送局の番組「クマロク!」でKAPのミニ特集が放送された。伊東コミッショナーへのインタビューを中心に、歴代話題作やKIOKUなどの復興プロジェクトを紹介し、活動の意義が簡潔に編集されていた。企画の発端は、着任間もない若い女性デレクターが

建築展イベントに好奇心を持って参加されたことにある。白紙に近い状態からの取材に戸惑いながらも、予期せずKAP36年を新鮮にふりかえる機会を得た。

「持続する志」という建築展の意味深長なテーマに答えるため、既視感のあるイベントの羅列、消化にならないように、みんなで心がけた。参加、協力していただいた多くの方々の反響は、紹介したマスコミの反応と無関係ではないと考えている。

末廣 香織

くまもとアートポリスアドバイザー



36年間もの間続いてきた「くまもとアートポリス（以下、KAP）」は、建築界を取り巻く様々な社会状況に対応してきたように思います。メインシンポジウムのテーマになった「新しい公共性とは何か」という問いは、人口減少と低成長、そして持続可能な社会の構築が大きな社会的課題になっている日本の現状に対するものと捉えられます。

ここで報告された日本各地で活躍する若手建築家たちの小さなコミュニティ作りの取り組みは、地域で暮らす志を持った個人が集まって、それぞれのコモン、つまり共有空間や共有組織を作ることによって、地域の生活環境を良くしてゆく力強い実例であり、将来への希望を抱かせました。これは、市町村などの公的な組織に資金も余力もなくなっていることとの裏返しとも言えますし、少々制度疲労を起こしている従来型の公的仕組みとは全く異なる形で、原初的な意味での「公共性」の概念を一から作り直してゆく作業のようにも思えます。地域の人々とのつながりを作り、協力して建築やまちを作ってゆくことが、地域の魅力を高め、幸せで持続可能な社会につながるのだと思います。

しかしこうした地道な努力の一方で、近年の熊本では、世界的半導体企業の進出に伴う大

きな環境の変化が起こりました。ネット社会の進展に伴って、情報だけでなく金融資産の移動も容易になり、国際的な資本の集中が進むとともに、貧富の格差も拡大する一方です。その資本の一部が熊本に落ちてきただけで、地域の経済と社会には、ものすごいインパクトです。それはそれで良かったと思うのですが、産業構造や社会の移り変わりの歴史を考えれば、20年後も熊本でこの状況が続いているとは思えません。私たちは、片や地域のまちづくりのような、非常に小さなスケールの活動を地道に進めながら、それとは桁がいくつも違う世界経済の荒波の間を縫うように生きてゆかないといけない現実の中にいます。

KAPが、優れた建築とまちの資産を作るという当初からの理念を守り、社会状況に合わせつつも価値ある活動を続けてゆくことを期待しています。

曾我部 昌史

くまもとアートポリスアドバイザー



くまもとアートポリス(以下、KAP)がはじまって36年。9回目のKAP建築展である。県政的には16年務められた蒲島知事に変わり木村知事が就任して最初の開催であり、KAPの運営的にみてもアートポリス班に配属されて間もない新人担当者の多い、これまでとは少々異なる体制での開催となった。

シンポジウムでは、小さなコミュニティづくりを手掛ける4人の若手アクティビスト(3人の建築家ともう一人。森田さんの活動はひと言でくりにくい)が、新しい公共性を巡り、それぞれの活動やその位置づけ方を語った。4者に共通していたのは、ほどよい公共性を持った場の実現を目指していることである。場所や方法が異なりながらも同じ価値観がその前提にあり、話を聞いて一種の潮流に巻き込まれるような心地よさがあった。

韓国、台湾から多くの参加者があったことも、今回の新しい試みの成果である。大学生を中心に多くの参加者が集まり、シンポジウムや懇親会、バスツアーに参加した。中でも学生たちは、日本の学生に比べるとずっと積極的である。その様子に感化されたのか、日本の学生たちも普段よりも積極的になったようで、懇親会で伊東コミッショナーがずっと色々な学生たちに囲ま

れていたのが印象的である。

KAPの活動を建築的な特徴をもとに4つの時代に区切り、その時代を代表する建築家による4つのインタビュー動画が制作された。みな異口同音に活動が継続している時間の長さに触れ、それがいかに貴重なことなのかを訴えた。商店街での展示やトークイベントなども行われた。今回のイベント全体を振り返ってみると、新しい建築祭のありかたにチャレンジすることになったように思う。新人担当者が多かったことがプラスに働いたに違いない。準備に奔走した関係者のみなさんは様々な苦勞に直面することになったと思うけれど、その努力に感謝をしたい。

総括

「くまもとアートポリス建築展2024」からの展望

小路永 守

熊本県土木部建築住宅局長



令和6年7月の南阿蘇鉄道高森駅・交流施設の完成見学会からスタートした「建築展2024」は、2月の巡回展を最後に全てのプログラムを無事に終えることができました。事業発足以来、4年毎にアートポリスの成果を多くの方々と共有し、これからの展望を考えることがこの建築展の目的です。地方創生へと導く全国に類のない事業であり、この建築展の開催によって、自ら行っている事業を正しく発信し、評価をいただき、次の事業展開に活かしていくことが、これまで36年に渡り、事業を実施してきた私たちの社会的使命ともいえます。

また、この建築展は、知事を実行委員長とし、アートポリスコミッショナー、県議会、市町村、大学、文化・観光・建築の各団体の方々とで実行委員会を組織し、官民が連携して実施することとしています。

建築展は、シンポジウム、見学会、展覧会からなりますが、今回は、県や実行委員会で主催したもの以外に、共催でのシンポジウムへの協力、海外の学生モニターツアーへの支援、建築ウィーク期間中の見学者への対応、協賛事業の開催など、建築関係団体だけでなく、施設管理者の皆様などにも様々な形で協力をいただきました。

建築展の企画運営にご尽力をいただいた伊東豊雄コミッショナーや3人のアドバイザーの方々をはじめ、建築展の開催に協力いただいた全ての皆様方に、改めて感謝申し上げます。

今回の建築展は、「持続する志」がテーマとされ、これまでの事業展開の中で、多くの方々に

育まれてきたアートポリス事業の厚みと拡がりを感じ得るプログラムであったことが、この記録誌の隅々から読み取っていただけたと思います。伊東コミッショナーの就任後、私自身が担当した「建築展2008」の頃は、まだ個々の建築が中心であり、そこからの市民への拡がり、また若手技術者の育成に意識が注がれていたと思います。そこを基点として考えた場合、度重なる災害からの創造的復興をめざす中で、県民の暮らしの礎となる地域のコミュニティを常にアートポリス事業の中心に捉え、そこから「新たな公共性を考える」に至る現在の姿は、地方独自の建築文化運動として実に感慨深いものがあります。また、県内の文化的資産の形成と持続的な建設業界の発展を考えた場合、今回、特に韓国や台湾などから多くの学生の方々に参加いただき、県内の建築やまちづくりに高い関心をいただいたことがとても心強いものとなりました。

社会経済の変化に即したアートポリスの事業展開は、私たち職員の間でもその捉え方が絶えず変化しています。しかし、地域が抱える社会課題への対応を通して、私たちはそれを「アートポリスの進化」と考えています。

さて、4年後の建築展のテーマは何でしょうか。「建築やまちづくりは楽しい」と若い人たちに夢と希望を与えているでしょうか。地域の方々、建設産業界の方々には私たちの取組みがどのように届いているでしょうか。私自身も、一人の県民として、わくわく感がとまりません。

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

参考資料

くまもとアートポリス建築展2024開催告知ポスター A1

くまもとアートポリス建築展2024

「持続する志」

くまもとアートポリス36年

伊東豊雄 くまもとアートポリスコミッショナー

EVENT SCHEDULE「4つのセッション」

- 11/19(土) 「モク活×〇〇」
- 11/24(土) 「建築ウィーク」
- 11/26(日) 「くまもとアートポリス36年とこれから」
- 11/28(火) 「新しい公共性とは何か」

くまもとアートポリス建築展2024実行委員会 事務局(熊本県建築館内)

くまもとアートポリス建築展2024開催告知リーフレット A4

くまもとアートポリス建築展2024

「持続する志」

伊東豊雄 くまもとアートポリスコミッショナー

1. アートポリス関係施設の一覧見学

2. 日曜建築と公共建築についてアートポリスプロジェクトの視座を学ぶ

3. 小さなコミュニティづくりに関する若手建築家等による事例

4. 新しい公共性とは何か

くまもとアートポリス36年とこれから

メインシンポジウムチラシ(両面) A4

くまもとアートポリス建築展2024 メインシンポジウム

「新しい公共性とは何か」

～若い建築家達の取り組む小さなコミュニティ～

若い建築家達は都市部でも地方でも地方でも行政の考える公共建築にはあまり関心がなく、空き家再生から周辺に拡がる小さなコミュニティをつくらうという活動に意気込みを感じているように感じます。私もこうした小さな活動をネットワーク化していくことにしか現在の日本社会で意図的な若い建築家の生きる道はないと考えます。シンポジウムではこうした活動を行っている若手建築家達に語り合ってもらいたい。

くまもとアートポリスコミッショナー 伊東豊雄

シンポジウム 11/23(土) 13:00~17:00 (OPEN12:00)

会場 ホテル熊本テルサ 1階テルサホール(熊本市中心区水前寺公園28-51)

交流会 11/23(土) 17:30~19:30

会場 ホテル熊本テルサ 3階たいち場(熊本市中心区水前寺公園28-51)

くまもとアートポリス建築展2024 メインシンポジウム

Program

第1部 基調講演

これからの公共建築は「みんなの家」である

伊東豊雄 くまもとアートポリスコミッショナー

「小さなコミュニティに関するシンポジウムの主旨を位置づけるため、出演者や参加者に向けてのレクチャーとして講演いただきます。

第2部 事例発表

小さなコミュニティづくりに関する若手建築家等による事例

大阪、東京、長崎、長野を拠点として活動している若手建築家等の取組を紹介いただきます

第3部 ディスカッション

新しい公共性とは何か

第2部で小さなコミュニティづくりに関する若手建築家等と、(まもとアートポリスコミッショナー・アドバイザーにより、「新しい公共性とは何か」を議論します

モク活シンポジウムチラシ A4

くまもとアートポリス建築展2024

くまもとアートポリス×木材利用促進

モク活 R3

10/19 SAT.

くまもとアートポリスでは、これまで新しい木造建築を創ってきたアートポリスの人材育成事業として、県内の建築関係者と林業関係者が一緒になって、木造建築物の魅力を発信する取組みを「モク活」と位置づけています。

県産材を活用し、地域で育て、地域でつくる取組みなど木造建築の一層の整備推進を図ることで、県産材の利活用促進につなげるため、2022年度は「木材活用の可能性や県産材の木材供給に求めるもの」をテーマに、2023年度は、「木材のことをもっと知りたい」をテーマにシンポジウムを開催しました。

3年目となる今年度は、これまでの「モク活」の取り組みを踏まえ、各プレゼンターがキーワード(〇〇)を設定し、木材利用促進の活動の事例を発表する場として、『モク活×〇〇』をテーマにシンポジウムを開催します。

今回も例年以上に熱い議論が期待されます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

日時/令和6年(2024年)10月19日(土) 13:30-16:45

場所/ホテル熊本テルサ テルサホール (熊本市中心区水前寺公園28-51) 定員250名 参加費無料

内容/第1部 建築家や林業関係者などによる事例発表

※事例発表資料は10月4日等にて事前に公開

第2部 建築家や林業関係者などによるディスカッション

交流会/会場: ホテル熊本テルサ 1階レストラン 料金: 5,000円

主催/熊本県(林業振興課・建築課)

共催/「一社」熊本県建築士事務所協会

問い合わせ 熊本県建築館(アートポリス事務局) 電話096-333-2537

くまもとアートポリス建築展2024展覧会パネル

くまもとアートポリス建築展 2024 展覧会

くまもとアートポリス 36年とこれから

くまもとアートポリス建築展2024

くまもとアートポリス36年とこれから

トークイベントチラシ A4

くまもとアートポリス建築展2024

展覧会企画トークイベント

小さな風景と建築

11月16日(土) 13:30-16:15

熊本県現代美術館ホームギャラリー(熊本市中心区上通町2番3号)

入場無料・定員100名(事前申込優先) 事前申込の QRコード

Guests | 乾 久美子(乾久美子建築設計事務所)

桂 英昭(司会・くまもとアートポリスアドバイザー)

アートプロジェクトの設計者であり、アートポリス推進委員を務められるなど、くまもとアートポリス事業に深く関わっていただいている乾久美子氏。

「小さな風景と建築」をテーマに乾久美子氏によるトークを行い、その後、これまでのくまもとアートポリスに対する評価や地域に与えてきた効果、これからのアートポリスへの期待などについて、会場参加者と一緒にトークセッションを開催します。

展覧会 くまもとアートポリス36年とこれから

田中道子氏によるアートポリス建築家へのインタビュー動画を同日公開

山本雅博、森田雅之、伊藤孝典、乾久美子氏へ

会場・田中道子氏アートポリスについてインタビュー

◎熊本県現代美術館 10:00~20:00

主催 | 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会

主催 CAMK 熊本県現代美術館

問合せ | 実行委員会事務局(熊本県建築館) 096-333-2537

くまもとアートポリス建築展2024

展覧会企画トークイベント

小さな風景と建築

11月16日(土) 13:30-16:15

熊本県現代美術館ホームギャラリー(熊本市中心区上通町2番3号)

入場無料・定員100名(事前申込優先) 事前申込の QRコード

Guests | 乾 久美子(乾久美子建築設計事務所)

桂 英昭(司会・くまもとアートポリスアドバイザー)

アートプロジェクトの設計者であり、アートポリス推進委員を務められるなど、くまもとアートポリス事業に深く関わっていただいている乾久美子氏。

「小さな風景と建築」をテーマに乾久美子氏によるトークを行い、その後、これまでのくまもとアートポリスに対する評価や地域に与えてきた効果、これからのアートポリスへの期待などについて、会場参加者と一緒にトークセッションを開催します。

展覧会 くまもとアートポリス36年とこれから

田中道子氏によるアートポリス建築家へのインタビュー動画を同日公開

山本雅博、森田雅之、伊藤孝典、乾久美子氏へ

会場・田中道子氏アートポリスについてインタビュー

◎熊本県現代美術館 10:00~20:00

主催 | 熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会

主催 CAMK 熊本県現代美術館

問合せ | 実行委員会事務局(熊本県建築館) 096-333-2537

アートポリスモニターツアーチラシ A4

くまもとアートポリス建築展2024
アートポリス
モニターツアー
参加者募集

11/24 SUN

参加費無料 定員35名（事前申込）
※バス、昼食、保険料等は実行委員会が負担します。

集合解散！熊本駅新幹線口集合 午前9時集合、午後5時解散
見学先！
○新阿蘇大橋展望所・ミュージウム（熊本地蔵みんまの家利活用）
○熊本地震震災ミュージアムK10KU
○南阿蘇鉄道高森駅・交流施設
○エバーフィールド木材加工場

参加条件！当ツアーはモニターツアーとするため、参加者は以下についてツアー終了後にアンケート等に回答することを条件とします。
・アンケートへの回答
・参加者SNS等での情報発信（アカウントがない場合は、記事原稿を事務局に提出）

アートポリス建築展2024メインシンポジウム
「新しい公共性とは何か」
伊東豊雄 家成俊樹 金野千恵
佐々木翔 森田秀之 ほか
熊本テルサアルカ 午後1時～午後5時

主催／熊本県・くまもとアートポリス建築展2024実行委員会
問合せ！実行委員会事務局（熊本県建築課）096-333-2537

建築ウィーク・特別見学会チラシ A4

くまもとアートポリス建築展2024
アートポリス建築ウィーク
特別見学会 参加者募集

11/13 WED 15:00 熊本中央警察署
設計/藤原一男+太宏設計事務所
アートポリス参加第一号。1990年落成から34年経つ建築は今なお存在感が読めます。

11/16 SAT 10:30 宇土市立宇土小学校
設計/小嶋一浩+赤松佳珠子
「L型の壁」によってゆるやかに区切られた中庭を囲むフナールーム空間の小学校。

先着15名
先着50名
先着30名

特別見学会
参加申込

さらに 一斉見学開催
アートポリス推進賞受賞施設、アートポリス'92選定既存建造物も含めたアートポリス関連施設で、イベントに参加いただいた施設の一斉見学を開催します。
詳細は、ホームページをご確認ください。

熊本県総合防災航空センター
設計/小川次郎+トリコ・シムサマイト設計
熊本県産木材を活用したダイナミックな空間をこらえた庁舎です。

アートポリス建築展2024
イベント情報公開中

県政広報テレビ「GO!くまモン★ナビ」 2024年11月15日(金)放送

タイトル / 「個性的で魅力ある建造物で地域活性化をめざす!」



くまもとアートポリス建築展2024
巡回展 11月～令和7年2月
会場は県ホームページでお知らせします

メインシンポジウム「新しい公共性とは何か」
11月23日(土) 13時～17時
会場:ホテル熊本テルサ 1階テルサホール など

©熊本県くまモン

NHK熊本放送局「クマロク!」 2025年1月7日(火)放送

タイトル / 「36年前に始まった「くまもとアートポリス」プロジェクト。代表を務める建築家・伊東豊雄さんの思いを紹介」



南阿蘇鉄道高森駅・交流施設完成見学会チラシ A4

2024年度 くまもとアートポリス人材育成事業
南阿蘇鉄道高森駅周辺整備
完成見学会

設計者 太田 浩史/ヌープ

日時／令和6年(2024年) 7月14日(日) 10:00-11:00
場所／阿蘇郡高森町高森1537-2 (南阿蘇鉄道高森駅)
※車でお越しの際は、高森湧水トンネル駐車場をご利用ください

定員／100名 ※参加費無料、事前申込制
内容／設計者による説明及び現場見学
主催／くまもとアートポリス事務局（熊本県建築課）協力／高森町、南阿蘇鉄道株式会社
企画主催で、13:30から設計者などによるトークライブが開催されます

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ARTPOLIS

芦北町地域優良賃貸住宅完成見学会チラシ A4

くまもとアートポリス建築展2024
アートポリス完成見学会
芦北町湯浦地区地域優良賃貸住宅

設計／片山和俊+龍口元哉+太宏設計事務所

2024 12/14 SAT.

第1回 10:30～11:30 (定員：30名)
第2回 13:00～14:00 (定員：30名)
参加費無料、事前申込制
場所／〒北町芦北町湯浦91番地1

主 催 熊本県、くまもとアートポリス建築展2024実行委員会、芦北町
問合せ 実行委員会事務局(熊本県建築課) 電話 096-333-2537

熊本日日新聞 タウンパケット 2024年11月2日(土)、3日(日)、9日(土)、10日(日)

くまもとアートポリス
建築展2024トークイベント開催!!
[参加無料]11/16(土)13時 熊本市
現代美術館 講演乾久美子氏
上通アーケードで展覧会同時開催
☎096-333-2537熊本県建築課

くまもとアートポリス
建築展2024シンポジウム開催!!
[参加無料]11/23(土)13時 ホテル
熊本テルサ 定員250名 講演伊東
豊雄氏 その他、事例発表等も予定
☎096-333-2537熊本県建築課

〈新聞〉

西日本建設新聞 2024年11月11日(月)

くまもとアートポリス建築展2024 シンポジウム
新しい公共性とは何か
～若い建築家達の取り組む小さなコミュニティ～

1の伊東豊雄氏「これからの公共性とは何か」
2の若手建築家「新しい公共性とは何か」
3の若手建築家「新しい公共性とは何か」
4の若手建築家「新しい公共性とは何か」
5の若手建築家「新しい公共性とは何か」
6の若手建築家「新しい公共性とは何か」
7の若手建築家「新しい公共性とは何か」
8の若手建築家「新しい公共性とは何か」
9の若手建築家「新しい公共性とは何か」
10の若手建築家「新しい公共性とは何か」

〈ホームページ〉

くまもとアートポリス建築展2024実行委員会会則

第1章 総則	
(名称)	
第1条 この団体は、くまもとアートポリス建築展2024実行委員会(以下「 本会 」という。)という。	
(目的)	
第2条 本会は、「くまもとアートポリス」の取組みとこれからの展望について、広く国内外に発信する「くまもとアートポリス建築展2024」の実行を目的とする。	
(業務)	
第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次のことを行う。 (1)くまもとアートポリス建築展2024の計画に関すること。 (2)くまもとアートポリス建築展2024の開催準備に関すること。 (3)くまもとアートポリス建築展2024の実施運営に関すること。 (4)その他、本会の目的達成に必要な事業に関すること。	
第2章 委員等	
(役員の種別及び選任)	
第4条 本会には、次の役員を置く。 会 長 1名 副会長 1名 委 員 14名以内 監 事 1名 2 会長は熊本県知事とする。 3 副会長は、くまもとアートポリスコミッショナーとする。 4 会長、副会長以外の委員及び監事は、会長が委嘱する。 5 委員及び監事は、相互に兼ねることはできない。	
(役員の職務)	
第5条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。 3 委員は、本会を構成し、会務の執行を決定する。 4 監事は、本会の業務執行状況を監査し、本会に報告する。	
(任期)	
第6条 会長、副会長、委員及び監事(以下「 委員等 」という。)の任期は、本会の目的を達成するまでとする。ただし、委員等が委嘱時におけるそれぞれの機関及び団体の役職を離れたときは、会長は当該委員等を解職し、解職された委員等の後任の役職の者に、新たに委員等を委嘱する。	
第3章 実行委員会	
(構成)	
第7条 本会は、委員等をもって構成する。また、委員等が本会に出席できない場合は、委員等が定める代理人を含めて本会を構成することができるものとする。	
(機能)	
第8条 本会は、この会則に定めるもののほか次の事項を議決する。	

(1)事業計画の決定 (2)事業報告の承認 (3)その他、本会の運営に関する重要な事項
(招集)
第9条 本会は、会長が招集する。
(議長)
第10条 本会の議長は、会長又はあらかじめ会長が指名する者がこれに当たる。
(議決)
第11条 本会の議決は、本会構成員の総数の半数以上が出席する本会において、出席者の過半数の同意をもって決する。ただし、可否同数の場合は議長の決するところによる。 2 前項の規定にかかわらず、会長が必要と認めた場合には、書面又はオンライン等の電磁的方法により委員等は議決権を行使することができるものとする。

第4章 会計
(経費)
第12条 本会の経費は、負担金その他の収入をもって充てる。
(会計年度)
第13条 本会の会計年度は、令和6年4月1日に始まり、令和7年3月31日に終了する。 2 会計に関し必要な事項は、事務局長が定めるもののほか、熊本県の財務に関する諸規則の例による。
(予算及び決算)
第14条 収支予算は、本会の議決を経て定め、収支決算は、監事の監査を経て本会の承認を得なければならない。
第5章 事務局
第15条 本会の事務を処理するために事務局を熊本県土木部建築住宅局建築課内に置く。 2 本会の事務局長は熊本県土木部建築住宅局建築課長とする。 3 事務局に関し必要な事項は、事務局長が別に定める。

第6章 雑則
(解散)
第16条 本会は、その目的が達成されたときに解散する。
(運営規則)
第17条 この会則に定めのあるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な規則は、会長が別に定める。

附 則
この会則は、令和6年7月18日から施行する。

くまもとアートポリス建築展2024実行委員会 委員構成

役 職	委員名	氏 名()は前任者
会 長	熊本県知事	木村 敬
副会長	くまもとアートポリスコミッショナー	伊東 豊雄
委 員	熊本県議会建設常任委員会委員長	竹崎 和虎
委 員	熊本県市長会会長	荒木 義行 (会長 佐藤 義興)
委 員	熊本県町村会会長	竹崎 一成
委 員	熊本県文化協会会長	村上 輝和
委 員	(公社)熊本県観光連盟会長	森 敬輔
委 員	国立大学法人熊本大学学長	小川 久雄
委 員	公立大学法人熊本県立大学学長	堤 裕昭
委 員	(一社)日本建築学会 九州支部熊本支所長	本間 里見
委 員	(一社)熊本県建設業協会会長	前川 浩志
委 員	(一社)熊本県建築協会会長	鐵谷 浩之
委 員	(一社)熊本県建築士事務所協会会長	田中 之博
委 員	(公社)日本建築家協会 九州支部熊本地域会代表幹事	吉永 啓
委 員	(一財)熊本県建築住宅センター理事長	北原 昭男
委 員	熊本県土木部建築住宅局長	小路永 守
監 事	(公社)熊本県建築士会副会長	入江 美由紀

協力・後援団体	
協 力	熊本県文化協会、(公社)熊本県観光連盟、熊本大学、熊本県立大学、(一社)日本建築学会九州支部熊本支所、(一社)熊本県建設業協会、(一社)熊本県建築協会、(一社)熊本県建築士事務所協会、(公社)熊本県建築士会、(公社)日本建築家協会九州支部熊本地域会、(一財)熊本県建築住宅センター、熊本市現代美術館〔熊本市・(公財)熊本市美術文化振興財団〕、(一社)KKN、(株)エバーフィールド、(一社)公共建築協会九州地区事務局
後 援	熊本日日新聞社、西日本建設新聞社、NHK熊本放送局、熊本放送、テレビ熊本、熊本県民テレビ、熊本朝日放送、エフエム熊本、熊本シティエフエム

くまもとアートポリス建築展 2024

「持続する志」

— くまもとアートポリス36年 —

Exhibition of Architecture KUMAMOTO ARTPOLIS 2024

総合記録

2025年3月発行

発行：くまもとアートポリス建築展2024実行委員会事務局

熊本県土木部建築住宅局建築課内

〒862-8570熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

TEL 096-333-2537

編集・デザイン：アートプロセス

くまもとアートポリスの取り組みはホームページやSNSなどで発信しています！



🏠 ホームページ



f Facebook



✂ エックス



📷 Instagram



▶ YouTube